

基本計画書

基本計画												
事項	記入欄								備考			
計画の区分	学部設置											
フリガナ設置者	ガッコウセイジン シンショウオホタニガクエン 学校法人 真宗大谷学園											
フリガナ大学の名称	オホタニダイク 大谷大学 (Otani University)											
大学本部の位置	京都府京都市北区小山上総町20番地											
大学の目的	本学は学校基本法及び学校教育法の定めるところに従い、仏教の精神に則り、人格を育成するとともに、仏教並びに人文に関する学術を教授研究し、広く世界文化に貢献することを目的とする。											
新設学部等の目的	現代社会の諸課題に向き合うことを通して、地域社会など身近な場において、異なる他者と敬い合いながら生きることのできる世界を構築する構想力と実践力を身につけた人物の育成をめざす。											
新設学部等の概要	新設学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	取容定員	学位又は称号	開設時期及び開設年次	所在地				
	社会学部 [Faculty of Sociology]	年	人	年次人	人	学士 (社会学)	年 月 第 年次	京都府京都市北区 小山上総町20番地				
	現代社会学科 [Department of Sociology]	4	120	—	480		平成30年4月 第1年次					
コミュニティデザイン学科 [Department of Community Design]	4	100	—	400	学士 (社会学)	平成30年4月 第1年次						
計		220	—	880								
同一設置者内における変更状況 (定員の移行、名称の変更等)	文学部 社会学科 (廃止) (△120) 人文情報学科 (廃止) (△100) 教育・心理学科 (廃止) (△100) ※平成30年4月学生募集停止 文学部 真宗学科 [定員減] (△10) (平成30年4月) 哲学科 [定員減] (△10) (平成30年4月) 国際文化学科 [定員減] (△10) (平成30年4月) 教育学部 教育学科 (130) (平成29年4月届出予定) 短期大学部 仏教科 (廃止) (△20) ※平成30年4月学生募集停止											
教育課程	新設学部等の名称	開設する授業科目の総数						卒業要件単位数				
		講義	演習	実験・実習	計							
	現代社会学科	91 科目	62 科目	4 科目	157 科目	124 単位						
コミュニティデザイン学科	114 科目	46 科目	11 科目	171 科目	124 単位							
教員の組織概要	学部等の名称			専任教員等					平成29年4月届出予定			
	新設	社会学部	現代社会学科	教授	准教授	講師	助教	計		助手	兼教員等	
			コミュニティデザイン学科	6 (6)	3 (3)	2 (2)	0 (0)	11 (11)		0 (0)	27 (27)	
		教育学部	教育学科	5 (5)	3 (3)	3 (3)	0 (0)	11 (11)		0 (0)	12 (12)	
	既設	計		10 (10)	7 (7)	2 (2)	0 (0)	19 (19)		0 (0)	27 (27)	
				21 (21)	13 (13)	7 (7)	0 (0)	41 (41)		0 (0)	- (-)	
				3 (3)	2 (2)	3 (3)	2 (2)	10 (10)		0 (0)	6 (6)	
	要	分	文学部	真宗学科	3 (3)	3 (3)	2 (2)	2 (2)		10 (10)	0 (0)	6 (6)
			仏教学科	3 (5)	3 (3)	2 (1)	2 (2)	10 (11)		0 (0)	13 (13)	
			哲学科	3 (5)	4 (2)	0 (0)	1 (1)	8 (8)		0 (0)	17 (17)	
歴史学科			6 (6)	4 (3)	2 (2)	2 (2)	14 (13)	0 (0)	33 (33)			
文学科			6 (6)	5 (4)	2 (2)	2 (2)	15 (14)	0 (0)	27 (27)			
国際文化学科			3 (4)	4 (5)	1 (1)	2 (2)	10 (12)	0 (0)	22 (22)			
計	24 (29)	22 (20)	10 (8)	11 (11)	67 (68)	0 (0)	94 (94)					
合計	45 (50)	35 (33)	17 (15)	11 (11)	108 (109)	0 (0)	- (-)					

教員以外の職員の概要	職 種		専 任	兼 任	計							
	事 務 職 員		68 人 (68)	33 人 (33)	101 人 (101)							
	技 術 職 員		0 (0)	0 (0)	0 (0)							
	図 書 館 専 門 職 員		7 (7)	15 (15)	22 (22)							
	そ の 他 の 職 員		0 (0)	0 (0)	0 (0)							
	計		75 (75)	48 (48)	123 (123)							
校 地 等	区 分	専 用	共 用	共用する他の 学校等の専用	計							
	校 舎 敷 地	0.00 m ²	44,452.60 m ²	0.00 m ²	44,452.60 m ²	大谷大学短期大学部 と共用						
	運 動 場 用 地	0.00 m ²	29,680.12 m ²	0.00 m ²	29,680.12 m ²							
	小 計	0.00 m ²	74,132.72 m ²	0.00 m ²	74,132.72 m ²							
	そ の 他	0.00 m ²	11,464.30 m ²	0.00 m ²	11,464.30 m ²							
	合 計	0.00 m ²	85,597.02 m ²	0.00 m ²	85,597.02 m ²							
校 舎	専 用	共 用	共用する他の 学校等の専用	計								
	6,236.11 m ² (6,236.11 m ²)	47,260.21 m ² (47,260.21 m ²)	450.46 m ² (450.46 m ²)	53,946.78 m ² (53,946.78 m ²)	大谷大学短期大学部 と共用							
教室等	講義室	演習室	実験実習室	情報処理学習施設	語学学習施設							
	66 室	49 室	40 室	8 室 (補助職員 0人)	1 室 (補助職員 1人)	大学全体						
専 任 教 員 研 究 室	新設学部等の名称			室 数								
	現代社会学科			11 室								
	コミュニティデザイン学科			11 室								
図 書 ・ 設 備	新設学部等の名称	図書 〔うち外国書〕 冊	学術雑誌 〔うち外国書〕 種	電子ジャーナル 〔うち外国書〕	視聴覚資料 点	機械・器具 点	標本 点					
	現代社会学科	882,796 [181,621] (846,796 [175,621])	6,561 [667] (6,481 [647])	589 [530] (589 [530])	2,100 (2,080)	30 (30)	0 (0)	大学全体、大谷 大学短期大学部 との共用				
	コミュニティデザイン学科	882,796 [181,621] (846,796 [175,621])	6,561 [667] (6,481 [647])	589 [530] (589 [530])	2,100 (2,080)	30 (30)	0 (0)					
	計	882,796 [181,621] (846,796 [175,621])	6,561 [667] (6,481 [647])	589 [530] (589 [530])	2,100 (2,080)	30 (30)	0 (0)					
図 書 館	面積		閲覧座席数		収 納 可 能 冊 数							
	7,604.82 m ²		588		1,115,833		大学全体					
体 育 館	面積		体育館以外のスポーツ施設の概要									
	4,857.06 m ²		柔 道 場 弓 道 場									
経 費 の 概 要	経 費 の 見 積 り 方 法	区 分	開設前年度	第 1 年次	第 2 年次	第 3 年次	第 4 年次	第 5 年次	第 6 年次			
		教員 1 人 当り 研究費	現代社会学科 コミュニティデザイン学科		350千円	350千円	350千円	350千円	— 千円	— 千円	共同研究費等は大学 全体、 図書購入費、設備 購入費は、大谷大 学短期大学部との 共用図書および設 備として購入。 図書費には、電子 ジャーナル・デー タベースの整備費 を含む。 ※学生納付金は、 上から社会学部現 代社会学科、社会 学部コミュニティ デザイン学科	
		共同研 究費等	現代社会学科 コミュニティデザイン学科		80,000千円	80,000千円	80,000千円	80,000千円	— 千円	— 千円		
		図書購 入費	現代社会学科 コミュニティデザイン学科		65,970千円	65,000千円	65,000千円	65,000千円	— 千円	— 千円		
		設備購 入費	現代社会学科 コミュニティデザイン学科		38,300千円	8,000千円	8,000千円	8,000千円	— 千円	— 千円		
		学生 1 人 当り 納付金		第 1 年次	第 2 年次	第 3 年次	第 4 年次	第 5 年次	第 6 年次			
				1,190千円	1,140千円	1,140千円	1,140千円	— 千円	— 千円			
				1,190千円	1,140千円	1,140千円	1,140千円	— 千円	— 千円			
		学生納付金以外の維持方法の概要		手数料、寄付金、補助金、受取利息・配当金収入等								
		大 学 の 名 称 大谷大学										
既 設 大 学 等 の 状 況	学 部 等 の 名 称	修 業 年 限	入 学 定 員	編 入 学 定 員	収 容 定 員	学 位 又 は 称 号	定 員 超 過 率	開 設 年 度	所 在 地			
	文学部	—	745	—	2,995	—	1.05	—	京都府京都市北区 小山上総町20番地			
	真宗学科	4	70	—	280	学士(文学)	0.86	昭和40年度				
	仏教学科	4	25	—	135	学士(文学)	0.96	昭和24年度	平成27年度入学定員減(△35人)			
	哲学科	4	60	—	240	学士(文学)	0.72	昭和24年度				
	社会学科	4	120	—	460	学士(社会学)	1.21	昭和40年度	平成27年度入学定員増(20人)			
	歴史学科	4	100	—	400	学士(文学)	1.25	昭和40年度				
	文学科	4	70	—	280	学士(文学)	1.33	昭和40年度				
	国際文化学科	4	100	—	400	学士(文学)	0.96	平成5年度				
	人文情報学科	4	100	—	400	学士(文学)	0.88	平成12年度				
教育・心理学科	4	100	—	400	学士(教育学)	1.16	平成21年度					

大学の名称		大谷大学大学院							
学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	所在地	
	年	人	年次人	人		倍			
文学研究科 (修士課程)	—	79	—	158	—	0.40	—	京都府京都市北区 小山上総町20番地	
(博士後期課程)	—	18	—	54	—	0.33	—		
真宗学専攻 (修士課程)	2	20	—	40	修士(文学)	0.70	昭和28年度		
(博士後期課程)	3	3	—	9	博士(文学)	0.99	昭和30年度		
仏教学専攻 (修士課程)	2	15	—	30	修士(文学)	0.53	昭和28年度		
(博士後期課程)	3	3	—	9	博士(文学)	0.44	昭和30年度		
哲学専攻 (修士課程)	2	10	—	20	修士(文学)	0.15	昭和29年度		
(博士後期課程)	3	3	—	9	博士(文学)	0.11	昭和31年度		
社会学専攻 (修士課程)	2	6	—	12	修士(文学)	0.08	平成11年度		
(博士後期課程)	3	3	—	9	博士(文学)	0.00	平成13年度		
仏教文化専攻 (修士課程)	2	10	—	20	修士(文学)	0.75	昭和29年度		
(博士後期課程)	3	3	—	9	博士(文学)	0.22	昭和31年度		
国際文化専攻 (修士課程)	2	10	—	20	修士(文学)	0.00	平成11年度		
(博士後期課程)	3	3	—	9	博士(文学)	0.22	平成13年度		
教育・心理学専攻 (修士課程)	2	8	—	16	修士(教育学)	0.06	平成25年度		
大学の名称		大谷大学短期大学部							
学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	所在地	
	年	人	年次人	人		倍			
仏教科	2	20	—	40	短期大学士 (仏教)	0.40	昭和25年度	京都府京都市北区 小山上総町20番地	
幼児教育保育科	2	80	—	160	短期大学士 (幼児教育保育学)	0.90	昭和41年度		
大学の名称		九州大谷短期大学							
学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	所在地	
	年	人	年次人	人		倍			
仏教学科	2	10	—	20	短期大学士 (仏教学)	0.85	昭和45年度	福岡県筑後市 蔵敷495-1	
表現学科	2	50	—	100	短期大学士 (表現学)	1.19	昭和45年度		
幼児教育学科	2	100	—	200	短期大学士 (幼児教育学)	0.87	昭和45年度		
福祉学科	2	35	—	70	短期大学士 (介護福祉学)	0.46	平成11年度		
専攻科 福祉専攻	1	30	—	30		0.06	平成7年度		
附属施設の概要	[名称]	真宗総合研究所							
	[目的]	真宗あるいは仏教の立場から諸学問を総合すること、並びに仏教を通じた国際的な学術交流を推進すること							
	[所在地]	京都府京都市北区小山上総町 大谷大学真宗総合学術センター内							
	[設置年月]	昭和56年							
	[規模等]	専有面積 1,124.00 m ²							
	[名称]	大谷大学博物館							
[目的]	建学の精神に則り真宗・仏教文化財を中心に、考古学、歴史学、民俗学等に関する博物館資料の収集、保管、展示及び調査研究を行い、本学における教育及び研究の発展に資するとともに、一般社会に公開すること								
[所在地]	京都府京都市北区小山上総町 大谷大学真宗総合学術センター内								
[設置年月]	平成15年								
[規模等]	専有面積 1,069.48 m ²								

(注)

- 1 共同学科等の認可の申請及び届出の場合、「計画の区分」、「新設学部等の目的」、「新設学部等の概要」、「教育課程」及び「教員組織の概要」の「新設分」の欄に記入せず、斜線を引くこと。
- 2 「教員組織の概要」の「既設分」については、共同学科等に係る数を除いたものとする。
- 3 私立の大学又は高等専門学校等の収容定員に係る学則の変更の届出を行う場合は、「教育課程」、「教室等」、「専任教員研究室」、「図書・設備」、「図書館」及び「体育館」の欄に記入せず、斜線を引くこと。
- 4 大学等の廃止の認可の申請又は届出を行う場合は、「教育課程」、「校地等」、「校舎」、「教室等」、「専任教員研究室」、「図書・設備」、「図書館」、「体育館」及び「経費の見積もり及び維持方法の概要」の欄に記入せず、斜線を引くこと。
- 5 「教育課程」の欄の「実験・実習」には、実技も含むこと。
- 6 空欄には、「—」又は「該当なし」と記入すること。

教育課程等の概要															
(社会学部 現代社会学科)															
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
共通基礎科目	総合科目	人間学Ⅰ	1前・後	4			○								兼3
		人間学Ⅱ	2・3・4前・後	4			○								兼13
	大学導入	学びの発見	1前	2				○		1					
	必修 外国語	英語Ⅰ	1前・後	4				○							兼9
	英語Ⅱ	2前・後	4				○							兼12	
	小計（5科目）	—	18	0	0	—	—	—	0	1	0	0	0	兼29	
学科専門科目	演習	社会学演習Ⅰa	1前	2				○		4	3	1			
		社会学演習Ⅰb	1後	2				○		4	3	1			
		社会学演習Ⅱa	2前	2				○		4	2	2			
		社会学演習Ⅱb	2後	2				○		4	2	2			
		社会学演習Ⅲa	3前	2				○		4	2	2			
		社会学演習Ⅲb	3後	2				○		4	2	2			
		社会学演習Ⅳa	4前	2				○		6	1	1			
		社会学演習Ⅳb	4後	2				○		6	1	1			
	小計（8科目）	—	16	0	0	—	—	—	6	3	2	0	0	0	
	入門・概論	仏教社会論	2前	2				○							兼1
		社会学概論	2後	2				○			1				
		現代社会基礎	1前	2				○				1			
社会学入門		1後	2				○		3						
小計（4科目）	—	8	0	0	—	—	—	3	1	1	0	0	兼1		
講義	現代社会論	1前	2				○			1					
	人間関係論	1前	2				○			1					
	心理学基礎	1・2後	2				○							兼1	
	現代家族論	2前	2				○							兼1	
	ジェンダーと社会	2後	2				○							兼1	
	比較心理学	2・3前	2				○				1				
	社会心理学	3・4後	2				○							兼1	
	現代社会とコミュニケーション	2後	2				○			1					
	教育社会学	3・4前	2				○							兼1	
	個人と公共	1前	2				○			1					
	社会問題論	2後	2				○				1				
	地域社会論	1後	2				○				1				
	地域福祉論1	2前	2				○							兼1	
	地域福祉論2	2後	2				○							兼1	
	環境社会学	2・3前	2				○							兼1	
	グローバルイゼーション論	3前	2				○			1					
	市民活動論	1後	2				○							兼1	
	ボランティア論	1前	2				○							兼1	
	地方自治論	3前	2				○							兼1	
	犯罪と社会	2前	2				○			1					
	現代文化論	1後	2				○			1					
	文化社会学	2・3後	2				○							兼1	
	観光社会学	2・3前	2				○							兼1	
宗教と社会	2後	2				○							兼1		
大衆文化論	1・2前	2				○							兼1		
スポーツと社会	1・2後	2				○							兼1		
消費社会論	3・4前	2				○							兼1		
文化人類学	2・3前	2				○			1						
アジア社会論	2・3後	2				○							兼1		
情報と倫理	1後	2				○							兼1		

教育課程等の概要															
(社会学部 現代社会学科)															
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
講義	情報社会論	1後		2		○			1						兼1
	情報技術論	2後		2		○									兼1
	社会思想史	3・4後		2		○									兼1
	社会学史	3・4前		2		○									兼1
	社会調査論	2・3前		2		○									兼1
小計 (35科目)		—	0	70	0	—			4	3	1	0	0	兼19	
学科専門科目	A	社会統計基礎	1前	2			○		1		1				兼1
		フィールドワーク技法基礎	1後	2			○		2						
	B	フィールドワーク入門1	2前	2			○		1		1				兼1
		フィールドワーク入門2	2後	2			○		1		1				兼1
		探究フィールドワーク1	3前	2			○			2	1				
		探究フィールドワーク2	3後	2			○			2	1				
		ソーシャル・ドキュメント分析1	3前	2			○		2						
		ソーシャル・ドキュメント分析2	3後	2			○		2						
		社会統計演習1	2前	2			○		1		1				
		社会統計演習2	2後	2			○		1		1				
		メディア・コミュニケーション分析1	3前	2			○		1						
		メディア・コミュニケーション分析2	3後	2			○		1						
		社会学文献講読 (人間関係) 1	2・3前	2			○		1						
		社会学文献講読 (人間関係) 2	2・3後	2			○		1						
		社会学文献講読 (公共社会) 1	2・3前	2			○			1					B群より 16単位 選択必修
		社会学文献講読 (公共社会) 2	2・3後	2			○			1					
		社会学文献講読 (現代文化) 1	2・3前	2			○		1						
		社会学文献講読 (現代文化) 2	2・3後	2			○		1						
		エスノグラフィ講読・作成1	3・4前	2			○		1						
		エスノグラフィ講読・作成2	3・4後	2			○								兼1
	文化人類学文献講読1	3・4前	2			○								兼1	
	文化人類学文献講読2	3・4後	2			○								兼1	
	社会情報学文献講読1	2・3・4前	2			○			1						
	社会情報学文献講読2	2・3・4後	2			○								兼1	
	社会心理学文献講読1	3・4前	2			○								兼1	
	社会心理学文献講読2	3・4後	2			○								兼1	
小計 (26科目)		—	4	48	0	—			6	3	2	0	0	兼5	
卒業研究	卒業研究	4通	8				○		6	1	1	0	0	0	
小計 (1科目)		—	8	0	0	—			6	1	1	0	0	0	
現代総合科目	キャリア形成系科目	日本国憲法	1・2・3・4前・後	2		○									兼1
		発想から表現へ	1・2・3・4後	2		○									兼1
		思考法入門	1・2・3・4後	2				○							兼1
		日本語表現 (入門)	1・2・3・4前・後	2				○							兼1
		日本語表現 (実践)	2・3・4前	2				○							兼1
		探究基礎演習	1・2・3・4後	2				○							兼1
		ポルトガル語圏のくらしと言葉1	1・2・3・4前	2				○							兼1
		ポルトガル語圏のくらしと言葉2	1・2・3・4後	2				○							兼1
		インターンシップ1 大学コンソ京都	2・3後	2				○			1				
		インターンシップ2 大谷大学	1・2・3・4後	2				○							兼1
		キャリアデザイン概論1	1・2・3・4前	2			○								兼1
		キャリアデザイン概論2	1・2・3・4後	2			○								兼1
		キャリアデザイン実践1	2・3・4後	2			○								兼1
		キャリアデザイン実践2	3・4前	2			○								兼1
		ワード・プロセッシング入門	1・2・3・4前	2				○							兼1
		ワード・プロセッシング応用	1・2・3・4後	2				○							兼1

教育課程等の概要														
(社会学部 現代社会学科)														
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手	
現代総合科目 歴史文化系科目	ブッダに学ぶ	1・2・3・4前		2		○								兼1
	親鸞に学ぶ	1・2・3・4後		2		○								兼1
	部落差別と大谷派教団1	1・2・3・4前		2		○								兼1
	部落差別と大谷派教団2	1・2・3・4後		2		○								兼1
	部落差別と浄土真宗1	1・2・3・4前		2		○								兼1
	部落差別と浄土真宗2	1・2・3・4後		2		○								兼1
	部落史論1	1・2・3・4前		2		○								兼1
	部落史論2	1・2・3・4後		2		○								兼1
	反カースト運動論	1・2・3・4後		2		○								兼1
	アイヌ民族と共に	1・2・3・4前		2		○								兼1
	アジア侵略と宗教	1・2・3・4後		2		○								兼1
	非戦の系譜	1・2・3・4前		2		○								兼1
	仏教福祉論	1・2・3・4後		2		○								兼1
	小計 (27科目)				0	54	0			0	0	0	0	0
合計 (157 科目)				54	270	0			6	3	2	-	-	兼89
学位又は称号		学士		学位又は学科の分野			社会学・社会福祉学関係							
卒業要件及び履修方法							授業期間等							
①共通基礎科目18単位以上（人間学Ⅰ・Ⅱ8単位、大学導入科目2単位、必修外国語8単位） ②学科専門科目92単位以上（演習16単位、入門・概論8単位、講義科目から40単位以上、実践研究[A]4単位、[B]16単位以上、卒業研究8単位を修得） ③現代総合科目から6単位以上を修得 ④他学部開講科目を興味・関心により履修した場合、最大8単位までを自己選択科目の単位として認める ①～④の科目を修得し、124単位以上を履修すること ＊必修外国語は英語Ⅰ・Ⅱの8単位であるが、学生の希望により、文学部に開講するドイツ語、フランス語、中国語、韓国・朝鮮語を履修させることができる ＊履修科目の登録単位数の上限は、年間48単位まで							1学年の学期区分		2期					
							1学期の授業期間		15週					
							1時限の授業時間		90分					

(注)

- 学部等、研究科等若しくは高等専門学校等の学科の設置又は大学における通信教育の開設の届出を行おうとする場合には、授与する学位の種類及び分野又は学科の分野が同じ学部等、研究科等若しくは高等専門学校等の学科（学位の種類及び分野の変更等に関する基準（平成十五年文部科学省告示第三十九号）別表第一備考又は別表第二備考に係るものを含む。）についても作成すること。
- 私立の大学若しくは高等専門学校等の収容定員に係る学則の変更の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合、大学等の設置者の変更の認可を受けようとする場合又は大学等の廃止の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合は、この書類を作成する必要はない。
- 開設する授業科目に応じて、適宜科目区分の枠を設けること。
- 「授業形態」の欄の「実験・実習」には、実技も含むこと。

教育課程等の概要																
(社会学部 コミュニティデザイン学科)																
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
共通基礎科目	総合科目	人間学Ⅰ 人間学Ⅱ	1前・後 2・3・4前・後	4 4			○ ○			1					兼3 兼12	
	大学導入	学びの発見	1前	2				○			1					
	必修 外国語	英語Ⅰ 英語Ⅱ	1前・後 2前・後	4 4				○ ○							兼9 兼12	
	小計（5科目）		—	18	0	0	—			1	0	1	0	0	兼29	
学科専門科目	演習	コミュニティデザイン演習Ⅰa	1前	2				○		4	2	2				
		コミュニティデザイン演習Ⅰb	1後	2				○		4	2	2				
		コミュニティデザイン演習Ⅱa	2前	2				○		2	3	3				
		コミュニティデザイン演習Ⅱb	2後	2				○		2	3	3				
		コミュニティデザイン演習Ⅲa	3前	2				○		3	2	3				
		コミュニティデザイン演習Ⅲb	3後	2				○		3	2	3				
		コミュニティデザイン演習Ⅳa	4前	2				○		3	2	3				
		コミュニティデザイン演習Ⅳb	4後	2				○		3	2	3				
	小計（8科目）		—	16	0	0	—			5	3	3	0	0	0	
	概論	A	仏教社会論	2前	2				○							兼1
			社会学概論	2後	2				○							兼1
			コミュニティデザイン概論	1前	2				○		1					
		B	公共政策概論1	1前		2			○							兼1
			公共政策概論2	1後		2			○							兼1
社会情報学概論1			1前		2			○		1					B群より 4単位 選択必修	
現代社会と福祉1	1後		2			○		1	1							
現代社会と福祉2	1後		2			○		1								
小計（9科目）		—	6	12	0	—			3	1	0	0	0	兼3		
講義	ボランティア論	1前		2			○					1				
	現代社会論	1前		2			○							兼1		
	生活問題論	1前		2			○							兼1		
	社会政策論	1前		2			○							兼1		
	メディアと市民社会	1前		2			○			1						
	市民活動論	1後		2			○					1				
	現代社会とコミュニケーション	2後		2			○							兼1		
	社会調査論	2前		2			○							兼1		
	宗教と社会	2後		2			○							兼1		
	情報と倫理	1後		2			○							兼1		
	情報社会論	1後		2			○							兼1		
	地域と経済	2前		2			○		1							
	非営利組織マネジメント論	2後		2			○			1						
	コミュニティ形成論	2後		2			○		1							
	ソーシャルビジネス論	3前		2			○			1						
	地域と環境	2前		2			○		1							
	犯罪と社会	2前		2			○							兼1		
	地方自治論	3前		2			○		1							
	地域社会論	1後		2			○							兼1		
	現代家族論	2前		2			○							兼1		
	グローバリゼーション論	3前		2			○							兼1		
	社会問題論	2後		2			○							兼1		
	情報技術論	2後		2			○			1						
コミュニティプランニング論	3後		2			○		1								
情報マーケティング論	2後		2			○							兼1			
社会福祉発達史	2後		2			○		1								
災害と防災	2後		2			○		1								
ターミナルケア論	3後		2			○							兼1			

教育課程等の概要															
(社会学部 コミュニティデザイン学科)															
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
学科専門科目	高齢者福祉	1後		2		○									兼1
	障害者福祉	1後		2		○									兼1
	児童福祉	1後		2		○									兼1
	社会保障論1	2前		2		○					1				
	社会保障論2	2後		2		○					1				
	地域福祉論1	2前		2		○			1						
	地域福祉論2	2後		2		○			1						
	心理学	1前		2		○					1				
	社会学	1前		2		○									兼1
	医学一般	2前		2		○									兼1
	社会福祉調査論	2前		2		○									兼1
	介護概論	2前		2		○									兼1
	公的扶助論	2後		2		○									兼1
	就労支援	2後		1		○					1				
	司法福祉論	2後		1		○									兼1
	福祉行財政と福祉計画	3前		2		○						1			
	社会福祉施設経営論	3前		2		○									兼1
	保健医療サービス論	3前		2		○									兼1
	権利擁護と成年後見制度	3前		2		○									兼1
	相談援助の基盤と専門職1	1前		2		○					1				
	相談援助の基盤と専門職2	1後		2		○					1				
	相談援助の理論と方法1	1後		2		○									兼1
	相談援助の理論と方法2	2前		2		○									兼1
	相談援助の理論と方法3	2後		2		○									兼1
	相談援助の理論と方法4	3前		2		○									兼1
	小計（53科目）		—	0	104	0	—			4	2	3	0	0	兼26
(プロジェクト研究)	プロジェクト研究入門Ⅰ	1前		2			○		4	3	1				
	プロジェクト研究入門Ⅱ	1後		2			○		3	2					
	プロジェクト研究実践Ⅰ	2前		4				○	2	2	1				
	プロジェクト研究実践Ⅱ	2後		4				○	2	2	1				
	プロジェクト研究実践Ⅲ	3前		4				○	3	2	1				
	プロジェクト研究実践Ⅳ	3後		4				○	3	2	1				
	社会福祉援助技術演習1	1後		2			○								兼2
	社会福祉援助技術演習2	2前		2			○								兼2
	社会福祉援助技術演習3	2後		2			○								兼2
	社会福祉援助技術演習4	3前		2			○								兼2
	社会福祉援助技術演習5	4前		2			○			1	1				兼1
	社会福祉援助技術現場実習指導Ⅰ	2後		2			○			1	2				
	社会福祉援助技術現場実習指導Ⅱ	3前		2			○				1				兼3
	社会福祉援助技術現場実習指導Ⅲ	4前		2			○				1				兼3
	社会福祉援助技術現場実習	3後		4				○		1	2				兼3
	社会福祉学特殊演習Ⅰ	4前		2				○			1				
	社会福祉学特殊演習Ⅱ	4後		2				○			1				
小計（17科目）		—	0	44	0	—			5	3	3	0	0	兼6	
卒業研究	卒業研究	4通	8				○		3	2	3	0	0	0	
小計（1科目）		—	8	0	0	—			3	2	3	0	0	0	
現代総合科目	日本国憲法	1・2・3・4前・後		2			○								兼1
	発想から表現へ	1・2・3・4後		2			○								兼1
	思考法入門	1・2・3・4後		2				○							兼1
	日本語表現（入門）	1・2・3・4前・後		2				○							兼1
	日本語表現（実践）	2・3・4前		2				○							兼1
	探究基礎演習	1・2・3・4後		2				○							兼1
	ポルトガル語圏のくらしと言葉1	1・2・3・4前		2				○							兼1
	ポルトガル語圏のくらしと言葉2	1・2・3・4後		2				○							兼1

教育課程等の概要															
(社会学部 コミュニティデザイン学科)															
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
現代総合科目 歴史文化系科目	インドの宗教と文化	1・2・3・4後		2		○								兼1	集中
	中国の宗教と文化	1・2・3・4後		2		○								兼1	集中
	人と文化	2・3・4後		2		○								兼1	
	教育学1	1・2・3・4前		2		○								兼1	
	教育学2	1・2・3・4後		2		○								兼1	
	ブッダに学ぶ	1・2・3・4前		2		○								兼1	
	親鸞に学ぶ	1・2・3・4後		2		○								兼1	
	部落差別と大谷派教団1	1・2・3・4前		2		○								兼1	
	部落差別と大谷派教団2	1・2・3・4後		2		○								兼1	
	部落差別と浄土真宗1	1・2・3・4前		2		○								兼1	
	部落差別と浄土真宗2	1・2・3・4後		2		○								兼1	
	部落史論1	1・2・3・4前		2		○								兼1	
	部落史論2	1・2・3・4後		2		○								兼1	
	反カースト運動論	1・2・3・4後		2		○								兼1	
	アイヌ民族と共に	1・2・3・4前		2		○								兼1	
	アジア侵略と宗教	1・2・3・4後		2		○								兼1	
	非戦の系譜	1・2・3・4前		2		○								兼1	
仏教福祉論	1・2・3・4後		2		○								兼1		
小計 (27科目)		—	0	54	0	—	—	—	0	0	0	0	0	兼21	
合計 (171科目)		—	48	312	0	—	—	—	5	3	3	—	—	兼96	
学位又は称号		学士			学位又は学科の分野			社会学・社会福祉学関係							
卒業要件及び履修方法							授業期間等								
①共通基礎科目18単位以上（人間学Ⅰ・Ⅱ8単位、大学導入科目2単位、必修外国語8単位） ②学科専門科目92単位以上（演習16単位、概論[A]6単位、概論[B]4単位、講義科目から38単位、実践研究（プロジェクト研究）から20単位、卒業研究8単位を修得） ③現代総合科目から6単位以上を修得 ④他学部開講科目を興味・関心により履修した場合、最大8単位までを自己選択科目の単位として認める ①～④の科目を修得し、124単位以上を履修すること ＊必修外国語は英語Ⅰ・Ⅱの8単位であるが、学生の希望により、文学部に開講するドイツ語、フランス語、中国語、韓国・朝鮮語を履修させることができる ＊履修科目の登録単位数の上限は、年間48単位まで							1学年の学期区分		2期						
							1学期の授業期間		15週						
							1時限の授業時間		90分						

(注)

- 学部等、研究科等若しくは高等専門学校等の学科の設置又は大学における通信教育の開設の届出を行おうとする場合には、授与する学位の種類及び分野又は学科の分野が同じ学部等、研究科等若しくは高等専門学校等の学科（学位の種類及び分野の変更等に関する基準（平成十五年文部科学省告示第三十九号）別表第一備考又は別表第二備考に係るものを含む。）についても作成すること。
- 私立の大学若しくは高等専門学校等の収容定員に係る学則の変更の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合、大学等の設置者の変更の認可を受けようとする場合又は大学等の廃止の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合は、この書類を作成する必要はない。
- 開設する授業科目に応じて、適宜科目区分の枠を設けること。
- 「授業形態」の欄の「実験・実習」には、実技も含むこと。

学校法人真宗大谷学園 設置認可等に関わる組織の移行表

平成29年度	入学 定員	編入学 定員	収容 定員
大谷大学			
文学部	745	—	2,980
真宗学科	70	—	280
仏教学科	25	—	100
哲学科	60	—	240
社会学科	120	—	480
歴史学科	100	—	400
文学科	70	—	280
国際文化学科	100	—	400
人文情報学科	100	—	400
教育・心理学科	100	—	400
計	745	—	2,980
大谷大学短期大学部			
仏教科	20	—	40
幼児教育保育科	80	—	160
計	100	—	200
大谷大学大学院			
文学研究科(修士課程)			
真宗学専攻	20	—	40
仏教学専攻	15	—	30
哲学専攻	10	—	20
社会学専攻	6	—	12
仏教文化専攻	10	—	20
国際文化専攻	10	—	20
教育・心理学専攻	8	—	16
計	79	—	158
文学研究科(博士後期課程)			
真宗学専攻	3	—	9
仏教学専攻	3	—	9
哲学専攻	3	—	9
社会学専攻	3	—	9
仏教文化専攻	3	—	9
国際文化専攻	3	—	9
計	18	—	54
九州大谷短期大学			
仏教学科	10	—	20
表現学科	50	—	100
幼児教育学科	100	—	200
福祉学科	35	—	70
専攻科福祉専攻	30	—	30
計	225	—	420

→

平成30年度	入学 定員	編入学 定員	収容 定員	変更の事由
大谷大学				
文学部	405	—	1,620	定員変更
真宗学科	60	—	240	定員変更(△10)
仏教学科	25	—	100	
哲学科	50	—	200	定員変更(△10)
	0	—	0	平成30年4月学生募集停止
歴史学科	100	—	400	
文学科	70	—	280	
国際文化学科	90	—	360	定員変更(△10)
	0	—	0	平成30年4月学生募集停止
	0	—	0	平成30年4月学生募集停止
社会学部	220	—	880	学部の設置(届出)
現代社会学科	120	—	480	
コミュニティデザイン学科	100	—	400	
教育学部	130	—	520	学部の設置(届出)
教育学科	130	—	520	
計	745	—	2,980	
大谷大学短期大学部				
	0	—	0	平成30年4月学生募集停止
幼児教育保育科	80	—	160	
計	80	—	160	
大谷大学大学院				
文学研究科(修士課程)				
真宗学専攻	20	—	40	
仏教学専攻	15	—	30	
哲学専攻	10	—	20	
社会学専攻	6	—	12	
仏教文化専攻	10	—	20	
国際文化専攻	10	—	20	
教育・心理学専攻	8	—	16	
計	79	—	158	
文学研究科(博士後期課程)				
真宗学専攻	3	—	9	
仏教学専攻	3	—	9	
哲学専攻	3	—	9	
社会学専攻	3	—	9	
仏教文化専攻	3	—	9	
国際文化専攻	3	—	9	
計	18	—	54	
九州大谷短期大学				
仏教学科	10	—	20	
表現学科	50	—	100	
幼児教育学科	100	—	200	
福祉学科	35	—	70	
専攻科福祉専攻	30	—	30	
計	225	—	420	

授 業 科 目 の 概 要				
(社会学部 現代社会学科)				
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
共通基礎科目	総合科目	人間学Ⅰ	本講義では、大谷大学に学ぶ私たち自身の問題を考えるための土台を形成することを目的とする。前期では、釈尊伝をもとに仏教の思想が照らし出す人間のあり方から、自分自身の生き方を考え学んでいく。時には、仏教以外の哲学や思想、現代の社会問題にも触れながら、授業を進めていく。また、人間学の重要なテーマとして人権問題学習を行う。後期では、前期の学習を引き継ぎつつ、親鸞の生涯と思想を通して、自己や人間について考え学ぶ。また親鸞の思想以外の広いテーマを取り上げることで、現代を生きる人間の具体的な問題について考える視点を学んでいく。	
		人間学Ⅱ	人間学Ⅰで学んだ釈尊伝を基礎にして、さらに深く釈尊伝について学ぶ。ゴータマ・シッダールタと呼ばれた青年がブッダ（目覚めた者）と呼ばれた意味を確かめる。この授業のなかで仏教の基礎的知識を身につける。そして、仏教の根本課題を明確に捉えることができる。そのことを通して、自己と他者への理解を深め、主体的にしかも共に生きる歩み方を模索する。	
		人間学Ⅱ	インドで興った仏教は、中央アジア・中国・朝鮮半島を経て日本へ伝来した。また、南方諸地域にも広がっていった。仏教は、各地の文化と接触し、それぞれ特徴的な変容を遂げていった。仏教の伝播は単に思想交流のみにとどまらず文化交流というにふさわしい、文化変容ももたらした。本講義では、仏教伝播を担った各地の仏教者がどのようにかかわっていったのか、その生涯を踏まえながら感じ取り、その意味を考える機会とする。	
		人間学Ⅱ	親鸞は人間が生きる確かな根拠を「真宗」という言葉によって明らかにした。その親鸞の確認を受けとめていく時、人間はどのように生きていくことができるのか、その手がかりを親鸞以降の浄土真宗の歴史に尋ね、混迷する現代社会の中に身を置く私たち一人ひとりの人生の課題を考察していく。本講義ではそのことを、蓮如の生涯と言葉を中心に講義していく。	
		人間学Ⅱ	本学初代学長清沢満之の生涯と思想を学ぶことを通して、大谷大学建学の精神に触れていく。清沢が「自己の信念の確立」（真宗大学開講の辞）という言葉で表現する建学の精神は、さらに佐々木月樵によって「本務遂行、相互敬愛、人格純真」という「本学に於ける人格陶冶の三モットー」（大谷大学樹立の精神）として展開されていく。大谷大学のこれまでの歩みにも触れながら、本学に学ぶ私たちに願われていることを確かめていく。	
		人間学Ⅱ	本学の正門と北門に毎月掲示される「きょうのことば」は、真宗・仏教の精神を教育と研究の基盤とする大谷大学における学びを明らかにするものであり、あわせてその解説文も作成されている。これまで掲示されてきた「きょうのことば」を取り上げ、その言葉が生まれてきた背景や意味を学ぶことを通して、一人ひとりに問いかけられていることを確かめ、人間が生きるための課題について考察していく。	
		人間学Ⅱ	現代社会が抱える様々な問題を捉えることによって、人間とは何かという問いについて考える。また、仏教の人間観を学ぶことによって、現代社会の様々な問題をどのように捉えておくべきか考察する。幅広い仏教の知見によって人間や社会の諸相を分析し、いかにして我々が抱える問題を解決する手がかりを得ることができるのか検討することになる。	
		人間学Ⅱ	人として生きるとはどのようなことなのか、そしてそのことに宗教がどう関係しているのかについて考察する。宗教に関する幅広い知識を身につけ、宗教の根本課題を確かめて、宗教の持つ意味について学ぶ。〈宗教〉や〈人間〉をあらゆる角度から分析することによって、大谷大学の〈建学の理念〉に基づく主体的な歩み方について考えることになる。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
共通基礎科目	総合科目	人間学Ⅱ	宗教的・思想的な営為のなかに〈自然〉がどのように織り込まれているのかに着目する。精神文化と自然環境との繋がりを理解することになる。自然観・環境観を学ぶことを通して、人間社会をとりまく自然環境に関する知見を深める。そして、我々のあり方を根本的に見つめ、いかに社会や文化の発展に貢献することができるか考えることになる。	
		人間学Ⅱ	哲学的思考とは、世界の中で起こる具体的な問題について、その具体性をいったん取り除いた後に残る抽象的な枠組をその問題の本質として捉えようとする試みである。ともするとその抽象性ゆえに難解で浮世ばなれした印象を持たれることもある哲学であるが、その抽象性の目的は、この世界の問題を正確に考えるためのものであり、その問題への答えがいつでもどこでも誰にでも当てはまるようにするためなのである。ここでは、様々な哲学者の著作に学びつつ、私たちがいま抱えている悩み、小説や映画の中で出会った疑問、ニュースで知った不条理について考えていく。	
		人間学Ⅱ	千年の歴史を誇る都・京都は、永く政治・文化の中心としてその存在を誇ってきた。また多くの寺社が所在し、京都は宗教都市でもあった。最新の研究成果を踏まえながら、宗教都市の歴史・空間構造・特色を理解しつつ、寺社を中核に形成された門前町の歴史・景観・文化・住人・将来像を考えたい。また、実在する門前町の実態と、京都市の都市行政としての門前町の将来について考える機会としたい。	
		人間学Ⅱ	文芸は、人の心を豊かにし、人の世を長閑にする言語芸術である。人間を理解する上で、人間を感動させる文学の研究は、好適な分野の一つであると言える。文芸作品の世界を明らかにするために、具体的な課題設定のもとで、言語表現に関する適切な知識を身につけ、表現内容を主体的に追究することは、文学研究として個々の文芸作品の価値を見出すだけでなく、作品世界に映し出された精神の普遍的価値を探究する営為である。こうした一連の学修過程において、人間をめぐる諸問題の解明、および人間への本質的理解を目指す。	
		人間学Ⅱ	障害者差別解消法が、平成28年4月から施行され、障害者差別の問題は社会全体の課題としてクローズアップされている。大学においても、障害学生の履修支援への合理的配慮が求められている。しかし、障害者を取り巻く現状は、偏見や無理解に基づく差別があり、決して楽観視できるものではない。では、私たちは、障害のある人もない人も、互いに、その人らしくともに安心して暮していける社会を、いかに実現していけばよいのだろうか。本授業では、こうした問題意識に基づきながら、障害者の人権問題に焦点を当てて考える。	
		人間学Ⅱ	私たちが、互いを尊重しながら、豊かな関係を築き、社会全体の幸福を求めようとするとき、何よりも自他の人権に配慮して生きることが大切となってくる。しかし、現状では、様々なハラスメント（アカハラ、パワハラ、セクハラ等）をはじめ、部落差別、民族差別、障害者差別、性差別、人種差別など多くの差別問題が、解消されていない。本授業では、世界や日本社会に存在する様々な差別問題について学びつつ、合せて、差別意識を抱える人間存在そのものの問題についても見つめながら、人権問題について考える。	
		人間学Ⅱ	当該科目では、人々が生活する場所の自然環境を多角的に捉え、環境因子について学ぶとともに、人々が自然環境とどのように向き合ってきたかを講義する。生活の場は、日本を中心に扱うが、比較のため諸外国の例も示す。具体的には、地形、地質、気象、植生、動物相、水文、自然災害等について学び、それらに関わる文化事象について詳述する。	
大学導入	学びの発見	大学で学ぶためには、様々な資料を読み解き、そこから自らの意見を論理的に展開しなければならない。そこで、初年次教育として、資料の収集方法を知り、資料の論理構造を理解した上で、自らの志向の過程を論理的に展開する力を養成する。具体的には、資料を読んでその要点をまとめた上で、他者との交流を通してアイデアを拡げ、論理的な文章を書く作業を行いながら、レポートを作成する。その成果を他者に伝え、ディスカッションすることで、自らの学びを自己評価できるようにする。		
	必修外国語	英語Ⅰ	大学に入学するまでの学習で身につけた基本的な語彙、文法事項を確認するとともに、英語の背景にある文化や歴史に目を向けながら、さまざまな分野の話題に関する英文を読んで、英語の四技能（英語を聴く能力、話す能力、読む能力、書く能力）のそれぞれを、バランスよく伸ばし、英語運用能力を高める。またこれらを通して、英語圏における「論理展開」を理解し、英語の思考能力の基礎を身につける。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
共通基礎科目	必修外国語	英語Ⅱ	身近で幅広いジャンルの英文を読み、さまざまな社会や文化への理解を深めて視野を広げながら、「英語Ⅰ」で身につけた英語の四技能（英語を聴く能力、話す能力、読む能力、書く能力）のそれぞれをさらに発展させ、それらを統合的に用いて英語で発信する能力を育成する。またこれらを通して、英語圏における「論理展開」を理解し、論理的な構想力を養う。	
		社会学演習Ⅰa	本講義では、一方で「社会的存在としての人間」の側面に目を向ける社会学や関連学問の面白さや効用を平易に説き、他方で、現代人や現代社会固有の特徴や問題について、身近な経験を例に客観的に考察する態度を養う。文献情報収集の態度やスキルを、学科の学びに応用する初歩的作業もおこなう。15人程度のクラス編成で、ホームルーム的機能も担うゼミ形式の授業である。担当教員は指導教員として、学部および学科の学びの方向性と全体像を伝える一方で、個々の学生に応じた履修相談・指導をおこなう。	
学科専門科目	演習	社会学演習Ⅰb	「社会学演習Ⅰa」に引き続き、履修学生が社会科学的な疑問を持ち、主体的に探究することの面白さを発見するためのさまざまな機会を提供し、加えて探究のスキルを身につけるためのワークを課す。履修学生全員が、社会文化事象に知的関心を持つこと、身近な諸事象や問題を客観的に考察できること、情報収集のための基本的な姿勢とスキルを備えていることが第1学年修了時の達成目標である。第1学年終盤には学生は「公共社会」「人間関係」「現代文化」の3つの関心群のいずれかを選択し、かつ第2学年の演習（ゼミ）を選択せねばならないので、担当教員は指導教員として、そのための情報提供・助言・指導を学生個々の関心・資質に鑑みておこなう。	
		社会学演習Ⅱa	演習Ⅱは、関心を漠然と共有しながらも、興味を持つ対象や目の付け所は多様な学生が、教員の指導のもと、選んだ関心群の題材に関する基本知識、および社会学や関連学問領域の基本概念を学修するテキスト講読に加えて、グループワーク・研究発表などをおこない、相互交流するゼミ形式をとる。学生は第2学年以降、選択した関心群の科目を中心に履修を進めるが、この時期は関心の幅を広げ、さまざまな知識を修得することが重要であり、そのなかで自らの問題意識を問い直し、模索し、再構築を進める必要がある。演習クラスはそうした学びを集約し、振り返る場である。担当教員は指導教員として、各学生の営みを見守り、必要に応じて助言・指導をおこなう。	
		社会学演習Ⅱb	選んだ関心群の題材について、社会学や関連学問領域の視点や方法を応用して考察するトレーニングを、テキスト講読、グループワーク・研究発表などを実践する形でおこなう。社会学など社会科学分野の抽象的な基本概念を理解し、説明し、具体的な社会事象や身近な問題の考察に初歩的な応用ができること、現代社会や現代人のあり方や問題を自らのそれと結び付け、多角的な視野で考察できることが、第2学年修了時の到達目標である。担当教員は指導教員として、個々の学生の学修状況を見守り、必要に応じて、関心の喚起やスキルの伝授といった助言・指導をおこなう。今後の全体的な履修計画についても検討する。	
		社会学演習Ⅲa	履修学生個々が自らの研究テーマを定めるためには、社会学ないし社会科学の研究考察における問題設定・仮説設定・検証考察につながる情報やデータ収集の方法について、あらためて確かめ、個々の関心のある題材にそれらを活用し、試行錯誤を繰り返す必要がある。そのなかで、研究テーマや研究計画が次第に現実的なものに練り直されていく。授業では個別ないしグループワークの形で、こうした作業を学生に課し、その経過や成果の発表と意見交換をおこなう。	
		社会学演習Ⅲb	「社会学演習Ⅲa」に引き続き、個人ないしグループの研究テーマ・研究計画を深化させるための発表と議論をおこなう。文献資料の収集状況、文献の読み込み状況、聞き取り・観察・アンケート調査などをおこなう場合には、その具体的な計画と予備調査の実行状況などが発表内容として要求される。発表の質は無論のこと、わかりやすく説得力のある形で発表ができていくことも重要なポイントとなる。こうした作業を通じて、社会的知見に基づき、自ら課題を設定し、その課題を計画的に探究し、その成果を共有するための応用力・総合力を身につける。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学科専門科目	演習	社会学演習IVa	履修学生個々が自らの研究テーマとそれを具体的に探究するための研究計画を定め、発表する。早めに研究計画案を作成し、それに沿った予備的調査をおこない、研究計画の問題点をチェックして完成度を高めようとして発表する。授業前半ではこの課題をクリアするために必要な知識やスキルを確認し、授業後半では発表と意見交換をおこなう。また、授業全体を通じ、必要に応じて、研究成果の表現形式や研究倫理の基本知識について説明し、ワーク課題を課して、その応用実践力を身につける。
		社会学演習IVb	履修学生個々の研究実践の経過および成果発表と意見交換をゼミ形式でおこなう。また、研究計画の修正や調査や文献収集に関する助言等もおこなう。これらの作業を通して、社会的な視点と手法をもって、現代の社会文化事象の多面的な理解や課題の発見・共有・解決につなげていくための具体的な応用実践力を身につける。各自の成果表現については、表現形式の論理的、倫理的妥当性の観点からも助言指導をおこない、それらに関する知識やスキルが身につくようにする。
	入門・概論	仏教社会論	仏教では人間存在の本質を、「関係性」においてのみ生存しうる「縁起的存在」とみる。他者と争い傷つけてやまない今日の混乱した状況は、このような視点の欠落にもとづく自己中心的生命理解に起因するものと考えられる。人間存在の本質を追求することは、やがて他者の痛みを理解し、相互敬愛の共同社会を志向する態度を生み出すことへと繋がる。この授業では「縁起的存在」とは何かを考察する中から、「他者とのつながりを生きる」共同社会創造の課題について、主体的に考察することが求められる。
		社会学概論	社会学も他の人文社会系の学問と同じく人間を深く理解しようとする学問である。ではどこに社会学独特の視点と存在意義はあるのか。本講義では、社会学の基本的な視点や思考法、対象の捉え方、概念等に関する情報を提示する。デュルケーム、ヴェーバー、ジンメルなど社会学確立期および現代を代表する社会学者の著作にふれながら、近現代で生じてきたさまざまな社会現象や社会問題に関して、社会学ではどのような視点から研究をおこない、どのような知見を得てきたのかについて具体的な事例を通して、理解を共有する。
		現代社会基礎	現代の社会文化事象について社会的考察をおこなう前提として、私たちが日々生きている現代社会の成り立ちと仕組みについての基礎知識を確認しておく必要がある。現代の経済生活、政治制度、国際関係、現代人および現代社会の基本的特徴について、高校「現代社会」で学習した知識の確認を徹底する。そのうえで、その知識を今後の主体的な学修に活用するための方向づけをおこなう。高校教科書やメディアで流される情報を、相対化し、時に批判的に検討する必要がある。いくつかの事例から考え、情報を主体的に収集し考える学修の効用にふれる。
		社会学入門	社会学の幅広く多様な研究領域から「多様な社会現象にみる個人と公共の折り合いの問題と可能性」、「小集団など対面的な場を中心とする人間関係と心理」、「現代人を時に結びつけ、時に切り離す文化の働き」の3つの位相を選び、入門的講義をおこなう。第2学年次の社会学演習（ゼミ）選択、「公共社会」「人間関係」「現代文化」の関心群選択のためのオリエンテーションの役割を担う授業である。
	講義	現代社会論	人間は大昔から「社会」を作って生きてきた。大昔の狩猟採集民も現代人も「社会」を生活している点では変わらない。しかし、両者が生きる「社会」のありようは大きく異なる。国家や文字やマスメディアの有無など相違点を多く挙げうる。本講義では、「近代」以降、とくに「現代」の社会の特徴について、そこに生きる私たち現代人の諸相を確かめながら、理解を深める。とくに人間がともに「人間らしく生きる」という課題との関連で、現代社会の可能性や困難について考えるための視点を提示する。
		人間関係論	現代社会においては、人間関係の希薄化や人と人との絆やつながりの減弱が指摘され、それらを取り戻すことの重要性や必要性が声高に叫ばれている。家族関係、近所づきあい、友人関係などは、われわれに喜びをもたらすと同時に悩みの種にもなることもあるが、人は一人では生きられない存在である以上、社会生活を生きていく上で、人間関係の網の目からは決して逃れることができない。講義では、社会学や心理学の知見を参照しながら、人間関係とは何かについて見つめ直す。

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学科専門科目 講義	心理学基礎	<p>自分や他者のこのころに関する疑問や悩みは、多くの人にとって身近である。こうした悩みや問題を解決することは、自己の生産性を高め、他者と適切な関係を構築し、心理的幸福度の高い社会生活を営むために重要である。本講義では、心理学の基礎知識を学び、心理学的枠組みから、日常の他者や自己を捉え直す。そのことにより、このころに関する様々な疑問や問題を解決することができるようになり、ひいては、心理的幸福度の高い社会生活を営むための方法を獲得することを目標とする。</p>	
	現代家族論	<p>現代社会においては、家族を単に幸福な一家団らのイメージでとらえることはできない。核家族化の進行と生活スタイルの変化が、家族の姿そのものに大きな変化をもたらしたからである。本講義では、現在の家族に生じている問題点をさまざまな角度から検討し、理解する。また子育て、高齢化、介護、家族制度について理解し、これからの家族の可能性について考察する。そして、現代社会において特定の家族が排除されていること、差別、格差、不利益などを被る家族やそのメンバーがいること、また暴力に曝されている人びとが存在することを知るとともに、個人を生きづらくしている家族のあり方を捉え、現代家族の新たな方途を考察する。</p>	
	ジェンダーと社会	<p>「男性／女性」という性別の区分は、生物学的なものというよりは、社会的・文化的に生み出されたものだというのが、ジェンダー論の基本的な視座である。かつて女性は社会的に弱い立場に立たされつけ、参政権すら与えられず、働けども賃金の発生しない「シャドウ・ワーク」に従事させられてきた。男女平等が叫ばれ、女性の社会進出が進んだ（あるいは男性の家事育児への参加が進んだ）と言われる現代社会においてすら、こうした格差や不利益は消滅しておらず、どこかでしっかりと残りつづけている。講義では、家族社会学やフェミニズム論の知見を手掛かりにしなが、人や社会は性とどう向き合ってきたのか、今後はどうあるべきかについて考える。</p>	
	比較心理学	<p>人間が社会的な認識を得るためには、人間以外の動物の社会的認識と比較し、その進化的な要因を探る必要がある。そこで、本講義では動物の社会的認識と比較することで、人間の社会的認識とは何かを探ることを目的とする。具体的には人間以外の社会的認知、および、社会的知性についての比較認知科学的な視点での研究成果に基づいて講義を行う。それにより、人間社会を形成する心理を理解し、現在生じている問題点について考える力を養成する。</p>	
	社会心理学	<p>私たちにとって、人との関わりは不可欠なものである。本講義では、ミクロからマクロに至るまでさまざまな社会的事象を題材とし、個人と個人との関係、個人と集団との関係の2つに焦点を当て、その中で展開される私たちの行動や心理の特徴について概説する。また、自分とは背景が異なる人々と交流する機会が多くなる今日、コミュニケーションを戦略的にとらえ、実践する必要がある。コミュニケーションの基礎理論をはじめ、具体的なターゲットに応じた効果的なメッセージの表出方法についても考える。</p>	
	現代社会とコミュニケーション	<p>科学技術環境の発達に伴うコミュニケーション形態の変化は、現代社会の大きな特徴である。インターネットを介して個々人が公的空間へ発信できる機会の増加は、ビジネスのみならず政治分野にも影響を及ぼすようになっている。本講義では、社会科学分野におけるコミュニケーションの古典的分析を踏まえつつ、現代社会に新たに現れている動的側面に着目する。コミュニケーションの当事者である個々人のレベルのみならず、様々なコミュニケーションが社会レベルで持ちうる効果に関する視点を深めることを目指す。</p>	
	教育社会学	<p>子育て、学校、教育家族、学生文化など、近代以降の教育にまつわるさまざまな現象を、社会学的観点から検討・考察する。また教育社会学的な分析をおこなうために必要となる概念や理論、基本的な考え方といったものを学ぶために、逸脱、ジェンダー、社会化、メディア、文化といったテーマに沿って、具体例を紹介しつつ理解を深めてもらい、思考力を養う。そうした学びをとおり、現代社会における教育に関する様々な現象を、より深く多角的に考える力を身につける。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学科専門科目 講義	個人と公共	<p>人間集団の意思決定には、権力の行使、資源配分に関する合意形成、秩序維持・ルールの制定といった基本的要件が伴う。また、政治現象は、国家・民族といったマクロなレベルのみならず、各社会組織のミクロなレベルでも生じる。本講義では、社会現象として政治概念を位置づけ、集合行為としての政治過程の基本的な特徴を理解することを第一の目標とする。その上で、日本における地方自治や社会運動、テロや紛争に関する国際的な合意形成といった同時代的な動向を取り上げ、社会学的な認識がどのように応用されるのか、各自で検討する力を養うことを第二の目標とする。</p>	
	社会問題論	<p>社会「問題」とされるものは、ひきこもり、少年犯罪、自殺、禁煙ルール、差別などさまざまな形をとって現れる。しかし、それらが社会問題として扱われるようになる経緯はどうなっているのだろうか。いつから、どのような論争を経て、社会問題として定着してきたのだろうか。ある出来事が社会問題として自明視されるまでの過程には、各「問題」に特有の社会的メカニズムが作用している。この授業を通して、社会問題を解きほぐす社会学理論の基礎を学び、社会問題の仕組みと背景を能動的に考えることができるようになることを目標とする。</p>	
	地域社会論	<p>地域社会は、従来「農村と都市」や「コミュニティとアソシエーション」といった枠組みから論じられることが多かった。一方、近年では地方分権やまちづくりが制度的に推し進められ、時代の変化とともに新住民の受け入れや防犯といった新たな課題にも直面している。本講義では、生業・生活に根差した生活空間としての地域社会に関する社会学的な理論を踏まえ、同時代的な課題にどのように取り組まれているのか、具体的に検討する。</p>	
	地域福祉論1	<p>社会福祉における今日的な課題として重要な位置を占める地域福祉について、その対象となる地域生活問題の変遷と、それに対応する制度や政策、理論の変遷などを通じ、地域福祉の意義・役割について理解することを目標とする。具体的には統計調査の結果などから地域の変化を捉える指標を考察し、そこで展開する住民の生活とその課題の地域性についての考察を加えることから、地域生活問題の構造的な把握を試みる。同時に、生活問題に対応する政策の体系的な理解も検討し、内容を深めていく。</p>	
	地域福祉論2	<p>社会福祉における援助活動の展開過程を重視し、人権尊重、権利擁護、自立支援等の観点から踏まえた社会福祉サービスと援助活動の関係、特に地域援助技術（コミュニティワーク）の基礎理論と具体的援助の実践課程について理解を深める。また、地域福祉にとって中心的テーマである住民活動の実際と課題、地域福祉における役割と政策との関係から捉えられる客観的位置と役割について解説し、住民活動への支援機関の今日的動向についても解説を加える。</p>	
	環境社会学	<p>公害やごみ処理、エネルギー問題、自然破壊に示されるように、環境問題の本質は社会的要因によるものである。とりわけ経済活動や科学技術の発展と相克する形で現れることが多い。この授業では、過去に生じた環境問題の具体例を複数取り上げ、そこではどのような当事者たちが、どのような利害のジレンマのなかで、どのような解決策を模索したのか、実際に確認する作業を通じたケース・スタディを行う。環境を守ることが良いことなのは誰でも分かることなのに、なぜ環境問題の解決が難しいのか、またどのような解決方法を工夫できるのか、主体的に考える能力を養うことを目標とする。</p>	
	グローバリゼーション論	<p>現代の世界の大きな特徴のひとつは、遠く離れた場所同士で、ヒト・モノ・カネ・情報の移動がこれまでになく活発化することである。海外で暮らす人々の数は増加し、グローバルな市場で評価されるサブカルチャーが「逆輸入」され、文化的背景の異なる人々と協力するプロジェクトに携わる機会も多くなる。この授業では、具体的なケース・スタディを通してグローバリゼーションが台頭してきた歴史的経緯を学び、ビジネス、文化、政治等分野をまたぐ現象のなかでどのような問題と可能性が見出せるのか理解することを目標とする。</p>	
	市民活動論	<p>本講義は、民間の担い手によって取り組まれる営利を目的としない活動の特性を知り、新しい公共の担い手としての市民活動の実践や意義、課題を理解することを目的とする。行政施策とは異なる次元で取り組まれている公共的な意義・内容をもつ市民主体の諸活動の歴史や現代的な意義を世界情勢等も踏まえた上で学ぶ。そのことを通じて、現代社会において市民として能動的に社会問題の解決に関わる意欲や能力を高めることを目標とする。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学科専門科目 講義	ボランティア論	<p>本講義では、現代社会における市民のボランティア（自発的）な活動について、それに取り組むことの意味と現状、課題を理解することを目的とする。災害支援や障害者の社会参加促進、まちづくり活動などの場面におけるボランティアな活動の歴史や社会的背景、行動原理、関連政策との関わりを包括的にとらえる。そのことを通して、社会関係を育むこれらの活動を経済・社会状況の中で捉え直し、人々の意識や政策動向も踏まえた上での活動のあり方、市民としての関わり方を考えることを目標とする。</p>	
	地方自治論	<p>本講義は、地方自治の基本的理解及び本学が所在する京都における自治体の実際の運営と役割について理解を深めることを目的として講義する。基本的には憲法及び地方自治法にある地方自治体の基本的役割と歴史の変遷、近年の変化と課題を学ぶ内容とする。また今日の自治体が直面する実際の諸課題については、実施に実務を担う自治体職員、特にプロジェクト研究との関連が深い、京都市並びに北区の自治体職員をゲストスピーカーに招いてケース・スタディを行う。</p>	
	犯罪と社会	<p>ここ10年余にわたる司法制度改革の流れの中で、裁判員裁判制度、地域生活定着支援センター、取調べの可視化等をめぐって様々な変革の動きがみられる。これらの制度的な変革は、どのような社会的背景の下にもたらされ、なおどのような課題を抱えているのだろうか。本講義では、このような問題意識から幾つかの冤罪事件や司法と福祉の連携状況を紹介しながら、司法制度改革にまつわる諸課題を理解し、考察を深める。</p>	
	現代文化論	<p>現代文化は、都市化や消費社会化、情報化など、さまざまな要因を背景にして形成されてきた。本講義では、ポピュラーカルチャーやサブカルチャー、若者文化などを議論の俎上に載せ、社会学や文化研究（カルチュラル・スタディーズ）などの知見から概観する。現代の文化が、近代文化とどのように様相を異にしているのかに関心を払いつつ、具体的な文化作品や文化現象の分析を通して、われわれの生きる社会に伏流する社会意識や集合的な欲望について考えていく。</p>	
	文化社会学	<p>「文化」という概念には、大きく二つの捉え方がある。一つは、われわれが営む生活様式の総体としての文化である。自分たちにとって当たり前の習慣や考え方であっても他の社会や時代の人たちからすれば、必ずしもそうではない特殊性や個性を帯びたものが文化となる。一方で、「文化」は芸術や教養のように精神的な豊かさや知性の輝きを示し、平凡な日常を超え出るような経験をもたらすものでもある。本講義では、こうした多様な文化概念を踏まえつつ、近現代の文化の具体的事象を幅広く取り上げていく。社会と文化の関係について、文化社会学の諸理論やキー概念を活用しながら考察を深めていく。</p>	
	観光社会学	<p>観光は、現代の社会や文化を読み解くための格好のテーマである。われわれの社会の成り立ちや特徴は、観光文化を通してより深く、多面的に理解することができる。本講義では、近代に登場したマスツーリズムや現代の多様化する観光を幅広く扱いながら、われわれの文化やライフスタイルがいかに「観光的なもの」となっているのかを考察する。大衆消費社会やグローバル化、地域振興、開発や環境問題など、多様なトピックを観光と関係づけながら議論を進めることになる。</p>	
	宗教と社会	<p>社会学ないし人類学においては、アニミズム的な精霊信仰からキリスト教などの世界宗教、さらに新興宗教まで、多様な「宗教」ないし「宗教」をめぐる人びとの活動・関係・組織についてどのように考察してきたのか、主要な学説と基本概念を紹介する。また、現代日本ないし世界の宗教状況について概観し、基礎的理解を共有したうえで、近現代の社会変動と宗教の衰退・興隆・変質、宗教間対立などの現象との関係について、具体的事例を交えて、多面的に考察する。</p>	
	大衆文化論	<p>近代社会に登場した大衆という存在は、否定的に語られることが多い。諸個人が互いに類似し、個性を持たない塊（マス＝大衆）というわけである。理性に乏しく感情に流され、エリート層に操作されやすい受動的な存在とみなされることもある。しかし大衆文化には別の様相もある。周縁におかれた下からの文化でもある大衆文化は、低俗とみなされる一方で、民衆の生活知の結晶でもある。ときに支配的な抵抗にオルタナティブを提示し、中心的価値を転覆したり、したたかな抵抗をみせる対抗文化でもあった。本講義では、伝統文化、新聞雑誌文化、映画やテレビ、祭り、芸能、民藝など多様な大衆文化や民衆文化を取り上げその多義性や可能性を考察する。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学科専門科目 講義	スポーツと社会	<p>スポーツと社会の関係は多面的であり、さまざまな学問的アプローチができるテーマでもある。オリンピックやプロスポーツが隆盛する現代社会においてスポーツへの社会的位置づけはますます高まっている。近代社会の中でスポーツはどのように形成され、発展を遂げていったのか。本講義は身体や暴力、健康、メディア、スポーツイベント、スポーツファン、ジェンダーなどの多様なトピックを交えながら社会学の視点からスポーツについて学ぶことになる。</p>	
	消費社会論	<p>現代社会の消費には、単なる生存や生活の必要を超えた過剰な欲望が駆動している。本講義では、社会学の理論やパースペクティブを活用しながら、現代人の消費欲望が社会的にどのようにつくられているのかを考察していく。一方、近年では経済成長が頭打ちをし、成熟社会へと移行していく中で、われわれの消費行動にも変容が生じてきている。本講義ではそうした現代社会のアクチュアルな点にも関心を払いながら議論を深める。</p>	
	文化人類学	<p>文化人類学の主要な理論や学説、概念、トピックを学ぶとともに、代表的な人類学者やエスノグラフィ（民族誌）の紹介を通して、文化人類学の基本的な知識を習得する。また移民の増加に端的にみられるように、現代世界の多くの地域では文化の混雑が進むとともに、文化摩擦や対立が増している。本講義ではグローバル化のなかで多くの国に採用されている多文化主義の実際についても学び、異文化理解の意義とその困難に触れ、多文化共生に関する理解を深める。</p>	
	アジア社会論	<p>日本の代表的なエスニック・マイノリティである在日コリアンの現状と彼らが行っている「民族教育」というアイデンティティ・ポリティクスを理解を通じて、現代社会科学における重要概念のひとつである「アイデンティティ」への理解を深める。本講義では、指定された文献を事前に読んできた上で、その内容に基づいて講義や討論を行うが、場合によっては、自分自身を考察の対象とする実験的方法を試みる。また、在日コリアンの現像を理解するため映画などの視聴覚テキストと一緒に視聴し、討論する。</p>	
	情報と倫理	<p>情報社会のもたらす課題を、倫理と法律を混同することなく、両面から理解し解決の検討ができる知識の獲得を目的とする。情報機器の発達は個人の可能性を大幅に拡大したが、その能力の発揮が社会に与える倫理的・法的な問題を考える能力の向上は、技術の発展の速度と比してバランスが取れていない。そこで、実際に発生した事件をもとに、問題の所在を指摘しうる知識と、技術的・倫理的・法的の三方向から回避や解決が検討できる広い視野の獲得を目指す。</p>	
	情報社会論	<p>本講義は、情報社会の様相を特に印刷の電子化と電子書籍・ネットワークの発達という観点から考察し、情報社会の様相を断片的な知識ではなく、全体像としてとらえることで、情報の氾濫の中で主体的に行動できるようになることを目的とする。情報社会の様相を、書物の成立からインターネットの成立までの歴史を概観した後、現在の情報社会の様相を解説する。特にインターネット、携帯電話、電子書籍といった新時代の情報伝達手段の歴史的意味と社会的影響を考察する。</p>	
	情報技術論	<p>情報社会の諸問題に対処するのに必要となる実際的な知識を修得することで、情報や情報システムをより有用な道具として使いこなす能力を身につけることを目的とする。具体的には、情報の量や質について考えられるような情報の基本概念を学び、また、情報通信ネットワークやヒューマン・コンピュータ・インターフェイスを含む広義のコミュニケーションについて考える。それをふまえ、社会の諸問題に対処する情報システム構築の基礎的能力の修得を目指す。</p>	
	社会思想史	<p>近代ヨーロッパで誕生した市民社会や民主主義、国民国家体制、人権思想は現代社会において、大きなゆらぎやほころびをみせている。本講義ではこうした点を念頭におきながら、近代社会の形成・展開過程でどのような社会思想や理論が打ち出され、時代的・歴史的課題と格闘してきたのかを概観する。主要な思想家や理論家の議論を具体的に取り上げ、それらが現代社会にとってどのような意義と限界をもっているのかを考える。</p>	
社会学史	<p>「社会学概論」等の履修で学生が持っている知識を確かめつつ、19世紀以降に成立した社会学分野の発展のプロセスを、ドイツ・フランス・アメリカ等の社会学者の諸学説を詳しくたどることで把握する。彼らはどのような時代背景や社会的要請のもとで、どのような問題関心を抱き、新たな概念を提唱し、どのような理論構築をおこなってきたのか。個々の社会学者の考え方を取り上げて、社会学理論の変遷を説明できるようになることを目標とする。</p>		

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学科専門科目	講義	社会調査論	卒業研究のデータ収集のための社会調査を自ら企画する学生のために、第1学年時に学んできた社会統計やフィールドワークの技法や倫理、およびその応用について総括的に確認する。一方で個人情報保護が重視され、他方でビッグデータの収集・利用が進む現代社会において、学問的な社会調査にはどのような効用が期待でき、どのような落とし穴があるのか。社会調査を長年経験してきた立場から、具体的な社会調査事例を検討しながら、その魅力と注意点について講義する。
	A	社会統計基礎	社会的事実を把握し、あるいは創り出し、動かすために、社会統計に基づくさまざまな情報が発表・利用されている。主な社会統計を紹介し、社会統計利用の効用・注意点・倫理について確かめる。並行して、表計算ソフトを用いて実習しながら統計の基礎を学ぶ。具体的には、Excelの基本的な使い方を確認した上で、代表値や散布度、クロス集計、グラフ作成などの記述統計の基本概念を学ぶ。さらに、相関分析や回帰分析の基礎、および、ノンパラメトリック検定の基礎を実習しながら学ぶ。既存の社会統計の主体的活用、統計処理を伴う社会調査の設計実施の基礎力を養成する。
		フィールドワーク技法基礎	社会学および文化人類学が培ってきたフィールドワークについての考え方、技法、倫理に関する基礎知識を、講義と簡易な作業を組み合わせた授業のなかで身につける。身の周りで生起している日常の出来事にあらためて目を向けることが、現代人や現代社会について主体的に考える出発点になる。その面白さを説き、観察・聞き取り・調査票・資料収集等、フィールドワークの多様な手法とそれらを組み合わせた実践、調査と成果発表における研究倫理の基礎知識を全員が共有できるようにする。
	実践研究	フィールドワーク入門1	「フィールドワーク技法基礎」を学修した学生は同授業を履修できる。大学内外の身近な事象について社会学的フィールドワークをグループ単位で企画実行する一連の主体的実践を通じて、社会学的研究におけるフィールドワークの面白さと難しさについての理解を深めると同時に、以降、学生個々が自身の研究にフィールドワーク手法を応用導入できるようにする。本授業では、グループ単位のテーマ設定、調査計画作成、予備調査の実施と分析、中間成果の発表、本調査計画完成までをおこなう。
		フィールドワーク入門2	「フィールドワーク入門1」で作成した本調査計画をグループ単位で実施し、得たデータを多角的に検討し、必要に応じて補足調査をおこない、調査プロセスと成果について授業内で発表・質疑応答する。一連の主体的実践が成果物として結実し、それらを共有する経験を通じて、社会学的研究におけるフィールドワークの面白さと難しさについての理解がさらに深まり、学生個々が自身の研究におけるフィールドワーク手法の応用可能性についてより具体的に考えることができるようになる。
		探究フィールドワーク1	「フィールドワーク技法基礎」、「フィールドワーク入門1・2」をすでに学修していることが、この授業の履修条件となる。引きつづき少人数でのグループワーク形式をとるが、これまでに学んだ知識と経験をフル活用し、また時には大谷大学地域連携室のプロジェクトとも連動しながら、実際にそれぞれの地域社会が抱える課題などに取り組んでいくのが、この授業の大きな眼目である。前期のこの「探究フィールドワーク1」においては、事前調査と先行研究精査、調査テーマの絞り込み、プレ調査の中間報告と本調査計画完成までをおこなう。
		探究フィールドワーク2	後期の「探究フィールドワーク2」では、「探究フィールドワーク1」で立てた本調査計画を、グループ単位で実施する。またその成果報告をおこなうとともに、最終的にはそれらを成果報告集(冊子)へとまとめる。前後期を通じて集められたデータの分析から、地域社会の課題などに対する何らかの提言やソリューションを引き出し、それらを積極的に調査対象者へとフィードバックしていくのが、この授業の大きな目標となる。
		ソーシャル・ドキュメント分析1	人々の価値観や意味、集合意識、あるいは特定集団のメッセージは、さまざまな媒体を通じて社会空間を行き交っている。近代以前の社会では、それらが仮面や衣装、建築物等を通じて表現されることもあった。他方で、今日のような科学技術の発達した状況においては、マスメディアを流れる映像資料やテレビコマーシャル・新聞広告もまた、意味や価値観を映し出す鏡として考えることができる。この授業では、政府統計や公式資料に加えて、新たな表現媒体もソーシャル・ドキュメントとして扱い、同時代的な価値観や意味、集合意識の形成過程が理解できるようにすることを目標とする。

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 専 門 科 目 実 践 研 究 B	ソーシャル・ドキュメント分析2	<p>同時代的なソーシャル・ドキュメントの広がりや理論的に把握しようとして、よりミクロな、特定の文脈における資料にも目を向ける。たとえば個人的な日記や写真アルバム、ウェブログなども、そこから社会性や時代的背景を読み込むきっかけになる。一見すると集合的なメッセージとは別次元におかれているように思われる媒体にも社会的な作用が働いている。また同時に、使用者の思いや体験が反映されて新たな意味が生成する余地もある。ソーシャル・ドキュメントの作り手側の社会的な立ち位置を多角的に理解することを目標とする。</p>	
	社会統計演習1	<p>統計データを読み込むことは、現代社会の実態を理解していく上で不可欠のスキルである。本演習1では、第1学年必修の「社会統計基礎」で教授した知識・スキル・倫理を履修者は共有していることを前提に、統計的検定や多変量解析等を行った様々な統計データを読み解く経験を積む。さらに実際の生のデータを適切な統計的手法を用いて処理する経験をいくつか重ね、わかりやすいグラフ等で視覚化する等の実践的なスキルの獲得を目指す。</p>	
	社会統計演習2	<p>統計データを読み込むことは、現代社会の実態を理解していく上で不可欠のスキルである。本演習2では、統計データを読み解くだけではなく、実際の具体的なテーマに基づいて、数名のグループごとにデータをサンプリングし、これらのデータに統計的な解析を加え、最後に分かりやすく整理してプレゼンテーションを行うまでの一連の手続きを体験することを通じて、統計的データを使いこなせるようにする。</p>	
	メディア・コミュニケーション分析1	<p>新聞・出版・広告・広報・ロコミ・SNS等を対象にした例題に基づく分析と発表を、履修者全員に課す。教員の補佐のもと、全員参加の質疑応答を繰り返す。理解を深めた結果を、自主制作により確認する。これらを通じて、アナログとデジタルのメディア特性を具体的に理解する。同時に、人間や人間社会へのメディアの影響を考えるための知識、およびメディアを適切に選択利用する力を身につける。</p>	
	メディア・コミュニケーション分析2	<p>特に視覚情報を中心のコンテンツをめぐる諸問題への関心を深める。絵画・映画・チラシ等を対象に、履修者全員が既存作品を分析する。分担発表を課し、教員の補佐のもとに全員参加の質疑応答を繰り返す。理解を深めた結果を、自主制作により確認する。こうした作業を通して、静止画・動画・文字情報の作用の違いを理解する。さまざまなメディアの影響力を意識した上で、それらを適切に利用する力を養う。</p>	
	社会学文献講読（人間関係）1	<p>「わたし」が何者であるかを確認するためには、最初から「他者」という鏡が必要であり、だからこそ人間は社会的動物として生きていかざるを得ない。しかし他方で、人は周囲の期待に自分を合わせてしまったり、集団の雰囲気にならざる側面をも持ち合わせている。この授業では、社会学・人類学・心理学等が捉える「人間関係」の普遍的特質について理解を深めるべく、たとえば対面的な二者関係や小集団におけるコミュニケーション、アイデンティティの表現や形成などを扱った基本文献を紹介し、そのいくつかを精読する。</p>	
	社会学文献講読（人間関係）2	<p>現代人ないし現代社会における人間関係の特質と病理に関わる社会学、人類学、心理学等の文献を紹介し、精読する。現代の人間関係といえば、家・親族・地域等の伝統的な絆の希薄化、人間関係の流動化、メディアの介在、マイホーム家族や友人間の親密で情愛に満ちた関係、DV・虐待・いじめ・孤独化などの病理等々が思い浮かぶが、こうした現代の人間関係の諸相を分析し、考察するための重要な視点・手法・データを提示している文献を紹介し、そのいくつかを精読する。</p>	
	社会学文献講読（公共社会）1	<p>社会とは複数の諸個人によって成り立つ場所である。そこでは個人のレベルで抱かれる価値観・欲望・意図は、妥当なルールや適切な考え方として受け入れられるとは限らない。むしろ、視点の違いをどのように調停し、折り合いをつけるか、あるいは特別に重要視される基準を設けることで個人のレベルでの違いをまとめるか、といった課題に直面することになる。この授業では、社会学の古典的基礎文献のダイジェスト資料を用いて、先の課題に社会学者がどのように考えてきたか、追体験するなかで、社会的な思考パターンの基礎を身につける。</p>	
	社会学文献講読（公共社会）2	<p>複数の視点を調停し、あるいはそれらの間に序列を設けることで秩序をもたらす社会的な営みには、決定や強制といった手続きのみならず、対話や交渉、あるいは（戦略的な）協調といったメカニズムも含まれる。社会学の古典的な議論を把握した後は、ソーシャル・キャピタル分析や社会運動論など同時代的な論点を扱った文献を取り上げる。理論的な議論を精読することで、新たな社会的動向にも柔軟に対応できる分析力を培うことを目標とする。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 専 門 科 目 実 践 研 究 B	社会学文献講読（現代文化）1	現代文化に関するテキストを社会学や文化研究（カルチュラル・スタディーズ）を中心に人文・社会科学分野から幅広く選定し、受講生とともに精読する。受講生はテキスト内容の要約にとどまらず、著者の議論の意義と限界、関連する研究分野との関連性を考察し、多角的にテキストを読み解く訓練をおこなう。またテキストの読解を踏まえて討論し、アクティブ・ラーニングによる理解を深める。この授業は現代文化関連の講義や演習科目を受講するために役立つ知識や理論、概念、パースペクティブ等を身につけることを目標としている。	
	社会学文献講読（現代文化）2	現代文化に関するテキストを人文・社会科学分野から幅広く選定し、受講生とともに精読する。受講生はテキスト内容の要約にとどまらず、著者の議論の意義と限界、関連する研究分野との関連性を考察し、多角的にテキストを読み解く訓練を行う。またテキストの読解を踏まえて討論をおこない、アクティブ・ラーニングによる理解を深める。本授業は自らの卒業研究のために役立つ知識や理論、概念、パースペクティブ等を身につけ、応用発展できる力を養成する。	
	エスノグラフィ講読・作成1	私たちは地域や職場や学校等の人間関係を生きている。そこでは社会的脈絡と個人間の思惑や感情が交錯する。その現場に長期間寄り添い、それらが絡む様相を多元的・全体的に記述することを通して、社会的存在としての自他の生を理解しようとする試みがエスノグラフィの作成である。本授業では、人類学のエスノグラフィ精読、および自身の日常経験やフィールドワーク経験を記述する作業などを通じて、その視点・技法・知見に関する基礎および応用的知識を修得する。	
	エスノグラフィ講読・作成2	社会学では、質的社会調査の成果・記録として優れたエスノグラフィが、数多く蓄積されてきた。エスノグラファー自らのフィールド体験から紡ぎ出された文章は、単なる「異文化理解」や「他者理解」といった言葉で片付けられない臨場感や知的興奮をときに味あわせるものである。卒業研究に向けてフィールドワークを行なう学生にとって、その調査手法や記述スタイルは、具体的で応用可能なサンプルにもなる。授業では、社会学や文化研究などのエスノグラフィやノンフィクション作品を読み、エスノグラフィを試行的に書く。これらを通じて、エスノグラフィ記述の知識と応用力を養う。	
	文化人類学文献講読1	社会学と文化人類学ないし社会人類学は、相互に影響しあいながら、社会的存在としての人間の特質についての理解を深めてきた。本授業では、社会的存在としての人間の普遍的特質ないし現代人の特徴についての理解を深めるために有益な、文化人類学（社会人類学）の代表的文献を選び、演習形式で精読する作業を通じて、同学問とその観点や手法についての理解を深めると同時に、文献情報を検索収集し、文献研究を主体的に進めていく態度と能力を身につける。	
	文化人類学文献講読2	日本の現代文化の探究は、地域、世代、ジェンダー、エスニシティ、職業等においてさまざまな人々が担う多様な諸文化の交錯の様相の探究になる。現代日本に生起するさまざまな風俗習慣・文化事象を題材にした文化人類学ないし日本民俗学の代表的文献を選び、演習形式で精読する作業を通じて、同学問とその観点や手法についての理解を深めると同時に、文献情報を検索収集し、文献研究を主体的に進めていく態度と能力を身につける。	
	社会情報学文献講読1	社会情報学の理解に必要な文献読解力を養成し、情報化社会における諸問題への関心を深める。社会における情報とその諸問題について概説した教材について、履修者全員に分担発表を課し、教員の補佐のもとに全員参加の質疑応答を繰り返すことで理解を深める輪読をおこなう。これにより、社会情報学における基本的概念や専門用語を獲得するとともに、研究のための基礎的な方法論や理論的背景を理解し、自らの研究の方向性を検討する力を涵養する。	
	社会情報学文献講読2	社会情報学の理解に必要な文献調査や情報収集の能力を養成し、文献読解力を深化することで、情報化社会における諸問題への関心を深める。社会における情報とその諸問題に関する論文について、履修者全員に分担発表を課し、教員の補佐のもとに全員参加の質疑応答を繰り返すことで理解を深める輪読をおこなう。これにより、社会情報学における最新の研究動向を把握する能力を獲得するとともに、研究のための具体的な方法論や理論的背景を理解し、自らの研究の中で活用する力を涵養する。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
学科専門科目	実践研究	社会心理学文献講読1	現代青年における同性・異性と身近な人間関係をテーマに文献講読を行う。密な人間関係を形成しやすい環境にありながら、それがときに閉塞感を生み、ネット上でのつながりに振り回されるなど現代的な対人関係上の悩みも多く聞かれる。誰かと必要以上につながってしまう背景には、自分自身と向き合うことの困難さから逃れようとする青年期的な心性も影響している。本科目では、対人関係を形成・維持する過程の心理的メカニズムを学び、青年期を生きる学生が自らの悩みや不安を心理学的に捉え直す機会にすることを狙いとする。	
		社会心理学文献講読2	私たちは組織とどのように関わり、その中でどのように行動するかをテーマに、文献講読を通じて、組織と個人について心理学的に考える。学生の多くは卒業後、企業等の組織・集団に所属し、経営管理システムに携わる。そのとき、生産性と人間関係とのバランスを図るとい実務上の問題に、リーダーあるいは部下としてどのように関与し、組織や社会に貢献するかなどの具体的な課題を考えながら、学生が自らの将来像をイメージできるようになることを本科目の狙いとする。	
	卒業研究	学士課程の学修の集大成として、4年間の主体的研究実践の成果を、教員の指導のもと卒業研究にまとめる。主体的研究実践は、自ら設定した問題を探究する営みであるが、問題設定や探究方法は、社会学および関連学問領域の視点と方法を応用したものであることが望まれる。成果の表現形式は、論文、エスノグラフィ、社会的課題解決に向けての企画実践報告などである。探究方法や表現形式は研究倫理を踏まえたものでなければならない。学生は卒業研究作成を通じて、専門学問の視点・手法を体得するが、加えて問題設定・探究企画・計画実行・情報収集・分析考察・説得表現などの諸能力を総合的に身につける。		
現代総合科目	キャリア形成系科目	日本国憲法	憲法が、国家と国民の間の約束事性格をもつことを、日本国憲法の成立、基本的人権、法の下での平等、思想・信条の自由、信教の自由、表現の自由、社会権、統治機構、国会、内閣、裁判所、地方自治など基本的な事項について理解する。また、憲法が持つ意義一国家の国民に対する約束ルールを理解し、次に憲法が誕生した時代背景をビデオ資料をもちいて考察を深めていく。	
		発想から表現へ	本講義は、パソコンを使った文章の作成と研究の発表に関する入門講義である。(1)文章の構想メモの作成、(2)図表を入れた文章の作成、(3)発表用の資料の作成、(4)実際に資料を使ったプレゼンテーションの実施の4つの課題について、Microsoft WordやExcel、PowerPointなどのソフトに慣れ、様々な表現方法を実践し、自分の発想を多面的に表現できるようになることを目指す。個々が作成した課題は、中間発表会と最終発表会の2回の発表の機会を設ける。これらの課題作成と発表会を通して、レポート作成とプレゼンテーションの基礎的な技術を身につける。	
		思考法入門	演繹的且つ論理的に分析し、疑似科学や誤った論理、詭弁に惑わされないための思考力の修得を目指す。また現代社会が抱える様々な課題に対して自らの意見を持ち、判断することができるスキルの涵養を最終的な到達目標とする。近年、ある意見や議論に対して「賛成・反対」、「善い・悪い」という二元論で結論を導く風潮が強まっているが、それはともすれば思考停止を引き起こしかねない。そこで、思考停止に陥ったり、詭弁（虚偽の論法、おかしな論理）に惑わされないためのスキルを身につけることを目標に授業を進めていく。	
		日本語表現（入門）	大学での授業内課題やレポートの作成に必要な日本語表現能力を身につけることを目的とする。本授業では、第1週に「新しい作文・小論文の作成」、第2週に「作文・小論文の講評の後、書き直し」を行い、基本的に2週間を1セットのユニットとして進めていく。またそれらの前に講義と演習の時間を設ける。この授業で扱う作文の基本作法は大きく分けて三つあり、(1)原稿用紙の使い方、(2)自分と他者の意見の区別、(3)3部構成による小論文の書き方である。これらの習得を通じて、最終的には自分の主張を根拠立てて述べ、主張への批判に反論できる論理的思考・表現に到達することを目標とする。	
		日本語表現（実践）	基本的な文章構成や根拠のあげ方を学び、自分の「経験」や「思考」を人に分かりやすく伝える力を身につけ、レポート作成などの様々な場面で必要となる文章を書く力を身につける。具体的には、おおよそ4～5週間に1課題のペースで3つの文章を作成する。(1)自らの経験という身近な話題を取り上げ、ていねいに書く。(2)普段は見えない自らの価値観や世間一般の意識を取り上げ、根拠をあげながら論述する。(3)上記2つの手法を使いながら、短めの「書評」を完成させる。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
現代総合科目 キャリア形成系科目	探究基礎演習	<p>本講義は、課題探究型の学修<Project Based Learning (PBL)>をとおして、これからの社会で生きていくために必要とされる基礎的な汎用能力の育成を図り、キャリアデザイン能力を向上させることを目的とする。具体的には、グループワーク（実習）により次の4つの課題に取り組む。</p> <p>①フィールドワークの舞台となる京都市学校歴史博物館の存在価値を周知すること ②来館者数の増加を図るための取り組みを研究・企画すること ③京都市に対して①・②に関する取り組みの成果を提案すること ④上記①～③について、受講者の取り組みに対する評価方法を考案すること</p>	
	ポルトガル語圏のくらしと言葉1	<p>世界で約2億人を数えるポルトガル語圏諸国の人口のうち、その90%（1.8億人）を抱えるブラジルが、ポルトガル語を公用語とするに至った歴史的な経緯について概観するとともに、とりわけ、民族形成の背景となった宗教（キリスト教、他）や文学（寓話、民話）に注目して考察をおこなうことで、ブラジルの大衆文化についての理解を深めることを目指す。また、初歩的な文法の学修を通して、日常生活や旅行といった場面で使える実践的なポルトガル語の修得を目標とする。</p>	
	ポルトガル語圏のくらしと言葉2	<p>1990年に入管法が改正されたことで急増した在日ブラジル人の集住地域では、教育現場における子どもたちとの円滑なコミュニケーションが喫緊の課題として求められている。その際、単に語学としてポルトガル語を学ぶだけでなく、彼らの生活文化や習慣といった「くらし」を知ることが不可欠である。この授業では「ブラジリダーデ」と呼ばれる喜怒哀楽をはじめ、ブラジル文化の風土的特性や価値観を学修するとともに、基礎的な文法知識を踏まえた日常会話能力の向上を目指す。</p>	
	インターンシップ1大学コンソ京都	<p>本授業は、大学コンソーシアム京都による単位互換包括協定に基づく共同開講プログラムとして実施される。在学中に自らの専門分野や将来のキャリアに関連した就業体験をおこない、各自の研究活動やキャリアプランニングに役立てるとともに、企業や非営利組織において就業体験をすることにより、高い職業意識を育成する。また実社会での体験を現在の研究活動へ応用するとともに、自らのキャリアプランニングを明確にしていく。</p>	
	インターンシップ2大谷大学	<p>本授業は、就業体験を通じた将来像の明確化とコミュニケーション能力の涵養を目的とする。特に在学中に就業体験をおこなうことで、自分の将来像を明確にすることができるようになること、グループによる討論ならびに就業先での実務を通して、自身の意見を他者に伝え、また他者の意見を自身に取り入れ、コミュニケーション能力を高められるようになることが求められる。就業体験は、「働くこと」をテーマにした事前学習の受講とその成果をふまえて実施される。</p>	
	キャリアデザイン概論1	<p>「キャリア」とは就職に関するだけでなく「人生そのもの」を意味する言葉である。大学生活を主体的に有意義に過ごすために必要な知識・態度などを身につけ、目標を持って大学生活をデザインし過ごすことができるよう、考える機会を提供する。大学という場は「卒業後、どのような人生を送るのか」を考える上でとても大事な場であり、時間である。座学だけでなくエクササイズやグループワークを取り入れながら授業を進める。</p>	
	キャリアデザイン概論2	<p>「キャリアデザイン概論1」での学びを踏まえ、働くうえで必要とされる能力（特にコミュニケーション力）や社会現実についての理解、働くことと密接に関係している法・制度・システムに関する知識など、大学在学中から身につけておくことが望ましい基礎的な知識や能力の定着を目指す。講義形式で知識や情報を提供するほか、個人ワークやグループワークなどを取り入れながら進める。そして、大学生活を主体的に目標を持って過ごすことができるよう、自分自身の人生、大学生活の送り方について考える機会を提供する。</p>	
	キャリアデザイン実践1	<p>キャリアデザインとは、社会の中でどのように働き、どのように生きていくかを自分自身で考え、明確にすることである。一人ひとりが社会の中で自立して生きていくために必要とされる「社会人基礎力」について、グループワークを中心とした体験学習の中で、外部講師とともに考え、将来につながる学生時代の目標を立案する。この授業は主に第2学年を対象とする。</p>	
	キャリアデザイン実践2	<p>キャリアデザインとは、社会の中でどのように働き、どのように生きていくかを自分自身で考え、明確にすることである。一人ひとりが社会の中で自立して生きていくために何が必要なのか、自らの進路や将来について、グループワークを中心とした体験学習の中で、外部講師とともに考え、キャリアビジョンの計画を立てる。この授業は主に第3学年を対象とする。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
現代総合科目 キャリア形成系科目	ワード・プロセッシング入門	文章作成は現代社会人にとって必須のスキルである。そこで、文章作成のための技術や考え方をワープロソフトを利用しながら獲得する。具体的には、IMEによる日本語入力の基本を身につけ、Microsoft Wordの基本操作および書式・レイアウト・罫線・図形などの諸機能について学ぶ。これらを通じて、基礎的な各種文書の作成やデザイン・印刷の方法などを習得し、社会において必須の技能の獲得する。	
	ワード・プロセッシング応用	論理的な文章を作成するには、文章のアウトラインを作成しながら、思考を整理しなければならない。そのためのツールとしてワープロソフトが活用できる。そこで、日本語入力やMicrosoft Wordの基礎を習得している学生を対象に、アウトライン・スタイルなどの機能を用いた文書作成の方法を学ぶ。それとともに、総合演習課題（評論文の作成などを予定）への取り組みを通して、より応用的な文書作成の技術と思考の習得を目指す。	
	PC利用による表計算入門	数理解析の専門分野だけでなく、データベースの処理や文献の管理、予定の管理など、日常的な様々な場面で表計算ソフトを利用する必要がある。したがって、現代社会においてこの技能は必須のものである。そこで、この技術を獲得するためには、基本的なソフトの理解をしながら、その考え方を獲得していくことが効率的である。そこで、本授業では、Excel を利用した表計算についての基礎的な事項を学習する。それにより、情報の処理能力を高める。	
	PC利用による表計算応用	表計算を活用することで、様々なICTへの応用が可能となる。そのため基本事項は表計算ソフトを深く理解する必要がある。そこで、基礎的なExcelの活用を理解した上（「PC利用による表計算入門」の内容相当のことを理解している）で、Excel を利用した表計算について応用的な事項を学習する。具体的には、データベースにも活用できるような関数だけでなく、VBAなどのマクロを活用することで、多様な分野で活用できる力を養成する。	
	PC利用によるプレゼンテーション	コンピュータを用いたプレゼンテーションの手法の基礎について学ぶ。まず、図像の効果的な利用方法などを、Microsoft社製Powerpointを用いて練習する。次に、技術だけではなく、自分の考えをいかに相手に効果的に伝えるか、学会発表などでよく見られる発表形式を模擬することにより学習し、人前で発表出来るスキルを身につける。この授業を最後までやり抜けば、卒業論文・卒業研究を作成するために必要な知識が得られる。	
	PC利用によるレポート・論文技法	学術的な目的だけではなく、多様な目的でレポートや論文の作成技術は必要であり、現代社会では必須の力であるといえよう。論文やレポートの作成においては、PCを活用することでその効率は飛躍的に向上する。そこで、パソコン・ソフトを用いて、形が整ったレポート・論文を作成する。これにより、単にソフトの使い方に習熟するのではなく、他者に対して理解しやすい文章を作成する力を養成する。	
	画像処理入門	デジタル技術の発展により画像を使い、多様な表現が可能になった。ただし、多様な表現を実現するには、単に画像を使うだけでなく、それを処理することで可能になる。そのためには、デジタル画像とは何かということを理解した上で、適切な処理を行う必要がある。そこで、簡単な画像を作成し、画像を加工・編集しながら、コンピュータで画像ファイルを扱う基礎を学ぶ。これにより表現するとは何かということについて考える力を養成する。	
	画像処理応用	画像のデジタル化は画像処理を万人に開放した半面、基礎理解ができていないがために不適切な表現を示す可能性も増加した。この問題を解消するためには、本来の画像（アナログ画像）とデジタル画像の基礎知識や違いを理解した上で、デジタル画像を処理していく必要がある。そこで、デジタル画像以前の写真とデジタル画像の違いを実際に比較しながら、画像処理のノウハウを学ぶ。これにより、写真画像を適切に理解することで画像処理の基礎を確立し、デジタル時代にふさわしい画像制作をする力を養成する。	
	PCM्यूージック入門	音楽は人間にとって必要な娯楽である。かつては特殊技術であった音楽の作成がPCの出現により、専門家でなくとも可能になった。しかし、作成技術と適切な音楽とは必ずしも対応するものではない。適切な音楽を作成するには、デジタルデータとは何かといった基礎知識からその適性までを理解する必要がある。そこで、PCで音楽データを作る手法、MIDIデータや音源ファイルの概要および音楽の基礎を学ぶ。これにより音楽作成を楽しむとともに音楽とは何かということを考えるきっかけとする。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
キャリア形成系科目	PCミュージック応用	デジタル技術の発展により多様な音楽的表現が可能になった。ただし、その実現のためにはソフトの理解ではなく、適切な知識をもとにその可能性を探ることが必要である。音楽的な知識の理解のためには、実際に音を作りながら考えるのが最も効率的である。そこで、PCによる音楽データの作成を通じて音楽に関するさまざまな知識を学ぶ。これによりデジタル技術を使った高度な音楽表現技術を養成するとともに、多様な表現技術やそのための思考力を身につけることを目指す。	
	Webサイト構築入門	情報発信ツールとしてWebの力は大きい。Webページのコンテンツ自体はツールを利用して作成できるが、より高度なデザインやWebページとは何かを理解するには、その基本原理であるHTML・CSSを理解する必要がある。また基礎を理解することで、情報発信のツールとしての特性も理解することができる。そこで、HTMLおよびCSSを利用し、Webサイト構築に必要な基礎知識・技術を学ぶ。これにより、情報社会の情報発信の意義を理解する。	
	Webサイト構築応用	Webの情報発信力の要因の一つは、インタラクティブな表現ができることにある。この表現にはJavascriptのようなプログラミングの理解が必要となる。そこで、Webの基礎であるHTML・CSS（Webサイト構築入門）の理解を発展した上で、Webサイト上でインタラクティブな表現をJavascriptによって構築する手法を学ぶ。これにより高度な情報発信力を養成する。	
現代総合科目	生命のしくみと多様性	私たち「ヒト」は生命の中の一つの生命現象である。したがって、「ヒト」を理解するには「ヒト」という存在だけではなく、他の生物の関わりの中で理解しなければ、人間理解は成立しない。そこで、「ヒト」と他の生物（特に脊椎動物）の生命現象について、その概要を紹介する。ヒトとその他の生物を同時に学ぶことで、生物の多様性を認識し、ヒトの生命現象についてより深く理解することを目指す。	
	自然と生物の科学	人間を含めた生命は進化の過程を経て現在に至る。したがって、ヒトを含めた生命を理解するには進化とは何かということを理解しなければならない。進化は環境という要因によって成立するが、その環境とは自然である。そこで、生物の進化についていろいろな角度から考える。それにより、地球という環境の中で他の生命と関わる人間という観点をもたらし、人間とは何か、生命とは何かを考える基礎を養成する。	
	地震と火山1	地震や火山による災害は重要な問題である。この問題に対処するためには、そのメカニズムを知ることが重要である。そこで、地球の全体像と内部構造をはじめに学習する。その上で、地球表層で現在起こっている変動について、プレートテクトニクスを基礎として理解することを目指す。地震波を用いて地球の内部構造が如何に解明されるかを知った上で、地球変動の代表である地震や火山が、世界的に見れば限られた地域で起こる原因と、それらの発生のメカニズムを考察する。	
	地震と火山2	人間社会において、地震や火山活動がもたらす災害は多大なるダメージを与えている。したがって、地震や火山の活動に対する防災意識を養成しなければならない。地震や火山のメカニズムを理解することは、深刻な災害に対して人間がどのように考え、対処すべきかの視点を与える。そこで、地震や火山のプレートテクトニクスとの関わりを学び、地震と火山の基礎知識を習得する。そして災害に対する備えや意識を持ち、地球科学と社会活動とのあり方を考える。	
	地球科学1	現在の自然環境を考えるうえでは、自然を生み出す地球環境そのものの理解が重要である。地球環境を理解するためには多面的な理解が必要である。そのための視点として地球環境を構成するシステムについて理解する必要がある。そこで、地球表層で起こる気象現象や、地球を構成しているものについて学習する。その上で、地球のシステムが自然の道理の中で出来上がっている素晴らしいものであることを学習する。	
	地球科学2	現代社会や文化は人間という要因だけで成立するものではない。人間という要因以上に、その人間が暮らす環境を作り出した自然環境が重要といえよう。したがって、気候風土といった地誌的な背景をもとに人間生活を生み出す地球環境を理解する必要がある。そこで、自然環境を、主に地球のシステムや地史的背景から学習する。これにより自然科学的な視点を加えて、人間社会や文化が成立した要因や背景を考察する力を養成する。	
自然生命系科目			

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
現代総合科目 自然生命系科目	地球環境と生命の共進化	「平均気温摂氏15度、酸素21%を含む1気圧の大気」、現在の地球はこのような穏やかな環境のもとにある。しかし、過去の地球はいつもこのように穏やかな環境にあったわけではない。46億年前太陽系の一員として誕生した地球は、灼熱の高温状態であった。その後徐々に冷却しながら海が生まれ、その中で生命の誕生と数々の生物進化を経て、生物と地球はお互いに影響を与えながら、その環境を変化させてきた。本講義では、宇宙誕生から地球誕生までの初期の地球環境形成史、先カンブリア時代の生命と地球表層環境の共進化、古生代・中生代・新生代の生物の進化・絶滅と地球環境の変化を関連付けて学ぶ。	
	こころの科学	心理学の基礎理論を理解することによって人間、とりわけ自己を心理学的に深く理解することを目標とする。具体的には、無意識のこころ、コンプレックス、学習理論、しつけの仕方、知覚の理論、認知の発達理論、心理テストの実施などを予定し、人間のこころと行動の理解、心理学のおもしろさの発見、自分のこころとの出遇いを目指す。	
	人間理解の心理学	人間の心理的発達理論を通して、青年期を生きる自己理解を深め、心理テストさらには人間に共通の心理特性への理解を深めて、対人関係を豊かにすることを目標とする。本講義では、(1) 人間の生涯にわたる心理発達の過程と発達課題を理解して、自己の過去を振り返り、現在を見つめ、将来を見渡すこと。(2) 人間の心理特性を理解して、円滑な対人関係を構築することを目指す。	
	スポーツと健康の科学1	スポーツ現場で起こる事象について心理学的視点から理解する。具体的には、スポーツ心理学の歴史的背景、生涯発達の視点からみたスポーツ、スポーツにおける動機づけ、運動好きと運動嫌い、指導者の及ぼす影響、チームの心理（チームワークとリーダーシップ）、怪我（心理学的意味と心理サポート）、スポーツ選手の心理サポートなどの諸点について考察を進めていく。	
	スポーツと健康の科学2	アスリートの心理サポート、特に試合の場における心理現象について考察していく。心理的問題を考え、どのように乗り越えるのか対策が立てられるようになることを目指す。具体的には、メンタルマネジメントの実際として、アセスメント、目標設定、セルフモニタリング、ピークパフォーマンス分析、集中力、パフォーマンスルーティン、ピーキングメンタルマネジメントの諸事例を学んでいく。	
	脳とこころ	脳の機能の基本的な知識、および脳とこころの関係を理解するとともに、こころの病気について知識を深めることを目的とする。脳の構造と機能について基本的な事項を学修し、神経系の機能や感覚器の概要、多岐にわたる脳の病気の症例やその対応などについて、具体的な事例を参照しながら考察を進めていき、脳の機能とこころとの関係、こころの病気についての基礎知識の修得を目指す。	
	障害者スポーツ論	障害のある人のスポーツへの理解を深めることを目的としながら、「初級スポーツ指導員」資格取得に関する授業として、障害者スポーツ実践に役立てられることも目標としている。本講義では、(1) 障害者スポーツを知る、(2) 「障害」についての知識を身につける、(3) 障害のある人にとってのスポーツの意義を理解し、スポーツを通じたノーマライゼーションについて理解することを課題とし、その理解と実践のために、データ資料とビデオ資料を織り交えながら考察を展開していく。	
	生涯スポーツ・レクリエーション活動	本講義は、身体活動としてのスポーツと余暇活動をテーマとし、現代社会及び少子高齢化社会においてスポーツやレクリエーション活動が果たす役割について理解することを目標としている。また、障害者に関する「初級スポーツ指導員」資格取得に関する授業として、障害者スポーツ実践のための基礎理論の習得も目標としている。授業計画では、資料配付、ビデオ鑑賞、実体験、レポート作成などを交えながら授業を展開する予定である。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
現代総合科目 自然生命系科目	スポーツ研究演習Ⅰ	スポーツ実践を支えるからだ・心について具体的に考えながら、からだを動かすことの意味やスポーツとは何かについて考察する。本授業での考察を通じて、トレーニングの基礎理論・ウォーミングアップやストレッチなどを理解し、自己の体力に応じたトレーニングメニューを作成・実践することで、これからの自分自身の健康や体力を考える力を身につけることを目指す。	
	障害者スポーツ研究演習Ⅰ	本講義は、障害のある人のスポーツとからだを考えることを目的とする。具体的には、障害のある人のスポーツ（車椅子スポーツ、視覚障害者のスポーツ、レクリエーションスポーツ）の紹介とその実践を通して、障害や障害者スポーツについての基本的な知識を身につけ、障害のある人にとってのスポーツの意義を知り、障害の有無に関わらず参加できるスポーツを考察し、スポーツを通したノーマライゼーションを理解する。	
	スポーツ研究演習Ⅱ	スポーツ実践を支えるからだ・心について具体的に考えながら、からだを動かすことの意味やスポーツとは何かについて考察する。本授業での考察を通じて、トレーニングの基礎理論・ウォーミングアップやストレッチなどを理解し、自己の体力に応じたトレーニングメニューを作成・実践することで、これからの自分自身の健康や体力を考える力を身につけることを目指す。	
	障害者スポーツ研究演習Ⅱ	本講義は、障害のある人のスポーツとからだを考えることを目的とする。具体的には、障害のある人のスポーツ（車椅子スポーツ、視覚障害者のスポーツ、レクリエーションスポーツ）の紹介とその実践を通して、障害や障害者スポーツについての基本的な知識を身につけ、障害のある人にとってのスポーツの意義を知り、障害の有無に関わらず参加できるスポーツを考察し、スポーツを通したノーマライゼーションを理解する。	
	カウンセリング	カウンセリングを、心理学の実践の場ととらえ、カウンセリングの基礎である臨床心理学を中心に、カウンセリングの理論を理解する。また、事例論文を読み、カウンセリングの流れをつかむ。考察の流れとしては、カウンセリングの歴史と背景、主要理論、対象と外的枠づけ、さまざまな技法、正常と異常の理解、カウンセリングが必要になるときなどの項目を学び、事例論文を基にした事例検討をおこなう。これらの考察を通して、カウンセリングの理論的背景や専門性を学び、精神的健康について理解することを目指す。	
	身体活動Ⅰ	身体活動の体験には、からだや心、コミュニケーション、行動力などの意識を高める要素が含まれている。バドミントン、バスケットボール、バレーボール、卓球の各競技のスポーツ活動を通じて、自己表現力を高めることを目指す。各競技においては、種目別実技の基礎技術の理解、基礎技術の応用、ゲームの知識と実践、ゲーム方式の検討と工夫を考察し、発表していく。	
	身体活動Ⅰ（障害者スポーツ）	障害のある人のスポーツを理解することを第一目標として、障害の種類や程度に応じて行われているスポーツ種目を実体験する。具体的には、（1）視覚に障害のある人のスポーツ（誘導、伴走、独歩、ボール扱い）（2）車椅子使用のスポーツ（スラローム競技）（3）障害者とレクリエーション・スポーツ（輪投げ、ペタンク）について基本的な必要技術を確認する。	
	身体活動Ⅱ	身体活動の体験には、からだや心、コミュニケーション、行動力などの意識を高める要素が含まれている。バドミントン、バスケットボール、バレーボール、卓球の各競技のスポーツ活動を通じて、自己表現力を高めることを目指す。「身体活動Ⅰ」での学習に引き続き、バドミントン、バスケットボール、バレーボール、卓球を開講し、各競技の種目別実技の基礎技術の理解、基礎技術の応用、ゲームの知識と実践、ゲーム方式の検討と工夫を考察し、発表していく。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
自然生命系科目	身体活動Ⅱ（障害者スポーツ）	障害のある人のスポーツを理解することを第一目標として、障害の種類や程度に応じて行われているスポーツ種目を実体験する。「身体活動Ⅰ（障害者スポーツ）」に引き続き、（1）視覚に障害のある人のスポーツ（ゴールボール、フロアーバレーボール、盲人卓球）（2）車椅子使用のスポーツ（車椅子バスケット、車椅子テニス）（3）障害者とレクリエーション・スポーツ（輪投げ、フリーブロー）について基本的な必要技術を確認する。	
	人間関係と身体表現	ノンバーバル（非言語）コミュニケーションについて基本的な理論を知り、実際の活動場面での体験とおして、日常的な生活のなかで実践できるようになることを目標とする。言葉での情報伝達を中心と考えがちな人と人とのコミュニケーションについて、言葉以外の要素（ノンバーバル）に着目し、知識を深め、さまざまな場面での実践を経験し、ノンバーバルコミュニケーションを活用する。	
	障害者・病者と共に生きる	授業の中心に据えるハンセン病問題への学びとおして、「差別から人間が解放されるとは一体どのようなことなのか」という課題を深め、差別を見抜き、それを許さない自己自身の確立と、「共に生きる」ということを自らの課題として受けとめていくことを授業の目標とする。近現代日本の絶対隔離政策の実際とその背景および、厳しい隔離と差別の中で、人間回復の闘いを続けてきた人たちの運動の歴史と現在を学習し、「障害者」「病者」と共に生きるということ、各人の主体の上に確かめていく。	
現代総合科目	ヨーロッパの宗教と文化（ドイツ）	事前講義では、現地研修をおこなう動機の上を目的として、研修に必要なドイツ語の基礎をレクチャーし、映像資料を用いて各研修地の生活と文化の特徴を考察する。現地研修では、リュエデスハイム、コッヘム、ローレライを訪問し、大学町であるハイデルベルクでは日本の大学とのちがいを視察し、ミュンヘンでは、事前学習の成果をふまえて、美術館を中心に精力的にグループ行動をおこなう予定である。事前講義と現地の人々との交流体験学習を通じ、ドイツ文化のみならず、異文化理解に必要なさまざまな事柄をひろく修得する。	
	ヨーロッパの宗教と文化（フランス）	フランスの豊かな生活文化や地方の風景・歴史的建造物などにじかに触れ、具体的知識だけでなく内面的視野をも広げることが目的とする。事前講義では、研修に必要な最低限のフランス語会話、および、歴史や文化についての基礎知識を習得する。現地研修では、パリのほか、ロワール地方、モン・サン・ミッシェルとジヴェルニーを訪れる予定である。事前講義と現地の人々との交流体験学習を通じ、フランス文化のみならず、異文化理解に必要なさまざまな事柄をひろく修得する。	
歴史文化系科目	現代朝鮮半島事情	朝鮮半島の人びとが経験した日本による植民地支配、朝鮮戦争から現代に至る歴史を概観したうえで、韓国と北朝鮮の政治・経済・社会・文化の現状と課題について、安全保障体制、民主化、産業や労働、芸能やスポーツ文化など、さまざまな具体的トピックを交えつつ検討し、理解を深める。また、日本、韓国、北朝鮮、在日の人びとそれぞれの相互理解や交流の現状と課題、マスメディアやSNSがそれに果たす役割、日韓世論動向などにも言及する。	
	現代東南アジア事情	東南アジア諸国と日本は、過去から現在にいたるまで政治経済面で緊密な関係にある。講義では、東南アジアの地理や現代史に関する概括的知識を確かめたうえで、東西冷戦体制が終焉し東南アジアに経済の時代が訪れて以降、政治・経済・社会・文化の各側面でのどのような状況が生じているかを、タイなどいくつかの国に焦点を当て概観する。国レベルだけでなく、地方の人びとの暮らしや人間関係や意識にも目を向ける。映像資料を適宜、視聴し、履修者が具体的なイメージを持って、考えることができるよう配慮する。	
	東南アジアの宗教文化	東南アジアではさまざまなエスニシティの人びとが暮らしている。彼らの少なからずはそれぞれに自前の精霊（カミ）を祀っている。そして仏教やイスラムなど世界宗教の信徒でもある。講義では、たとえば、東南アジア大陸部の上座部仏教とそれに帰依する人びとに焦点を当てる。僧侶、サンガ、寺院、経典等について説明する一方で、在家信徒の宗教意識や儀礼実践、近現代の社会変動と宗教文化との関連などに言及する。具体的な事例を検討するなかで、当地の人びとの宗教生活の形態への理解を深める。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
現代総合科目 歴史文化系科目	近代日本とアジア	19世紀における日本の歴史、特に誰でも知っているであろう「ペリー来航」という事件の周辺を、世界史の中の日本、東アジアの中の日本、という視点から描き直す。歴史の時代区分という問題、世界史における「近代」、東アジア史における「近代」、東アジアにおけるイギリスとアメリカ、ペリー来航の意義などの考察を通して、日本史／世界史という二区分の発想から頭を解放する。これらを通して、歴史を大きくとらえる視点を養い、一つの事件の歴史的な背景を探る姿勢を身につける。	
	東アジアの宗教文化	中国近世の宗教と国家をテーマに、宋から清代に至る中国近世において、宗教は国家といかなる関係を取り結び、どのような歩みを辿ったのか、そこにいかなる宗教文化が形成されたのかを概述する。「大蔵経」と「道蔵」の開版、新儒教と新道教、仏道論争の経緯、宗教結社と秘密結社、宗教と「反乱」などの考察を通して、中国近世（10～19世紀）における儒仏道三教およびその他の宗教や民間信仰の歴史とそこから生み出される文化について基礎的な理解を得る。	
	古都の歴史と文化	京菓子は平安時代にまでつながる文化の所産であり、日本独自の食べ物に発展し今に伝わり生活に生き続けている。授業を通してお菓子の文化を知り京都の生活文化を理解する。また京菓子だけではなく、いろいろな京都の工芸品の意匠(デザイン)に影響を与えた俵屋宗達・尾形光琳などの琳派について学ぶことにより、京都の意匠(デザイン)の奥深さについても理解していく。	
	仏教と美術	本講義は、荘厳の世界を具体的な事例をとおして考察していく。「荘厳」とは目に見えない仏の世界を形にあらわすことである。仏教に関わる美術や工芸が、寺院の荘厳をどのように実現しているのか、その技術や思想、歴史的・文化的背景について考察する。これらの荘厳に関わる一つひとつの文化が、どのように仏教と関わるのかを考えることを通じて京都の伝統文化のあり方を理解していく。	
	インドの宗教と文化	事前講義においては、仏教を中心としたインドの宗教や文化・歴史の概要について学ぶ。また現地研修では、インド北東部やネパールに点在している四大仏跡などの仏教遺跡を中心に、インドの大地を2週間かけて巡り、インドの文化に肌で触れる。事前講義と日本とは環境が大きく異なる国を訪れる現地研修での学びを通して、私たちが日頃当たり前と思っている自分の日常やものの考え方を反省的に問い直し、異文化を理解する視座を身につける。	
	中国の宗教と文化	日本の宗教と文化に決定的な影響を与えた中国。この研修は、中国を代表する仏教遺跡を実際に訪ね中国と日本、双方の宗教と文化理解を深めること、また急速な経済発展を遂げている「現代の中国」と、変わらずある「悠久なる中国の歴史と文化」と理解することを目的とする。現地研修では、西安や洛陽、敦煌などを訪れる予定であるが、親鸞に影響を与えた浄土三祖関係をも視野に入れたコース設定となる。準備として、中国仏教史や浄土三祖伝などの事前講義を行う。	
	人と文化	男性と女性の身のまわりの出来事に視点を当て、そこに写し出される人間行動の諸相を明らかにする。男女差と文化、ジェンダー、結婚の類型、インセスト・タブー、同性愛、女人禁制などのテーマを考察していくことで、文化人類学がどのような学問なのかを理解し、その研究視点について修得する。そのうえで、人類における男性と女性の多様な価値観が理解できることを目標とする。	
	教育学1	本講義は、教育観の歴史と教育の理念をテーマとする。具体的には、西欧近代における教育思想とその背景にあるこども観の歴史の変遷、および近代以降の日本における教育制度と教育実践の歴史的展開を考察し、教育の意義や目的について自らの問題として考えることができ、現代社会における教育の課題を理解し、それに対する自分の考えをまとめて討論に参加することが出来るようになることを目的とする。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
現代総合科目 歴史文化系科目	教育学2	教育と人間とはどのように関係しているのかを学んでいく。まず、わたしたちの受けてきた教育を振り返り、教育はどのように生まれてきたかを見る。その後、教育現象の具体的なテーマとして、子どもと教育、学校（教育）における病理現象、家庭と教育を取り上げ考察を深めていく。本講義をとおして、教育が人間に及ぼす影響について教育学の知見を学んでいくことはもちろん、社会学・心理学・哲学等、教育学の周辺領域についての知見も取り入れ、教育について深く考えることができるようになることを目指す。	
	ブッダに学ぶ	ヒマラヤ山脈の麓に広がるチベット。そこではおもにインド大乘仏教と後期密教の伝統が継承され、仏教が人々に根付いている。一方で仏教と同じく輪廻からの脱出と成仏を目標としながら、チベット土着の宗教伝統を受け継ぐユンドゥン・ポンの教えもこの地には存在する。こうしたチベットの宗教の中で、ブッダはどのように描かれ、どのような教えを説いたとされるのかを俯瞰しながら、そこから我々が何を学ぶべきかを考える。	
	親鸞に学ぶ	親鸞の生涯とその基本的な思想を学ぶことを通して、現代を生きる私たち人間の課題について考える。親鸞は、その生涯を通して「人間の真実の生き方」をたえず問い続けていった人である。親鸞の言葉をてがかりに、その人間観を学ぶ。親鸞は、二十年に及ぶ比叡山の自力修行を棄てて、法然の専修念仏の教えに帰依する。これは親鸞の生涯において決定的な出来事であり、自らその事実を「雑行を棄てて本願に帰す」と告白している。これは、単にそれまでの自力修行を止めて、他力に切り替えたという意味ではなく、人間の本質がどこにあるのかを見出したことに他ならない。現代を生きる私たち自身の生き方をこの事実から問い尋ねていく。	
	部落差別と大谷派教団1	部落差別と大谷派教団との関わりをたどり、差別を傷む心の回復を求める。まず、部落差別の過去と現在を概観し、部落差別と仏教、ことに真宗大谷派教団との関わりはどのようなものであったかを、親鸞と当時の被差別民のありかたや、大谷派教団の差別事象、差別事件等を通して見ていく。これらを通して、大谷派にとって部落差別という問題のもつ意味を考える。また、人権とは何かについても学ぶ。部落差別問題とは、誰が、何を、どうしようとするものなのか、またそこから何が願われているのかを考察し、学習の主体と目的を明らかにする。	
	部落差別と大谷派教団2	親鸞と中世賤民のありかた、大谷派教団の差別事象を通して見ていく。また全国水平社による東西本願寺教団批判のもつ意味を考える。水平社は誕生と同時に、東西両本願寺教団に対して「募財拒否」を行っている。部落大衆の「貧困」が理由であると述べられているが、その底流には本願寺の募財のあり方が、差別を拡大し再生産しているという強い批判があった。「御同朋、御同行」と民衆を呼んだ親鸞の精神と、それに背いている教団の在り方への水平社の批判を通して、あらためて、現代における真宗教団の意義を確かめ直すことを課題とする。	
	部落差別と浄土真宗1	大谷大学人権問題学習テキスト『差別のない世界を求めて』の精読をとおして、差別とは何か、部落差別とは何か、人権とは何かについて学ぶ。部落差別問題とは、誰が、何を、どうしようとするものなのか、またそこから何を願われているのかを考察し、学習の主体と目的を明らかにする。また、仏教（釈尊）と浄土真宗（親鸞）の思想が、この問題とどのように関わっているのかその視座を確認する。	
	部落差別と浄土真宗2	親鸞が開頭した浄土真宗の教えに立って、差別とは何か、部落差別とは何か、人権とは何かについて学び、人間が人間であるためにどのように生きていくべきかを考えていく。「部落差別と浄土真宗2」においては、「部落差別と浄土真宗1」で学んだ差別の歴史が単なる知的学習に終わるのではなく、自分自身の生き方とどう関わるのか、自らもまた差別する体質を持ち、差別している事実を学生自身に問いかける内容としていく。具体的には、親鸞の言説を確かめることを通して、信仰の内容と社会的差別に関わるのが、別のことではないことを確かめていく。	
	部落史論1	日本独自の差別である部落差別は、どのようにして生みだされたのか。また、なぜ、どのように今も存続しているのかを学ぶことによって、差別を傷むところを回復する。部落差別という問題をその起源からアプローチし、日本の歴史を通じて、どのようにしてその差別が存続されてきたかについて、時代を追って学んでいく。特に「部落史論1」では、おもに中世から近世までの歴史資料の中から、人間の持つ差別性、浄穢観の形成と肥大化および、被差別者の諸相について確かめる。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
現代総合科目 歴史文化系科目	部落史論2	「部落史論1」に続いて、日本独自の差別である部落差別は、どのようにして生みだされたのか。また、なぜ、どのようにして今も存続しているのかを学ぶことによって、差別を傷む心を回復することを目的として授業を行っていく。「部落史論2」では、ことに明治以降から現在に至る部落問題-国家による被差別部落対策としての政策、被差別部落観の推移などを見ていく。これらを通して、現在から未来に向けて、何が求められているのかを私たち一人ひとりの課題を確かめる形で模索していく。	
	反カースト運動論	カーストからの解放を求めて仏教に改宗したアンベードカルと、インド独立の父とも称されるガンディーの、人と思想を通して、それぞれの歴史の意味を考える。アンベードカルは、1954年にインド仏教徒協会を創設した。1956年12月に死去する2ヶ月前に三宝・五戒を授けられることで正式に仏教徒となる。これに続いて50万人もの不可触民（ダリット）と呼ばれる人々も仏教へ改宗し、新仏教運動へのきっかけとなった。彼は、徹底してカーストからの解放を願ってその生涯を解放のために捧げた。彼の生涯と思想的足跡をたどり、反カースト運動の意味を考察していく。	
	アイヌ民族と共に	異民族としてのアイヌの民族文化を学び、異なった民族と共存する道を求める。アイヌ民族は、主に北海道、樺太、千島列島に居住する先住民族で、かつては東北地方北部からロシア・カムチャツカ半島南部に及ぶ広い範囲に居住し、狩猟・漁労に従事しながら、大陸との交易を盛んに行っていた。母語はアイヌ語で、固有の文化や生活習慣を有している。そのアイヌのもつ文化、和人との交流史などを確かめていく。先住民族の文化を学び、同時に侵略の歴史も学ぶことを通して、今何が求められているのか、私たち人間としての在り方も含め考えていく。	
	アジア侵略と宗教	人権理論、平和理論の今日の到達点を学び、日本国内、アジア太平洋地域を始めとする世界の人権・平和問題を分析する視点を培う。特に、戦前、戦中の宗教とりわけ仏教者の言説を中心に歴史を掘り起こし、その課題を探る。戦争を正当化する思想（靖国神社問題等）について学び、グローバルな人権と平和について考察する。過去の歴史を学ぶことを通して人権問題と平和が深く関わっていることを学ぶ。具体的には、宗教的人格権や平和的生存権を獲得する取り組みから現在の課題を学ぶ。人間解放の思想としての平和論（仏教思想）について考察する。	
	非戦の系譜	明治期の対外戦争への批判の跡をたどり、現代に生きる自らの戦争観をはっきりさせる。特に日露戦争における社会主義者、クリスチャン、仏教者の反応の跡をたどり、開戦論、非戦論の双方をみながら、明治後半期の日本の課題と現代に生きる私たちの戦争観を考える。また当時、和歌山県新宮を中心に非戦と平等を願い求めた大谷派の僧侶・高木顕明についても学ぶ。彼は「大逆事件」の罪を着せられ連座。さらに大谷派は高木顕明を住職差免僧籍剥奪をしている。国家の体制とそれに対して宗教が持つ意味についても、歴史を検証しつつ学んでいく。	
	仏教福祉論	授業の前半では「寺の意味」について考えたい。寺院消滅、コミュニティの崩壊という現実を突きつけられて、私たちは何を失い、何を守らなければならないのだろうか。海外に点在する日系寺院の活動からは、国内の寺院活動とはまた違った視点が見えてくる。授業の後半では「スピリチュアル・ケアの実践」について考えたい。高齢者ケアの現場やホスピス/ビハラー活動の現場を紹介しながら、同ケアの実践について理解を深めたい。	

(注)

- 1 開設する授業科目の数に応じ、適宜枠の数を増やして記入すること。
- 2 私立の大学若しくは高等専門学校の収容定員に係る学則の変更の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合、大学等の設置者の変更の認可を受けようとする場合又は大学等の廃止の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合は、この書類を作成する必要はない。

授 業 科 目 の 概 要 (社会学部 コミュニティデザイン学科)				
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
共通 基礎 科目	総合 科目	人間学Ⅰ	本講義では、大谷大学に学ぶ私たち自身の問題を考えるための土台を形成することを目的とする。前期では、釈尊伝をもとに仏教の思想が照らし出す人間のあり方から、自分自身の生き方を考え学んでいく。時には、仏教以外の哲学や思想、現代の社会問題にも触れながら、授業を進めていく。また、人間学の重要なテーマとして人権問題学習を行う。後期では、前期の学習を引き継ぎつつ、親鸞の生涯と思想を通して、自己や人間について考え学ぶ。また親鸞の思想以外の広いテーマを取り上げることで、現代を生きる人間の具体的な問題について考える視点を学んでいく。	
		人間学Ⅱ	人間学Ⅰで学んだ釈尊伝を基礎にして、さらに深く釈尊伝について学ぶ。ゴータマ・シッダールタと呼ばれた青年がブッダ（目覚めた者）と呼ばれた意味を確かめる。この授業のなかで仏教の基礎的知識を身につける。そして、仏教の根本課題を明確に捉えることができる。そのことを通して、自己と他者への理解を深め、主体的にしかも共に生きる歩み方を模索する。	
		人間学Ⅱ	インドで興った仏教は、中央アジア・中国・朝鮮半島を経て日本へ伝来した。また、南方諸地域にも広がっていった。仏教は、各地の文化と接触し、それぞれ特徴的な変容を遂げていった。仏教の伝播は単に思想交流のみにとどまらず文化交流というにふさわしい、文化変容ももたらした。本講義では、仏教伝播を担った各地の仏教者がどのようにかかわっていったのか、その生涯を踏まえながら感じ取り、その意味を考える機会とする。	
		人間学Ⅱ	親鸞は人間が生きる確かな根拠を「真宗」という言葉によって明らかにした。その親鸞の確認を受けとめていく時、人間はどのように生きていくことができるのか、その手がかりを親鸞以降の浄土真宗の歴史に尋ね、混迷する現代社会の中に身を置く私たち一人ひとりの人生の課題を考察していく。本講義ではそのことを、蓮如の生涯と言葉を中心に講義していく。	
		人間学Ⅱ	本学初代学長清沢満之の生涯と思想を学ぶことを通して、大谷大学建学の精神に触れていく。清沢が「自己の信念の確立」（真宗大学開講の辞）という言葉で表現する建学の精神は、さらに佐々木月樵によって「本務遂行、相互敬愛、人格純真」という「本学に於ける人格陶冶の三モットー」（大谷大学樹立の精神）として展開されていく。大谷大学のこれまでの歩みにも触れながら、本学に学ぶ私たちに願われていることを確かめていく。	
		人間学Ⅱ	本学の正門と北門に毎月掲示される「きょうのことば」は、真宗・仏教の精神を教育と研究の基盤とする大谷大学における学びを明らかにするものであり、あわせてその解説文も作成されている。これまで掲示されてきた「きょうのことば」を取り上げ、その言葉が生まれてきた背景や意味を学ぶことを通して、一人ひとりに問いかけられていることを確かめ、人間が生きることの課題について考察していく。	
		人間学Ⅱ	現代社会が抱える様々な問題を捉えることによって、人間とは何かという問いについて考える。また、仏教の人間観を学ぶことによって、現代社会の様々な問題をどのように捉えておくべきか考察する。幅広い仏教の知見によって人間や社会の諸相を分析し、いかにして我々が抱える問題を解決する手がかりを得ることができるのか検討することになる。	
		人間学Ⅱ	人として生きるとはどのようなことなのか、そしてそのことに宗教がどう関係しているのかについて考察する。宗教に関する幅広い知識を身につけ、宗教の根本課題を確かめて、宗教の持つ意味について学ぶ。〈宗教〉や〈人間〉をあらゆる角度から分析することによって、大谷大学の〈建学の理念〉に基づく主体的な歩み方について考えることになる。	
		人間学Ⅱ	宗教的・思想的な営為のなかに〈自然〉がどのように織り込まれているのかに着目する。精神文化と自然環境との繋がりを理解することになる。自然観・環境観を学ぶことを通して、人間社会をとりまく自然環境に関する知見を深める。そして、我々のあり方を根本的に見つめ、いかに社会や文化の発展に貢献することができるか考えることになる。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
共通基礎科目	人間学Ⅱ	哲学的思考とは、世界の中で起こる具体的な問題について、その具体性をいったん取り除いた後に残る抽象的な枠組をその問題の本質として捉えようとする試みである。ともするとその抽象性ゆえに難解で浮世ばなれした印象を持たれることもある哲学であるが、その抽象性の目的は、この世界の問題を正確に考えるためのものであり、その問題への答えがいつでもどこでも誰にでも当てはまるようにするためなのである。ここでは、様々な哲学者の著作に学びつつ、私たちがいま抱えている悩み、小説や映画の中で出会った疑問、ニュースで知った不条理について考えていく。	
	人間学Ⅱ	千年の歴史を誇る都・京都は、永く政治・文化の中心としてその存在を誇ってきた。また多くの寺社が所在し、京都は宗教都市でもあった。最新の研究成果を踏まえながら、宗教都市の歴史・空間構造・特色を理解しつつ、寺社を中核に形成された門前町の歴史・景観・文化・住人・将来像を考えたい。また、実在する門前町の実態と、京都市の都市行政としての門前町の将来について考える機会としたい。	
	人間学Ⅱ	文芸は、人の心を豊かにし、人の世を長閑にする言語芸術である。人間を理解する上で、人間を感動させる文学の研究は、好適な分野の一つであると言える。文芸作品の世界を明らかにするために、具体的な課題設定のもとで、言語表現に関する適切な知識を身につけ、表現内容を主体的に追究することは、文学研究として個々の文芸作品の価値を見出すだけでなく、作品世界に映し出された精神の普遍的価値を探究する営みである。こうした一連の学修過程において、人間をめぐる諸問題の解明、および人間への本質的理解を目指す。	
	人間学Ⅱ	障害者差別解消法が、平成28年4月から施行され、障害者差別の問題は社会全体の課題としてクローズアップされている。大学においても、障害学生の履修支援への合理的配慮が求められている。しかし、障害者を取り巻く現状は、偏見や無理解に基づく差別があり、決して楽観視できるものではない。では、私たちは、障害のある人もない人も、互いに、その人らしくともに安心して暮らしている社会を、いかに実現していけばよいのだろうか。本授業では、こうした問題意識に基づきながら、障害者の人権問題に焦点を当てて考える。	
	人間学Ⅱ	私たちが、互いを尊重しながら、豊かな関係を築き、社会全体の幸福を求めようとするとき、何よりも自他の人権に配慮して生きることが大切となってくる。しかし、現状では、様々なハラスメント（アカハラ、パワハラ、セクハラ等）をはじめ、部落差別、民族差別、障害者差別、性差別、人種差別など多くの差別問題が、解消されていない。本授業では、世界や日本社会に存在する様々な差別問題について学びつつ、合せて、差別意識を抱える人間存在そのもの問題についても見つめながら、人権問題について考える。	
	人間学Ⅱ	当該科目では、人々が生活する場所の自然環境を多角的に捉え、環境因子について学ぶとともに、人々が自然環境とどのように向き合ってきたかを講義する。生活の場は、日本を中心に扱うが、比較のため諸外国の例も示す。具体的には、地形、地質、気象、植生、動物相、水文、自然災害等について学び、それらに関わる文化事象について詳述する。	
大学導入	学びの発見	大学で学ぶためには、様々な資料を読み解き、そこから自らの意見を論理的に展開しなければならない。そこで、初年次教育として、資料の収集方法を知り、資料の論理構造を理解した上で、自らの志向の過程を論理的に展開する力を養成する。具体的には、資料を読んでその要点をまとめた上で、他者との交流を通してアイデアを拡張、論理的な文章を書く作業を行いながら、レポートを作成する。その成果を他者に伝え、ディスカッションすることで、自らの学びを自己評価できるようにする。	
必修外国語	英語Ⅰ	大学に入学するまでの学習で身につけた基本的な語彙、文法事項を確認するとともに、英語の背景にある文化や歴史に目を向けながら、さまざまな分野の話題に関する英文を読んで、英語の四技能（英語を聴く能力、話す能力、読む能力、書く能力）のそれぞれを、バランスよく伸ばし、英語運用能力を高める。またこれらを通して、英語圏における「論理展開」を理解し、英語の思考能力の基礎を身につける。	
	英語Ⅱ	身近で幅広いジャンルの英文を読み、さまざまな社会や文化への理解を深めて視野を広げながら、「英語Ⅰ」で身につけた英語の四技能（英語を聴く能力、話す能力、読む能力、書く能力）のそれぞれをさらに発展させ、それらを統合的に用いて英語で発信する能力を育成する。またこれらを通して、英語圏における「論理展開」を理解し、論理的な構想力を養う。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
学科専門科目	演習	コミュニティデザイン演習Ⅰa	本演習では、初年次教育として実施する、「学びの発見」及び「プロジェクト研究入門Ⅰ」との関連を踏まえ、社会と地域に関する入門的文献や新聞記事など、各自の関心によるテキストを選択し、講読の上、報告を行う。また、本学周辺の地域踏査及び地理歴史的資料の収集などによる外形的な地域分析も実施する。さらには、ゼミクラス合同での地域住民とのパネルディスカッション、住民へのインタビューなどの企画も組み入れ、それと関連した資料収集・考察・発表をグループワークを中心とした演習のなかでおこなう。	
		コミュニティデザイン演習Ⅰb	本演習では、初年次教育の後期応用演習として、実践研究（プロジェクト研究）科目との連動を踏まえつつ、直面している地域社会の構造的な理解のため、行政統計資料の収集と分析、加えて実際のフィールドでの住民ヒアリング結果との突合を進め分析を深める。また、社会・生活問題理解、関連する制度や政策の理解を深めるための基本的資料や文献の整理、まとめを行い発表する。さらには、各概念の理解と展開を考えた整理と、応用的考察を深めるための班毎の報告や個別報告などを行う。	
		コミュニティデザイン演習Ⅱa	実践研究（プロジェクト研究）科目との連動を踏まえつつ、実践研究で学んできた内容をまとめ報告することで引き続き取り組む課題、解決困難な課題の内容と構造について整理を行う。また、個人の問題関心を深めつつ、具体的な課題解決にむけた方法や技術についての知識や理解、研究の課題を深める。これらを通じて、課題の把握、必要な知識の吸収、他者への報告などの確かな表現力の獲得を目指す。	
		コミュニティデザイン演習Ⅱb	実践研究（プロジェクト研究）科目との連動を踏まえつつ、実践研究で学んできた内容をまとめ報告することで引き続き取り組む課題、解決困難な課題の内容と構造について整理を行う。また、個人の問題関心を深めつつ、具体的な課題解決にむけた方法や技術についての知識や理解、研究の課題を深める。これらを通じて、課題の把握、必要な知識の吸収、他者への報告などの確かな表現力の獲得を目指す。	
		コミュニティデザイン演習Ⅲa	実践研究（プロジェクト研究）科目との連動を踏まえつつ、これまで実践研究で学んできた内容を整理するとともに、課題の発見、共有、解決に向けた活動、集約、実施、振り返りなどといった一連のプロセス全体をクラスのメンバー全員で振り返りつつ、フィールドワークの協力者への報告、ディスカッションの場面などを設定し、コミュニティをデザインする意味と内容について明確化を行う。	
		コミュニティデザイン演習Ⅲb	実践研究（プロジェクト研究）科目との連動を踏まえつつ、これまで実践研究で学んできた内容を整理するとともに、課題の発見、共有、解決に向けた活動、集約、実施、振り返りなどといった一連のプロセス全体をクラスのメンバー全員で振り返りつつ、フィールドワークの協力者への報告、ディスカッションの場面などを設定し、コミュニティをデザインする意味と内容について明確化を行う。	
		コミュニティデザイン演習Ⅳa	各自、これまでの実践と研究内容を整理し、到達点の確認及び実践上の課題を明らかにしつつ、卒業研究に向けた各自の成果について報告を行う。具体的には、各自のテーマを決定し、先行研究を概観するなかで、研究の目的や意義を明確にする。また研究報告後の質疑応答を通して、受講生は問題意識を共有し、適切で有益なコメントを交換する。	
		コミュニティデザイン演習Ⅳb	各自、これまでの実践と研究内容を整理し、到達点の確認及び実践上の課題を明らかにしつつ、卒業研究に向けた各自の成果について報告を行う。具体的には、各自のテーマを決定し、先行研究を概観するなかで、研究の目的や意義を明確にする。また研究報告後の質疑応答を通して、受講生は問題意識を共有し、適切で有益なコメントを交換する中で研究内容についての完成度を高める。	
概論	A	仏教では人間存在の本質を、「関係性」においてのみ生きている「縁起的存在」とみる。他者と争い傷つけてやまない今日の混乱した状況は、このような視点の欠落にもとづく自己中心的生命理解に起因するものと考えられる。人間存在の本質を追求することは、やがて他者の痛みを理解し、相互敬愛の共同社会を志向する態度を生み出すことへと繋がる。この授業では「縁起的存在」とは何かを考察する中から、「他者とのつながりを生きる」共同社会創造の課題について、主体的に考察することが求められる。		

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
学科専門科目 概論	A	社会学概論	社会学も他の人文社会系の学問と同じく人間を深く理解しようとする学問である。ではどこに社会学独特の視点と存在意義はあるのか。本講義では、社会学の基本的な視点や思考法、対象の捉え方、概念等に関する情報を提示する。デュルケーム、ヴェーバー、ジンメルなど社会学確立期および現代を代表する社会学者の著作にふれながら、近現代で生じてきたさまざまな社会現象や社会問題に関して、社会学ではどのような視点から研究をおこない、どのような知見を得てきたのかについて具体的な事例を通して、理解を共有する。	
		コミュニティデザイン概論	本講義では、地域の形成過程、そこから生じる課題に対し、一つの解決策として思考される、地域活性化や地域再生など、地域の発展のための政策や諸活動、それに関連する機関や団体など、地域の創生や創造にむけた動きの具体的内容を取り上げ、地域の「発展」や「持続」、「成長」などの意味やメカニズムを学習する。特に大学近郊で取り組まれている実践者をゲストに招き、その内容を解題することを通じて、身近な内容として学習する。	
	B	公共政策概論1	本講義は、公共政策に関するこれまでの議論や理論の検討と関連するトピックとの関連づけを通じて、公共政策の全体像の理解を目指すことを目的とする。なお、本授業は、公共政策に係る基本的かつ抽象的概念の理解を中心とした講義となる。具体的な展開や事例などの解説を踏まえ、さらに公共政策に関する理解を進める上では、後期に開講する「公共政策概論2」と合わせて履修することによって、政策の実際を理論的に整理することが可能になる。	
		公共政策概論2	本講義は、公共政策が対象とする具体的政策や、政策アクターの思考や行動、またアクター間の協働の実際、また、それを立案したり実施したりするにあたっての規範についての理解を目指すことを目的とする。本授業は、公共政策に係る個別政策や具体事例の講義が中心となるので、前期に開講する「公共政策概論1」と合わせて履修することによって、政策の実際を理論的に整理することが可能になる。	
		社会情報学概論1	現代社会における情報の意味とその現状及び課題を理解し、その現実的な解決策の検討に必須となる知識の獲得を目的とする。まず背景となる知識として情報伝達手法の意義と歴史の変遷について、コンピュータの登場までを概括する。その上で、コンピュータの登場が社会に与えた影響と、クラウド・コンピューティングやスマートフォン等のICT技術の発展が与えた社会の変化について、身近な事例を通して課題を発見させ、社会への主体的な参画の姿勢をICTの知識面から涵養する。	
		社会情報学概論2	高度情報化社会として特徴づけられる現代社会の諸問題に対処するために必要な基礎的知識を修得することを目的とする。個別目標としては、符号化の考え方・計算機の仕組み・問題の定式化といったコンピュータサイエンス領域の基盤的な素養を得ることで、情報システムに対する一般利用者としての健全な見方と的確な利用の仕方、情報システムが及ぼす社会的な効果や諸問題に対する考え方を身につけることを目指す。	
		現代社会と福祉1	社会の変化に伴い社会福祉に求められる役割も変化してきた。社会福祉の専門家として、現代社会に必要な社会福祉の役割や機能について学ぶ必要がある。本講義は、社会福祉の最も根本的な講義となるため、社会福祉の理念・哲学、政策、それらの発展過程、関連領域、制度やサービスの体系、対人援助サービスの意義、専門職の役割について包括的な理解を要する。幅広い知識を身につけ、社会福祉の歴史や原理を理解した専門家になることを目指す。	
		現代社会と福祉2	社会の変化に伴い社会福祉に求められる役割も変化してきた。社会福祉の専門家として、現代社会に必要な社会福祉の役割や機能について学ぶ必要がある。本講義は、社会福祉の最も根本的な講義となるため、社会福祉の理念・哲学、政策、それらの発展過程、関連領域、制度やサービスの体系、対人援助サービスの意義、専門職の役割について包括的な理解を要する。幅広い知識を身につけ、社会福祉をめぐる諸理論について理解した専門家になることを目指す。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学科専門科目 講義	ボランティア論	本講義では、現代社会における市民のボランティア（自発的）な活動について、それに取り組むことの意味と現状、課題を理解することを目的とする。災害支援や障害者の社会参加促進、まちづくり活動などの場面におけるボランティアな活動の歴史や社会的背景、行動原理、関連政策との関わりを包括的にとらえる。そのことを通して、社会関係を育むこれらの活動を経済・社会状況の中で捉え直し、人々の意識や政策動向も踏まえた上での活動のあり方、市民としての関わり方を考えることを目標とする。	
	現代社会論	人間は大昔から「社会」を作って生きてきた。大昔の狩猟採集民も現代人も「社会」を生活している点では変わらない。しかし、両者が生きる「社会」のありようは大きく異なる。国家や文字やマスメディアの有無など相違点を多く挙げうる。本講義では、「近代」以降、とくに「現代」の社会の特徴について、そこに生きる私たち現代人の諸相を確かめながら、理解を深める。とくに人間がともに「人間らしく生きる」という課題との関連で、現代社会の可能性や困難について考えるための視点を提示する。	
	生活問題論	生活問題を「貧困」という視点から考えていく。貧困問題の具体的な事例をみながら考えていくだけでなく、「貧困」がさまざまな研究のなかでどのように理解されてきたのかについても分かりやすく解説する。また、近年ますます重要な社会問題となっている「子どもの貧困」についても、いくつかの視点からとも考えていきたい。これらを通して、現代社会の仕組みから生みだされる貧困問題をとらえる基礎理論を習得し「貧困理論の変遷と社会の発展」「貧困、不平等、不利の3概念の区別」「理論と実践の関係性」の理解を深める。	
	社会政策論	社会政策と私たちの仕事や生活との関係について、社会政策の歴史的展開と現状から、21世紀における社会政策のあり方を考える。歴史的展開では、資本主義社会の特徴や労働問題を学び、社会政策が生み出された背景についての理解を深める。またイギリスやアメリカなど海外の社会政策を学び、日本との比較を行う。これらの学習を通して社会政策の基礎理論についての理解を深め、現代日本における労働問題の特質と社会政策の現状を具体的に学ぶ。	
	メディアと市民社会	19世紀以来、市民社会の発展において新聞・ラジオ・テレビといったマスメディアは大きな役割を担ってきた。一方、20世紀末から始まったデジタル情報化は、SNSなどのパーソナルメディアの登場によって市民自らが情報の発信者となるなど、市民社会自体のあり方を根本的に変えつつある。本講義では、市民社会におけるメディアの役割について通時的な理解を得た上で、マスメディアとパーソナルメディアの中間に位置する「地域FM放送局」が市民社会においていかに貢献するかを考察したい。	
	市民活動論	本講義は、民間の担い手によって取り込まれる営利を目的としない活動の特性を知り、新しい公共の担い手としての市民活動の実践や意義、課題を理解することを目的とする。行政施策とは異なる次元で取り組まれている公共的な意義・内容をもつ市民主体の諸活動の歴史や現代的な意義を世界情勢等も踏まえた上で学ぶ。そのことを通して、現代社会において市民として能動的に社会問題の解決に関わる意欲や能力を高めることを目標とする。	
	現代社会とコミュニケーション	言葉によるコミュニケーションは、人と人をつなぐもっとも基本的かつポピュラーな手段であるが、他にも非言語的なコミュニケーション、マス・コミュニケーションなど、さまざまな種類がある。コミュニケーション能力を備えた個人への社会的期待が高まっている現代社会において、こうしたことに関する知識や理解はさらに重要性を増してきている。本講義では、コミュニケーションについての社会学や社会心理学の研究を紹介する。また、現代の日本社会における具体的事例によって、諸理論の理解を深める。	
	社会調査論	卒業研究のデータ収集のための社会調査を自ら企画する学生のために、第1学年時に学んできた社会統計やフィールドワークの技法や倫理、およびその応用について総括的に確認する。一方で個人情報保護が重視され、他方でビッグデータの収集・利用が進む現代社会において、学問的な社会調査にはどのような効用が期待でき、どのような落とし穴があるのか。社会調査を長年経験してきた立場から、具体的な社会調査事例を検討しながら、その魅力と注意点について講義する。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学科専門科目 講義	宗教と社会	<p>社会学ないし人類学においては、アニミズム的な精霊信仰からキリスト教などの世界宗教、さらに新興宗教まで、多様な「宗教」ないし「宗教」をめぐる人びとの活動・関係・組織についてどのように考察してきたのか、主要な学説と基本概念を紹介する。また、現代日本ないし世界の宗教状況について概観し、基礎的理解を共有したうえで、近現代の社会変動と宗教の衰退・興隆・変質、宗教間対立などの現象との関係について、具体的事例を交えて、多面的に考察する。</p>	
	情報と倫理	<p>情報社会のもたらす課題を、倫理と法律を混同することなく、両面から理解し解決の検討ができる知識の獲得を目的とする。情報機器の発達には個人の可能性を大幅に拡大したが、その能力の発揮が社会に与える倫理的・法的な問題を考える能力の向上は、技術の発展の速度と比してバランスが取れていない。そこで、実際に発生した事件をもとに、問題の所在を指摘しうる知識と、技術的・倫理的・法的の三方向から回避や解決が検討できる広い視野の獲得を目指す。</p>	
	情報社会論	<p>本講義は、情報社会の様相を特に印刷の電子化と電子書籍・ネットワークの発達という観点から考察し、情報社会の様相を断片的な知識ではなく、全体像としてとらえることで、情報の氾濫の中で主体的に行動できるようになることを目的とする。情報社会の様相を、書物の成立からインターネットの成立までの歴史を概観した後、現在の情報社会の様相を解説する。特にインターネット、携帯電話、電子書籍といった新時代の情報伝達手段の歴史的意味と社会的影響を考察する。</p>	
	地域と経済	<p>本講義では、地域・地方の成立や発展、成長、産業立地・誘致、地域間交易、地域間格差、人口移動、土地利用、住宅政策、交通の課題、環境問題、地域政策、国土政策などのテーマを取り上げ、地域の経済構造を学ぶとともに、経済構造を分析するためのツールの学習を行う。同時に、必要に応じて、日本の地域構造、地方分権、地域産業や産業クラスター、社会資本整備についての知識も学習する。</p>	
	非営利組織マネジメント論	<p>民間非営利団体は、我が国において、行政でも営利企業でもない第三の主体として、様々な社会問題の解決や市民の多様化したニーズに効果的かつ機動的に応えるとともに、個人個人の自己実現の意欲を生かすことの出来る仕組みとして、今後ますます重要な役割を果たすことが期待されている。本講義では、この非営利組織が地域および地球的規模の課題解決の担い手として、成長、発展するためのマネジメント（経営）について、講義、ケーススタディを通じて、理解を深める。</p>	
	コミュニティ形成論	<p>本講義では産業構造の変化や都市化・過疎化などの地域の変化要因を歴史的に把握するとともに、そこに住み暮らす住民の生活様式や階層構成の変化、さらには地域における人間の信頼関係や絆、規範、習慣やネットワークなど、いわゆるソーシャルキャピタル（社会資本）概念の理解と、それを援用した、地域生活の構成基盤とその関係性や、地域を形成し、あるいは変動させているパワーバランスやパワーダイナミクスを理解することでコミュニティの形成について講義を進める。</p>	
	ソーシャルビジネス論	<p>社会問題の解決を目的に収益的事業を実施するソーシャルビジネスについて、基本的な概念、歴史的経緯、近年の具体的な動向などを個別の先進事例から読み解く。特に大規模災害からの復興におけるソーシャルビジネスの実践事例からは、地域の活性化と地元住民の主体的参加、様々なインターメディアリー組織や団体による支援を外しては読み解くことは不可能である。一方で、「活性化」、「参加参加」、「支援」は新たな矛盾と課題を生み出す源泉ともなる。ここでは、これらソーシャルビジネスをめぐる新たな課題についても深く読み込んでいく。</p>	
	地域と環境	<p>私たちがとりまく自然環境を、主に地球のシステムや地史的背景から学習し、生物が生きる環境としての地球の生成と現状を理解することを目的とする。現在の地球に棲む生物は、40億年近い年月の中で進化と絶滅を繰り返しながら生まれた。本講義ではまず化石とは何か、そして化石を用いて何が分かるかについて学ぶ。次に現在生きている地球上の生物について概観し、どのように分類されるか学ぶ。そして地質時代に現れた様々な古生物を時代順に紹介し、われわれ人類へと至る生物の歴史や盛衰を学ぶ。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学科専門科目 講義	犯罪と社会	<p>犯罪・非行などに関する犯罪社会学の理論を学び、実際の事例に即したテーマ別討論を重ねるなかで、現代の社会問題を理論的に分析できる視座の形成を目指す。最初の4回をのぞき、授業は資料解説と全体でのディスカッションを中心に進める。なお、討論のための資料は事前に配布するので、いつコメントを求められても対応できるよう、毎回自分で関連文献を調べ、予備知識を頭に入れた状態で授業に臨むことが要求される。</p>	
	地方自治論	<p>本講義は、地方自治の基本的理解及び本学が所在する京都における自治体の実際の運営と役割について理解を深めることを目的として講義する。基本的には憲法及び地方自治法にある地方自治体の基本的役割と歴史の変遷、近年の変化と課題を学ぶ内容とする。また今日の自治体が直面する実際の諸課題については、実施に実務を担う自治体職員、特にプロジェクト研究との関連が深い、京都市並びに北区の自治体職員をゲストスピーカーに招いてケース・スタディを行う。</p>	
	地域社会論	<p>地域社会は、従来「農村と都市」や「コミュニティとアソシエーション」といった枠組みから論じられることが多かった。一方、近年では地方分権やまちづくりが制度的に推し進められ、時代の変化とともに新住民の受け入れや防犯といった新たな課題にも直面している。本講義では、生業・生活に根差した生活空間としての地域社会に関する社会学的な理論を踏まえ、同年代的な課題にどのように取り組まれているのか、具体的に検討する。</p>	
	現代家族論	<p>本講義では、現在の家族に生じている問題点をさまざまな角度から検討し、理解する。また子育て、高齢化、介護、家族制度について理解し、これからの家族の可能性について考察する。そして、現代社会において特定の家族が排除されていること、差別、格差、不利益などを被る家族やそのメンバーがいること、また暴力に曝されている人びとが存在することを知るとともに、個人を生きづらくしている家族のあり方を捉え、現代家族の新たな方途を考察する。</p>	
	グローバリゼーション論	<p>現代の世界の大きな特徴のひとつは、遠く離れた場所同士で、ヒト・モノ・カネ・情報の移動がこれまでにない活発化することである。海外で暮らす人々の数は増加し、グローバルな市場で評価されるサブカルチャーが「逆輸入」され、文化的背景の異なる人々と協力するプロジェクトに携わる機会も多くなる。この授業では、具体的なケース・スタディを通してグローバリゼーションが台頭してきた歴史的経緯を学び、ビジネス、文化、政治等分野をまたぐ現象のなかでどのような問題と可能性が見出せるのか理解することを目標とする。</p>	
	社会問題論	<p>社会「問題」とされるものは、ひきこもり、少年犯罪、自殺、禁煙ルール、差別など様々な形をとって現れる。しかし、それらが社会問題として扱われるようになる経緯はどうなっているのだろうか。いつから、どのような論争を経て、社会問題として定着してきたのだろうか。ある出来事が社会問題として自明視されるまでの過程には、各「問題」に特有の社会的メカニズムが作用している。本講義では、社会問題を解きほぐす社会学理論の基礎を学び、社会問題の仕組みと背景を能動的に考えることができるようになることを目標とする。</p>	
	情報技術論	<p>情報社会の諸問題に対処するのに必要となる実際的な知識を修得することで、情報や情報システムをより有用な道具として使いこなす能力を身につけることを目的とする。具体的には、情報の量や質について考えられるような情報の基本概念を学び、また、情報通信ネットワークやヒューマン・コンピュータ・インターフェイスを含む広義のコミュニケーションについて考える。それをふまえ、社会の諸問題に対処する情報システム構築の基礎的能力の修得を目指す。</p>	
	コミュニティプランニング論	<p>地域の政策形成においては、地域課題を的確に把握し、政策課題として捉え直し、具体的な地域政策の計画化が求められる。このことは、財政構造との連動を含め、政策を効果的に実行していくための重要な手段となる。本講義では行政計画の体系、その法的関連性、計画策定の基本的プロセス、特に、多様な属性・利害関係を持つ住民間の合意形成と計画化、およびその実現について、それぞれの個別分野である都市・農村計画、福祉、情報、防災などを踏まえ地域形成と計画との関連について理解を深めていく。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学科専門科目 講義	情報マーケティング論	<p>現代社会のビジネスにおいては、マーケティングが必須のものである。中でもICTによるビッグデータの処理は主要なツールである。そこで、情報を使ったマーケティングについて講義する。具体的には、マーケティングの基礎的な考え方、ビッグデータとは何かといった基礎知識、現状の活用事例を示し、将来的な展望を考察する。それにより、情報を使ったマーケティングの専門知識を修得する。</p>	
	社会福祉発達史	<p>今日の社会福祉を理解する有効的な手段の一つとして歴史を勉強することがあげられる。歴史を勉強することによって「どのような社会」「どのような問題」があり、「どのような制度や援助」が行われてきたかを理解できる。そこから社会福祉の理念、制度、対人援助サービス、そしてソーシャルワークの歴史的発展過程を掴むことができる。意識してもらいたいことは、社会福祉が「社会」と「時代」と密接な関係のもとに発達してきたものであり、系統的に学ぶことで将来の展望をみつめることもできるということである。</p>	
	災害と防災	<p>日本列島のような変動帯では、しばしば自然災害に見舞われる。それは地震、津波、斜面崩壊、土石流、水害など多岐にわたる。地域の人々がこれらの災害にどのように対処してきたか解説するとともに、逆に自然災害がもたらす地域の豊かさや魅力についても言及する。さらには、地震発生メカニズム、地震や火山のプレートテクトニクスとの関わり、地震と火山の基礎知識を習得する。そして災害に対する備えや意識を持ち、地球科学と社会活動とのあり方を考える。</p>	
	ターミナルケア論	<p>人生の最期の時間をどのように過ごすのか。これは患者や家族にとって重要な問題である。患者・家族の願いを支えるために、こうした「死に向かう人」である患者、そして家族の心理的、身体的特徴を学び、ターミナルケアに必要な援助について理解を深める。また、ターミナルケアの歴史や理念、「自己決定」や「延命処置」「安楽死」などの倫理的問題について議論するとともに、ターミナル期における患者・家族の心理プロセスの理解や家族へのグリーフケアなど具体的な支援方法についての基本的知識を身につける。</p>	
	高齢者福祉	<p>高齢者への理解を深め、少子高齢社会における高齢者への支援方法について、介護保険制度を中心にその制度内容と支援の方法論について学習する。具体的には、高齢者の生活実態とそれを取り巻く社会情勢、福祉・介護需要（高齢者虐待や地域移行、就労の実態含む）など、現代社会における高齢者福祉の具体的問題を理解し、高齢者福祉制度の発展過程について学ぶ。また、介護の概念や対象及びその理念等についての基本的知識を身につけ、相談援助活動において必要となる介護保険制度や高齢者の福祉・介護に係る他の法制度について理解する。</p>	
	障害者福祉	<p>障害者のくらしの実態とくらしを支える仕組みについて、法制度や視聴覚教材等の資料を用いて講義する。現在の障害者福祉の中心的制度は障害者総合支援法であるが、非常に複雑な内容となっているため、きちんとした制度理解が要求される。また、身体障害、知的障害、精神障害にとどまらず発達障害や難病患者も制度の対象に加わっている。制度理解とそれぞれの障害の特性を理解し、障害者の生活を多方面から支えられる支援者の養成を目指す。</p>	
	児童福祉	<p>児童虐待や児童の貧困問題が世間をにぎわしている。現在の児童福祉は戦後すぐにスタートした児童福祉法が中心となっているが、内容が多岐にわたり複雑な内容となっている。また、少子高齢化や保育所待機児童の問題は対応を急ぐ喫緊の課題である。このような時代背景にあっては、児童福祉の制度を理解するとともに、現在発生している問題理解能力や対応力が求められる。問題が山積する児童福祉の分野において、全体像を理解したうえで、各制度を有効に利用し、必要な支援を行える支援者の養成を目指す。</p>	
	社会保障論1	<p>国民生活を支える社会保障制度は保険的手法を用いた社会保険や租税制度である社会福祉、公的扶助などに分類される。社会福祉の専門職は、それぞれの制度がどのような問題に対応し、どの程度生活の安定に寄与しているのかを知る必要がある。そのため、前期の講義においては、社会保障の理念・対象・制度内容及びその歴史的な展開を学ぶとともに、社会保障の制度体系や財源・費用など基本的な仕組みを理解することを中心に講義を行う。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学科専門科目 講義	社会保障論2	前期で学んだ社会保障の基本的構造、内容やその考え方、歴史的な展開を踏まえ、後期の講義では、社会保障制度と我々国民生活がいかに密接に不可分に関係し合っているのか、また、国民生活を支える制度として、具体的な課題や問題点を確認する。今日の社会保障制度はその制度成立時に企図された生活保障の側面にどれだけ対応しているのかを点検しつつ、社会福祉の専門職が、家族生活や支援に応用できるよう、具体的な相談能力を身につけることを目的とする。	
	地域福祉論1	社会福祉における今日的な課題として重要な位置を占める地域福祉について、その対象となる地域生活問題の変遷と、それに対応する制度や政策、理論の変遷などを通じ、地域福祉の意義・役割について理解することを目標とする。具体的には統計調査の結果などから地域の変化を捉える指標を考察し、そこで展開する住民の生活とその課題の地域性についての考察を加えることから、地域の生活問題の構造的な把握を試みる。同時に、生活問題に対応する政策の体系的な理解も検討し、内容を深めていく。	
	地域福祉論2	社会福祉における援助活動の展開過程を重視し、人権尊重、権利擁護、自立支援等の観点を踏まえた社会福祉サービスと援助活動の関係、特に地域援助技術（コミュニティワーク）の基礎理論と具体的援助の実践課程について理解を深める。また、地域福祉にとって中心的テーマである住民活動の実際と課題、地域福祉における役割と政策との関係から捉えられる客観的位置と役割について解説し、住民活動への支援機関の今日的動向についても解説を加える。	
	心理学	社会福祉実践を行う専門職にとって、自分とクライアントを理解することは欠かせない能力である。クライアントの心理状況は当然のことながら、援助者として自分自身の考え方の特徴や趣味嗜好を理解する必要がある。また、近年では精神疾患患者や発達障害を持ったクライアントも多数である。これらクライアントの理解や支援を行うために必要な心理学の枠組みを理解し、心理作用やコミュニケーションスキルを養成することで、クライアントの心理的サポートまで行える援助者になることを目指す。	
	社会学	社会学の基礎的知識の習得とともに、人口や家族、ジェンダー、地域社会と都市、マイノリティ、福祉、グローバリゼーションなどといったテーマ群を取り上げ、現代社会の諸問題の特質、人と社会の関係性、生活の特徴等についての理解を深める。さらに、現代社会が抱える幅広い諸問題の共通性や本質を見抜く能力も今後大いに必要となるであろう。社会学の基礎を身につけることによって、社会福祉制度や社会福祉実践を客観的に捉える力を養うことを目的とする。	
	医学一般	今や社会福祉分野の専門家であっても医学知識が欠かせない時代となっている。特に高齢者福祉分野は医療の必要度の高い利用者向き合うことが多く、障害者福祉分野であっても各種の障害の理解が大前提となる。社会福祉分野で働く者として不可欠な、心身機能と身体構造および、さまざまな疾病や障害の概要について理解する。単に疾病だけを観察するのではなく、人の成長・発達や日常生活との関係を踏まえた視点から患者を捉え支援できる能力の養成を目指す。	
	社会福祉調査論	社会福祉の制度設計、地域福祉計画策定、福祉事業所経営など様々な場面で不可欠となるのが「調査」である。たとえば、高齢者の実数や割合については行政が提供しているデータを用いれば把握できるが、それら高齢者がどのような生活問題を抱え、どのようなニーズを持っているのかを理解するには調査を行う必要がある。社会福祉にかかわる調査の種類や方法を学ぶことで地域をより深く理解し、そこで起こっている問題を発見できる能力の養成を目指す。	
	介護概論	介護は国民的課題である。そこで社会福祉に求められている介護について学び、介護の本質を追求する。介護の目標・機能・領域、介護技法、介護に関わる保健・医療・福祉の連携のための技法を習得する。介護活動の場に応じた援助について、また病気や遭遇しやすい事故についての知識、対処できる予防法について学ぶ。また、関係職種、関係機関の役割と連携のあり方について学ぶ。	

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学科専門科目 講義	公的扶助論	一言に低所得者と言ってもその属性や要因は多岐にわたる。例えば、公的年金や家族扶養に欠ける高齢者、働くことが困難な障害者、病気によって職を無くした失業者、母子家庭、若者のワーキングプアなどである。これら低所得者への所得保障として、生活保護制度、社会手当制度、生活福祉資金貸付制度がある。また、所得保障の他に就労支援も行われている。本講義では、所得保障制度や就労支援を理解し、適切な援助が行える専門職を目指すとともに、貧困問題の根本的課題を考えることができる能力を養成する。	
	就労支援	失業者、障害者、母子家庭の母など就労支援を必要とする人々は多岐にわたる。これらの人々の就労を支援するには二つの視点が欠かせない。一つは、支援を必要とする人々の生活状況や心身状況の理解であり、もう一方は昨今の労働市場の理解である。これらは両輪であり労働市場と本人の状況次第で必要な訓練や支援が変わってくる。また、ハローワークや就労支援事業所など就労支援を行う機関も多く存在するため、地域の社会資源を把握することも欠かせない。本講義では、就労支援に必要な総合的な能力を養成することを旨とする。	
	司法福祉論	山本謙司著『獄窓記』を契機として、社会での生きにくさを抱えた人々が犯罪を繰り返し、刑務所と社会を行ったり来たりしている実情が広く知られるようになった。そのような人々の多くは、社会に「居場所」や「出番」がない状態となっている。そこで、社会に彼らの居場所を確保するための援助が必要となる。本講義では、犯罪を行った人々が社会復帰する際の援助として展開される、「司法福祉」および「更生保護」のしくみを理解することを目的とする。	
	福祉行財政と福祉計画	2000年の社会福祉基礎構造改革によって社会福祉の基礎構造が大きく変化した。措置制度から契約制度への転換がその代表である。このような福祉行政の在り方が変化した要因や目的を理解するとともに、福祉財政の構造についての理解も欠かせない。また、社会福祉法の地域福祉計画や介護保険法の介護保険事業計画策定に代表される様々な援助方策も求められている。これら福祉行政の役割や実際を理解することで、広い視野を持った援助者の養成を目指す。	
	社会福祉施設経営論	2000年の社会福祉基礎構造改革以来、従来の施設・事業所経営では立ち行かなくなった。措置制度から契約制度に転換したことで福祉サービス提供組織の規制緩和が行われ、様々な経営主体が参入できるよう変化した。それに伴った競争原理の導入によってサービス提供組織間の競争も必然となっている。このような状況においては、社会福祉専門職にも経営の知識や理論が求められる。そこで福祉サービスにおける経営の基礎を学ぶことで、対人援助にとどまらず組織マネジメントまでも行える社会福祉専門家の養成を目指す。	
	保健医療サービス論	日本の医療制度は公的医療保険が中心となっているが、生活保護法、児童福祉法、障害者総合支援法で補強している。医療保険制度だけでなく、これら総合的な医療制度を理解し援助に応用できる能力が必須である。また、高齢や障害にかかわる社会福祉士や、医療機関で働くソーシャルワーカーには地域連携も強く求められている。他職種の役割を理解し、地域連携の実践に必要な知識を広く学ぶことも欠かせない。本講義を通じて医療制度を理解し、他職種との連携を行える援助者となることを目指す。	
	権利擁護と成年後見制度	認知症高齢者や重度の障害者など判断能力が十分でない人々が生活しており、これら権利擁護が欠かせない人々への支援の必要度が増している。代表的な制度として日常生活自立支援事業や成年後見制度をあげることができるが、関連法として民法や行政法の理解も必要となる。また、クーリングオフなど消費者保護の制度もあり総合的な理解が必要である。これら権利擁護に関する様々な制度を理解し、活用できる能力を養成する。	
	相談援助の基盤と専門職1	「社会福祉士及び介護福祉士法」の成立及び見直しの内容と背景を踏まえながら、社会福祉士の役割と意義を理解する。また、ソーシャルワークに関わる各種国際定義やソーシャルワークの形成過程についての解説を通して、相談援助の概念及び範囲についての理解を深める。また具体的事例を用いながら「人権尊重」「社会正義」「利用者本位」「ノーマライゼーション」を始めとする相談援助の理念について理解を深め、社会的要請に応えられる社会福祉士としての基盤を身につける。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
講義	相談援助の基盤と専門職2	「相談援助の基盤と専門職1」での学びを踏まえつつ、「権利擁護」の概念や範囲及び社会福祉士が活躍する具体的な機関や役割について、社会的排除や虐待、ホームレス問題などの事例を学びながら基本的な理解を目指す。また、社会福祉士が身につけるべき専門職倫理の概念や日本社会福祉士会など職能団体の倫理綱領を学び、現代社会で直面する倫理的ジレンマの実際について理解を深める。そして、ジェネラリストの視点に基づき、総合的かつ包括的な援助と他職種連携の意義や具体的内容について検討する。	
	相談援助の理論と方法1	相談援助の基本的理論として、人と環境の交互作用について一般システム理論などを取り上げて解説する。また、相談援助の対象とは誰か・何か、概念や範囲について説明する。相談援助の過程とそれに係る知識と技術について「生活モデル」や「ストレスモデル」など様々な実践モデル、「心理社会的アプローチ」「課題中心アプローチ」など各種アプローチについて事例を用いて説明を行い、基本的知識の習得を目指す。相談援助の展開過程について、各段階の意義、目的、方法、留意点について学ぶ。	
	相談援助の理論と方法2	「相談援助の理論と方法1」での学びを基盤としながら、相談援助における援助関係についてその意義と概念を理解する。さらに援助関係の形成方法としての「コミュニケーション」「ラポール」「自己覚知」について事例を用いて学びながら実践を裏付ける理論を身につける。また、介護保険制度や地域を基盤とした支援においては必須となるケースマネジメント・ケアマネジメントや、アウトリーチについて、それらの意義・目的・具体的方法について理解を深める。	
	相談援助の理論と方法3	基本的な相談援助の理論を再確認しながら講義を進める。本講義では、相談援助で用いる社会資源について、種類や分類方法、実際の活用の仕方など基本的な知識の習得を目指す。さらに、サービス調整のあり方や、ニーズに応じた社会資源開発の意義について具体的事例を通して理解を深める。また「ネットワーキング」について、他機関・他職種との連携や当事者と家族・近隣とのネットワーキング、サービス提供者間のネットワーキングを取り上げ、制度の狭間を作らないための様々なネットワーキングのあり方について意義や役割を学ぶ。	
	相談援助の理論と方法4	個人を対象とした支援と同時に、「集団を活用した相談援助」のあり方について理解を深める。「集団」について、グループダイナミクス、自助グループなどの概念を学び、個人と集団の両方の発展を視野に入れた支援を展開できるよう、具体的な実践事例を通して理解を深める。社会福祉士の資質向上のために必須となるスーパービジョンの歴史、内容、具体的方法や留意点の基本的な知識の習得および、相談援助における記録のあり方、個人情報保護の意義と留意点、ITの活用などについて理解する。	
実践研究（プロジェクト研究）	プロジェクト研究入門Ⅰ	具体的なフィールドに出向きつつ、地域課題の理解に向けた基本的知識の習得を目指すPBL（Project Based Learning）形式の演習を実施する。本演習ではPBLに向けた基本的な知識と内容について理解することを目的とする。具体的には情報の収集や発信、基本的なコミュニケーション方法、社会調査の考え方の基礎を学ぶ。また、授業時間外での打ち合わせや面談なども実施し、地域での実践の準備段階の基礎的力を身につける。	
	プロジェクト研究入門Ⅱ	「プロジェクト研究入門Ⅰ」をふまえ、具体的な地域フィールドでの入門的な実践から、さらには具体的な課題の抽出のためのプロジェクトに発展させる。具体的には前期に取り組んだ地域実践を踏まえ、そこから解決すべき課題の抽出を試み、その解決のためのプロジェクトを企画し実施を試みる。ここでは特にフィールドでの記録に基づく課題に対する多角的な把握を集団的に試みる。同時に、現地の方とのコミュニケーション内容についての分析や振り返り、細く作業を通じて、共通課題の洗い出しを行い、グループごとに発表を行う。	
	プロジェクト研究実践Ⅰ	第1学年時に取り組んだ実践を踏まえ、引き続き具体的なフィールドに出向きつつPBL学習を進める。特にここでは地域課題の解決に向けた基本的スキルの確認とさらに発展的なスキルの展開を目指す。具体的には京都府北部での過疎山間地を対象としたプロジェクトを運営しつつ、グループ毎に課題解決のためのスキルの具体化を試みる。また、京都市の街中における商業地や空き家、少子高齢化の地域、福祉の相談援助の現場においても、1年時に学んだスキルの実践とその発展を試みる。	

学科専門科目

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
実践研究（プロジェクト研究） 学科専門科目	プロジェクト研究実践Ⅱ	前期に引き続き各フィールドでの実践、そこでの学習の発展に取り組む。一方で、後期の講義として取り組みの特徴であるoutputの手法と内容を特に意識した取り組みを行う。グループ単位で取り組み、かつ、専門科目との結びつきを意識した「コミュニケーション演習」と関連しつつ、グループごとの成果と評価、および今後の課題を設定する。翌年度に向けた解決実践に向けたプロジェクトの組み立てについて準備とそのためにより必要となるスキル、知識の集積、課題の確認を行い、何らかの成果を作成し、発信する。	
	プロジェクト研究実践Ⅲ	引き続き具体的なフィールドに出向きつつ、PBL形式の演習の運営に関与する。具体的には京都府北部での過疎山間地を対象としたプロジェクト、京都市の街中における商業地や空き家、少子高齢化の地域、福祉の相談援助の現場などでプロジェクトのリーダー的役割として、具体的な進行管理、グループの運営、下学年の学生へのスキルの伝達などを実践する。これらを通じて、プロジェクトリーダーに必要な基本的な知識と技術、グループ運営の手法を学ぶ。	
	プロジェクト研究実践Ⅳ	これまでの具体的なフィールドでの実践をまとめつつ、プロジェクトリーダーとしての役割の振り返り、グループ運営での課題のまとめを行う。同時にプロジェクトそのものの課題と今後の展望を踏まえ、自分自身の研究課題の明確化と、それに連動した研究テーマの絞り込みを行う。それら、振り返りのまとめやテーマの絞り込みから確定した今後の研究テーマは、各フィールドで関わりを持った方々に報告書及び個人研究テーマ、あるいは何らかの研究成果としてoutputし、そこでの評価を参考にさらなる絞り込みを行う。	
	社会福祉援助技術演習1	第3学年時に実施する現場実習での実践力を生かすために、社会福祉士に求められる相談援助の基本的技術の習得を目指す。本講義では特に「自己覚知」「基本的なコミュニケーション技術」「基本的な面接技術」という相談援助の基本について、ペアワークやグループワーク、ロールプレイなどを取り入れて、理解および実践での活用方法を実践的に学ぶ。上記の習得については、「社会的排除」「虐待」「DV」「低所得者」「ホームレス」など具体的な課題別の相談援助事例を活用し、各課題の理解も同時に深める。	
	社会福祉援助技術演習2	「社会的排除」「虐待」「DV」「低所得者」「ホームレス」など具体的な課題の相談援助事例を通して、「インテーク」「アセスメント」「プランニング」「支援の実施」「モニタリング」「効果測定」「終結とアフターケア」の各過程についての内容、意義、留意点の理解を深めつつ、具体的に展開できるよう実技指導を行う。特にこの演習では、「個人」や「家族」を想定した援助過程を具体的に展開できることを目標とする。また演習での実践的学びを通して、相談援助の専門的技術の概念化・理論化を図り体系的に支援する力を養う。	
	社会福祉援助技術演習3	個別指導、ペアワーク、グループワーク、ロールプレイを取り入れ、相談援助に求められる実践力を身につける。この演習では特に「地域」「社会」を念頭に置き、「アウトリーチ」「チームアプローチ」「ネットワーキング」「社会資源の活用・調整・開発」についての技法を実践的に学ぶ。具体的な事例を通して、相談援助のプロセスやそこで使用される方法について理解を深めながら、実践現場の業務に活用できる実践力を身につける。	
	社会福祉援助技術演習4	この演習では地域福祉の基盤整備と開発に係る事例を活用し、「地域住民に対するアウトリーチとニーズ把握」「地域福祉の計画」「ネットワーキング」「社会資源の活用・調整・開発」「サービスの評価」についての実技指導を行う。過疎化・過密化、少子高齢化など地域社会の変化や近年多発する災害時の地域福祉の事例を取り上げ、地域福祉の意義についても理解を深める。自分自身の住む地域や実習施設が存在する地域を取り上げながら、現場実習で活用できる実践力を養う。	
	社会福祉援助技術演習5	現場実習での経験や発見・問題意識を通して、相談援助に係る知識と技術についての考察を行う。特にこの演習では、現場実習での個別的な体験を一般化し、実践的な知識と技術として習得するために、個人発表や集団での討論を行う。これらを通して、改めて記録の意義や個人情報保護の重要性を認識し、利用者の尊厳の保持など相談援助の基本的理念についても考察を行う。これらを通して、社会福祉士としての専門的知識及び技能の理論的・実践的学びを深める。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 専 門 科 目	実践研究（プロジェクト研究）	社会福祉援助技術現場実習指導Ⅰ	第3学年に受講する「社会福祉援助技術現場実習」に向けての基礎学習を行い、実習に向けた準備などを総合的に深めることを目的とする。この授業は、現場体験の豊富な教員を中心に講義やビデオ学習、ゲスト講師を招聘して行うと同時に、社会福祉実践の実際を知るために児童福祉施設や高齢者施設、障害者施設などの見学を予定している。またこの授業において、自分自身の問題意識を明確化するとともに、対人援助職としての適性についても自己覚知を目指す。期末には社会福祉援助技術現場実習領域（高齢・障害・児童・地域など）について各自の希望を確認する。
		社会福祉援助技術現場実習指導Ⅱ	「児童」「高齢」「障害」「地域」の各領域に分かれ、自分が実習する施設の理解（法的、制度的側面及び地域社会との関係など）、実習先施設の利用者理解、基本的なコミュニケーション技術の習得、施設現場実践の理解と実習の心構え、実習記録ノートの記録内容及び記録方法について、個別指導・集団指導を通して学びを深める。また、実習の目標・目的・課題を明確化し、実習計画書の完成を目指す。
		社会福祉援助技術現場実習指導Ⅲ	実習の事後指導に位置づけられるこの演習では、24日間の現場実習を振り返りながら自らの到達点と課題を明確にしつつ社会福祉実践の意義を確認していく。具体的には、個別指導及び集団指導を通して、実習施設と利用者の理解、記録の意義、実習計画の到達度及び残された課題を検討する。さらに、現代社会が直面している社会福祉問題についての認識、理解を深めていく。これらの学びを実習報告書としてまとめる。
		社会福祉援助技術現場実習	社会福祉士受験資格取得にかかる「指定科目」の履修を経て、3年次後期において、高齢者福祉、障害者福祉、児童福祉、地域福祉の各分野に分かれて実習に取り組む。180時間以上の相談支援に関する現場実習である。実習の進行は、利用者の状況理解や施設現場の実情理解に関する「職場実習」がおおむね1週間、現場の専門職の業務内容に関する観察を中心とした「職種実習」が1週間、実際に利用者の支援計画の作成や支援の実施、モニタリングなどに関する「ソーシャルワーク実習」に2週間をあてる。実習期間中には指導教員による帰校日指導・巡回指導を計4回実施し、実習内容の検討、目標を確認しながら進めていく。
		社会福祉学特殊演習Ⅰ	3年間に学んだ内容を総括し、社会福祉士として必要な制度や政策、実践の方法、その理論、あるいは理論の歴史的系譜など、社会福祉援助についてのトータルな知識と実践力を再確認しつつ、実習などを通じて得た具体的な事例との突きあわせを行う中で、社会福祉における相談援助理論の研究と内容の確認を行う。また、相談援助の専門職である社会福祉士の国家試験受験に向けた対策のためこれまでの出題問題にあたりつつ、回答を導き出す知識とスキルを身につけていく。
		社会福祉学特殊演習Ⅱ	3年間に学んだ内容を総括しつつ、先進的な実践活動の現場に出向き、これまで学んだ内容からさらに発展的な実践を進めていくための知識や経験を積み重ねる。具体的には、先進的と言われる実践の現場に出向いたり、ゲストを招いて具体的な内容についてのヒアリングを重ねる中から、今後の社会福祉実践のロールモデルを考察し、自らの問題意識に引き寄せた研究課題や実践課題を明らかにしていく。
現 代 総 合 科 目	キャリア形成系科目	卒業研究	学部での学士課程における学習・研究の総括としての卒業研究を作成する。社会科学の視点からのコミュニティにおける諸問題、そこでの生活に関する諸課題、その解決のための方法や内容についての領域で各自テーマを設定し、執筆を行う。調査研究や実践の成果等に関する部分は共同での執筆も可能であるが、分析や独自の展開部分は個人ごとの執筆となる。
		日本国憲法	憲法が、国家と国民の間の約束事の性格をもつことを、日本国憲法の成立、基本的人権、法の下での平等、思想・信条の自由、信教の自由、表現の自由、社会権、統治機構、国会、内閣、裁判所、地方自治など基本的な事項について理解する。また、憲法が持つ意義—国家の国民に対する約束ルールを理解し、次に憲法が誕生した時代背景をビデオ資料をもちいて考察を深めていく。

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
現代総合科目 キャリア形成系科目	発想から表現へ	本講義は、パソコンを使った文章の作成と研究の発表に関する入門講義である。(1)文章の構想メモの作成、(2)図表を入れた文章の作成、(3)発表用の資料の作成、(4)実際に資料を使ったプレゼンテーションの実施の4つの課題について、Microsoft WordやExcel、PowerPointなどのソフトに慣れ、様々な表現方法を実践し、自分の発想を多面的に表現できるようになることを目指す。個々が作成した課題は、中間発表会と最終発表会の2回の発表の機会を設ける。これらの課題作成と発表会を通して、レポート作成とプレゼンテーションの基礎的な技術を身につける。	
	思考法入門	演繹的且つ論理的に分析し、疑似科学や誤った論理、詭弁に惑わされないための思考力の修得を目指す。また現代社会が抱える様々な課題に対して自らの意見を持ち、判断することができるスキルの涵養を最終的な到達目標とする。近年、ある意見や議論に対して「賛成・反対」、「善い・悪い」という二元論で結論を導く風潮が強まっているが、それはともすれば思考停止を引き起こしかねない。そこで、思考停止に陥ったり、詭弁(虚偽の論法、おかしい論理)に惑わされないためのスキルを身につけることを目標に授業を進めていく。	
	日本語表現(入門)	大学での授業内課題やレポートの作成に必要な日本語表現能力を身に付けることを目的とする。本授業では、第1週に「新しい作文・小論文の作成」、第2週に「作文・小論文の講評の後、書き直し」を行い、基本的に2週間を1セットのユニットとして進めていく。またそれらの前に講義と演習の時間を設ける。この授業で扱う作文の基本作法は大きく分けて三つあり、(1)原稿用紙の使い方、(2)自分と他者の意見の区別、(3)3部構成による小論文の書き方である。これらの習得を通じて、最終的には自分の主張を根拠立てて述べ、主張への批判に反論できる論理的思考・表現に到達することを目標とする。	
	日本語表現(実践)	基本的な文章構成や根拠のあげ方を学び、自分の「経験」や「思考」を人に分かりやすく伝える力を身につけ、レポート作成などの様々な場面で必要となる文章を書く力を身につける。具体的には、おおよそ4～5週間に1課題のペースで3つの文章を作成する。(1)自らの経験という身近な話題を取り上げ、ていねいに書く。(2)普段は見えにくい自らの価値観や世間一般の意識を取り上げ、根拠をあげながら論述する。(3)上記2つの手法を使いながら、短めの「書評」を完成させる。	
	探究基礎演習	本講義は、課題探究型の学修<Project Based Learning (PBL)>をとおして、これからの社会で生きていくために必要とされる基礎的な汎用能力の育成を図り、キャリアデザイン能力を向上させることを目的とする。具体的には、グループワーク(実習)により次の4つの課題に取り組む。 ①フィールドワークの舞台となる京都市学校歴史博物館の存在価値を周知すること ②来館者数の増加を図るための取り組みを研究・企画すること ③京都市に対して①・②に関する取り組みの成果を提案すること ④上記①～③について、受講者の取り組みに対する評価方法を考案すること	
	ポルトガル語圏のくらしと言葉1	世界で約2億人を数えるポルトガル語圏諸国の人口のうち、その90%(1.8億人)を抱えるブラジルが、ポルトガル語を公用語とするに至った歴史的な経緯について概観するとともに、とりわけ、民族形成の背景となった宗教(キリスト教、他)や文学(寓話、民話)に注目して考察をおこなうことで、ブラジルの大衆文化についての理解を深めることを目指す。また、初歩的な文法の学修を通して、日常生活や旅行といった場面で使える実践的なブラジルポルトガル語の修得を目標とする。	
	ポルトガル語圏のくらしと言葉2	1990年に入管法が改正されたことで急増した在日ブラジル人の集住地域では、教育現場における子どもたちとの円滑なコミュニケーションが喫緊の課題として求められている。その際、単に語学としてブラジルポルトガル語を学ぶだけでなく、彼らの生活文化や習慣といった「くらし」を知ることが不可欠である。この授業では「ブラジリダーデ」と呼ばれる喜怒哀楽をはじめ、ブラジル文化の風土的特性や価値観を学修するとともに、基礎的な文法知識を踏まえた日常会話能力の向上を目指す。	
	インターンシップ1大学コンソ京都	本授業は、大学コンソーシアム京都による単位互換包括協定に基づく共同開講プログラムとして実施される。在学中に自らの専門分野や将来のキャリアに関連した就業体験をおこない、各自の研究活動やキャリアプランニングに役立てるとともに、企業や非営利組織において就業体験をすることにより、高い職業意識を育成する。また実社会での体験を現在の研究活動へ応用するとともに、自らのキャリアプランニングを明確にしていく。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
現代総合科目 キャリア形成系科目	インターンシップ2大谷大学	本授業は、就業体験を通じた将来像の明確化とコミュニケーション能力の涵養を目的とする。特に在学中に就業体験をおこなうことで、自分の将来像を明確にすることができるようになること、グループによる討論ならびに就業先での実務を通して、自身の意見を他者に伝え、また他者の意見を自身に取り入れ、コミュニケーション能力を高められるようになることが求められる。就業体験は、「働くこと」をテーマにした事前学習の受講とその成果をふまえて実施される。	
	キャリアデザイン概論1	「キャリア」とは就職に関するだけでなく「人生そのもの」を意味する言葉である。大学生活を主体的に有意義に過ごすために必要な知識・態度などを身に付け、目標を持って大学生活をデザインし過ごすことができるよう、考える機会を提供する。大学という場は「卒業後、どのような人生を送るのか」を考える上でとても大事な場であり、時間である。座学だけでなくエクササイズやグループワークを取り入れながら授業を進める。	
	キャリアデザイン概論2	「キャリアデザイン概論1」での学びを踏まえ、働くうえで必要とされる能力（特にコミュニケーション力）や社会現実についての理解、働くことと密接に関係している法・制度・システムに関する知識など、大学在学中から身に付けておくことが望ましい基礎的な知識や能力の定着を目指す。講義形式で知識や情報を提供するほか、個人ワークやグループワークなどを取り入れながら進める。そして、大学生活を主体的に目標を持って過ごすことができるよう、自分自身の人生、大学生活の送り方について考える機会を提供する。	
	キャリアデザイン実践1	キャリアデザインとは、社会の中でどのように働き、どのように生きていくかを自分自身で考え、明確にすることである。一人ひとりが社会の中で自立して生きていくために必要とされる「社会人基礎力」について、グループワークを中心とした体験学習の中で、外部講師とともに考え、将来につながる学生時代の目標を立案する。この授業は主に第2学年を対象とする。	
	キャリアデザイン実践2	キャリアデザインとは、社会の中でどのように働き、どのように生きていくかを自分自身で考え、明確にすることである。一人ひとりが社会の中で自立して生きていくために何が必要なのか、自らの進路や将来について、グループワークを中心とした体験学習の中で、外部講師とともに考え、キャリアビジョンの計画を立てる。この授業は主に第3学年を対象とする。	
	ワード・プロセッシング入門	文章作成は現代社会人にとって必須のスキルである。そこで、文章作成のための技術や考え方をワープロソフトを利用しながら獲得する。具体的には、IMEIによる日本語入力の基本を身に付け、Microsoft Wordの基本操作および書式・レイアウト・罫線・図形などの諸機能について学ぶ。これらを通じて、基礎的な各種文書の作成やデザイン・印刷の方法などを習得し、社会において必須の技能の獲得する。	
	ワード・プロセッシング応用	論理的な文章を作成するには、文章のアウトラインを作成しながら、思考を整理しなければならない。そのためのツールとしてワープロソフトが活用できる。そこで、日本語入力やMicrosoft Wordの基礎を習得している学生を対象に、アウトライン・スタイルなどの機能を用いた文書作成の方法を学ぶ。それとともに、総合演習課題（評論文の作成などを予定）への取り組みを通して、より応用的な文書作成の技術と思考の習得をめざす。	
	PC利用による表計算入門	数理解析の専門分野だけでなく、データベースの処理や文献の管理、予定の管理など、日常的の様々な場面で表計算ソフトを利用する必要がある。したがって、現代社会においてこの技能は必須のものである。そこで、この技術を獲得するためには、基本的なソフトの理解をしながら、その考え方を獲得していくことが効率的である。そこで、本授業では、Excel を利用した表計算についての基礎的な事項を学習する。それにより、情報の処理能力を高める。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
現代総合科目 キャリア形成系科目	PC利用による表計算応用	表計算を活用することで、様々なICTへの応用が可能となる。そのため、基本事項は表計算ソフトを深く理解する必要がある。そこで、基礎的なExcelの活用を理解した上（「PC利用による表計算入門」の内容相当のことを理解している）で、Excel を利用した表計算について応用的な事項を学習する。具体的には、データベースにも活用できるような関数だけでなく、VBAなどのマクロを活用することで、多様な分野で活用できる力を養成する。	
	PC利用によるプレゼンテーション	コンピュータを用いたプレゼンテーションの手法の基礎について学ぶ。まず、図像の効果的な利用方法などを、Microsoft社製Powerpointを用いて練習する。次に、技術だけではなく、自分の考えをいかに相手に効果的に伝えるか、学会発表などでよく見られる発表形式を模擬することにより学習し、人前で発表出来るスキルを身につける。この授業を最後までやり抜けば、卒業論文・卒業研究を作成するために必要な知識が得られる。	
	PC利用によるレポート・論文技法	学術的な目的だけではなく、多様な目的でレポートや論文の作成技術は必要であり、現代社会では必須の力であるといえよう。論文やレポートの作成においては、PCを活用することでその効率は飛躍的に向上する。そこで、パソコン・ソフトを用いて、形が整ったレポート・論文を作成する。これにより、単にソフトの使い方に習熟するのではなく、他者に対して理解しやすい文章を作成する力を養成する。	
	画像処理入門	デジタル技術の発展により画像を使い、多様な表現が可能になった。ただし、多様な表現を実現するには、単に画像を使うだけでなく、それを処理することで可能になる。そのためには、デジタル画像とは何かということを理解した上で、適切な処理を行う必要がある。そこで、簡単な画像を作成し、画像を加工・編集しながら、コンピュータで画像ファイルを扱う基礎を学ぶ。これにより表現するとは何かということについて考える力を養成する。	
	画像処理応用	画像のデジタル化は画像処理を万人に開放した半面、基礎理解ができていないがために不適切な表現を示す可能性も増加した。この問題を解消するためには、本来の画像（アナログ画像）とデジタル画像の基礎知識や違いを理解した上で、デジタル画像を処理していく必要がある。そこで、デジタル画像以前の写真とデジタル画像の違いを実際に比較しながら、画像処理のノウハウを学ぶ。これにより、写真画像を適切に理解することで画像処理の基礎を確立し、デジタル時代にふさわしい画像制作をする力を養成する。	
	PCミュージック入門	音楽は人間にとって必要な娯楽である。かつては特殊技術であった音楽の作成がPCの出現により、専門家でなくとも可能になった。しかし、作成技術と適切な音楽とは必ずしも対応するものではない。適切な音楽を作成するには、デジタルデータとは何かといった基礎知識からその適性までを理解する必要がある。そこで、PCで音楽データを作る手法、MIDIデータや音源ファイルの概要および音楽の基礎を学ぶ。これにより音楽作成を楽しむとともに音楽とは何かということを考えるきっかけとする。	
	PCミュージック応用	デジタル技術の発展により多様な音楽的表現が可能になった。ただし、その実現のためにはソフトの理解ではなく、適切な知識をもとにその可能性を探ることが必要である。音楽的な知識の理解のためには、実際に音を作りながら考えるのが最も効率的である。そこで、PCによる音楽データの作成を通じて音楽に関するさまざまな知識を学ぶ。これによりデジタル技術を使った高度な音楽表現技術を養成するとともに、多様な表現技術やそのための思考力を身につけることを目指す。	
	Webサイト構築入門	情報発信ツールとしてWebの力は大きい。Webページのコンテンツ自体はツールを利用して作成できるが、より高度なデザインやWebページとは何かを理解するには、その基本原理であるHTML・CSSを理解する必要がある。また基礎を理解することで、情報発信のツールとしての特性も理解することができる。そこで、HTMLおよびCSSを利用し、Webサイト構築に必要な基礎知識・技術を学ぶ。これにより、情報社会の情報発信の意義を理解する。	
Webサイト構築応用	Webの情報発信力の要因の一つは、インタラクティブな表現ができることにある。この表現にはJavascriptのようなプログラミングの理解が必要となる。そこで、Webの基礎であるHTML・CSS（Webサイト構築入門）の理解を発展した上で、Webサイト上でインタラクティブな表現をJavascriptによって構築する手法を学ぶ。これにより高度な情報発信力を養成する。		
自然生命系科目	生命のしくみと多様性	私たち「ヒト」は生命の中の一つの生命現象である。したがって、「ヒト」を理解するには「ヒト」という存在だけではなく、他の生物の関わりの中で理解しなければ、人間理解は成立しない。そこで、「ヒト」と他の生物（特に脊椎動物）の生命現象について、その概要を紹介する。ヒトとその他の生物を同時に学ぶことで、生物の多様性を認識し、ヒトの生命現象についてより深く理解することを目指す。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
現代総合科目 自然生命系科目	自然と生物の科学	人間を含めた生命は進化の過程を経て現在に至る。したがって、ヒトを含めた生命を理解するには進化とは何かということを理解しなければならない。進化は環境という要因によって成立するが、その環境とは自然である。そこで、生物の進化についているるな角度から考える。それにより、地球という環境の中で他の生命と関わる人間という観点をもち、人間とは何か、生命とは何かを考える基礎を養成する。	
	地震と火山1	地震や火山による災害は重要な問題である。この問題に対処するためには、そのメカニズムを知ることが重要である。そこで、地球の全体像と内部構造をはじめに学習する。その上で、地球表層で現在起こっている変動について、プレートテクトニクスを基礎として理解することを目指す。地震波を用いて地球の内部構造が如何に解明されるかを知った上で、地球変動の代表である地震や火山が、世界的に見れば限られた地域で起こる原因と、それらの発生のメカニズムを考察する。	
	地震と火山2	人間社会において、地震や火山活動がもたらす災害は多大なるダメージを与えている。したがって、地震や火山の活動に対しての防災意識を養成しなければならない。地震や火山のメカニズムを理解することは、深刻な災害に対して人間がどのように考え、対処するべきかの視点を与える。そこで、地震や火山のプレートテクトニクスとの関わりを学び、地震と火山の基礎知識を習得する。そして災害に対する備えや意識を持ち、地球科学と社会活動とのあり方を考える。	
	地球科学1	現在の自然環境を考えるうえでは、自然を生み出す地球環境そのものの理解が重要である。地球環境を理解するためには多面的な理解が必要である。そのための視点として地球環境を構成するシステムについて理解する必要がある。そこで、地球表層で起こる気象現象や、地球を構成しているものについて学習する。その上で、地球のシステムが自然の道理の中で出来上がっている素晴らしいものであることを学習する。	
	地球科学2	現代社会や文化は人間という要因だけで成立するものではない。人間という要因以上に、その人間が暮らす環境を作り出した自然環境が重要といえよう。したがって、気候風土といった地誌的背景をもとに人間生活を生み出す地球環境を理解する必要がある。そこで、自然環境を、主に地球のシステムや地史的背景から学習する。これにより自然科学的な視点を加えて、人間社会や文化が成立した要因や背景を考察する力を養成する。	
	地球環境と生命の共進化	「平均気温摂氏15度、酸素21%を含む1気圧の大気」、現在の地球はこのような穏やかな環境のもとにある。しかし、過去の地球はいつもこのように穏やかな環境にあったわけではない。46億年前太陽系の一員として誕生した地球は、灼熱の高温状態であった。その後徐々に冷却しながら海が生まれ、その中で生命の誕生と数々の生物進化を経て、生物と地球はお互いに影響を与えながら、その環境を変化させてきた。本講義では、宇宙誕生から地球誕生までの初期の地球環境形成史、先カンブリア時代の生命と地球表層環境の共進化、古生代・中生代・新生代の生物の進化・絶滅と地球環境の変化を関連付けて学ぶ。	
	こころの科学	心理学の基礎理論を理解することによって人間、とりわけ自己を心理学的に深く理解することを目指す。具体的には、無意識のこころ、コンプレックス、学習理論、しつけの仕方、知覚の理論、認知の発達理論、心理テストの実施などを予定し、人間のこころと行動の理解、心理学のおもしろさの発見、自分のこころとの出遇いを目指す。	
	人間理解の心理学	人間の心理的発達理論を通して、青年期を生きる自己理解を深め、心理テストさらには人間に共通の心理特性への理解を深めて、対人関係を豊かにすることを目標とする。本講義では、(1)人間の生涯にわたる心理発達の過程と発達課題を理解して、自己の過去を振り返り、現在を見つめ、将来を見渡すこと。(2)人間の心理特性を理解して、円滑な対人関係を構築することを目指す。	
	スポーツと健康の科学1	スポーツ現場で起こる事象について心理学的視点から理解する。具体的には、スポーツ心理学の歴史的背景、生涯発達の視点からみたスポーツ、スポーツにおける動機づけ、運動好きと運動嫌い、指導者の及ぼす影響、チームの心理(チームワークとリーダーシップ)、怪我(心理学的意味と心理サポート)、スポーツ選手の心理サポートなどの諸点について考察を進めていく。	
	スポーツと健康の科学2	アスリートの心理サポート、特に試合の場における心理現象について考察していく。心理的問題を考え、どのように乗り越えるのか対策が立てられるようになることを目指す。具体的には、メンタルマネジメントの実際として、アセスメント、目標設定、セルフモニタリング、ピークパフォーマンス分析、集中力、パフォーマンスルーティン、ピーキングメンタルマネジメントの諸事例を学んでいく。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
現代総合科目 自然生命系科目	脳とこころ	脳の機能の基本的な知識、および脳とこころの関係を理解するとともに、こころの病気について知識を深めることを目的とする。脳の構造と機能について基本的な事項を学修し、神経系の機能や感覚器の概要、多岐にわたる脳の病気の症例やその対応などについて、具体的な事例を参照しながら考察を進めていき、脳の機能とこころとの関係、こころの病気についての基礎的知識の修得を目指す。	
	障害者スポーツ論	障害のある人のスポーツへの理解を深めることを目的としながら、「初級スポーツ指導員」資格取得に関する授業として、障害者スポーツ実践に役立てられることも目標としている。本講義では、(1) 障害者スポーツを知る、(2) 「障害」についての知識を身につける、(3) 障害のある人にとってのスポーツの意義を理解し、スポーツを通じたノーマライゼーションについて理解することを課題とし、その理解と実践のために、データ資料とビデオ資料を織り交えながら考察を展開していく。	
	生涯スポーツ・レクリエーション活動	本講義は、身体活動としてのスポーツと余暇活動をテーマとし、現代社会及び少子高齢化社会においてスポーツやレクリエーション活動が果たす役割について理解することを目標としている。また、障害者に関する「初級スポーツ指導員」資格取得に関する授業として、障害者スポーツ実践のための基礎理論の習得も目標としている。授業計画では、資料配付、ビデオ鑑賞、実体験、レポート作成などを交えながら授業を展開する予定である。	
	スポーツ研究演習Ⅰ	スポーツ実践を支えるからだ・心について具体的に考えながら、からだを動かすことの意味やスポーツとは何かについて考察する。本授業での考察を通じて、トレーニングの基礎理論・ウォーミングアップやストレッチなどを理解し、自己の体力に応じたトレーニングメニューを作成・実践することで、これからの自分自身の健康や体力を考える力を身につけることを目指す。	
	障害者スポーツ研究演習Ⅰ	本講義は、障害のある人のスポーツとからだを考えることを目的とする。具体的には、障害のある人のスポーツ（車椅子スポーツ、視覚障害者のスポーツ、レクリエーションスポーツ）の紹介とその実践を通して、障害や障害者スポーツについての基本的な知識を身につけ、障害のある人にとってのスポーツの意義を知り、障害の有無に関わらず参加できるスポーツを考察し、スポーツを通じたノーマライゼーションを理解する。	
	スポーツ研究演習Ⅱ	スポーツ実践を支えるからだ・心について具体的に考えながら、からだを動かすことの意味やスポーツとは何かについて考察する。本授業での考察を通じて、トレーニングの基礎理論・ウォーミングアップやストレッチなどを理解し、自己の体力に応じたトレーニングメニューを作成・実践することで、これからの自分自身の健康や体力を考える力を身につけることを目指す。	
	障害者スポーツ研究演習Ⅱ	本講義は、障害のある人のスポーツとからだを考えることを目的とする。具体的には、障害のある人のスポーツ（車椅子スポーツ、視覚障害者のスポーツ、レクリエーションスポーツ）の紹介とその実践を通して、障害や障害者スポーツについての基本的な知識を身につけ、障害のある人にとってのスポーツの意義を知り、障害の有無に関わらず参加できるスポーツを考察し、スポーツを通じたノーマライゼーションを理解する。	
	カウンセリング	カウンセリングを、心理学の実践の場ととらえ、カウンセリングの基礎である臨床心理学を中心に、カウンセリングの理論を理解する。また、事例論文を読み、カウンセリングの流れをつかむ。考察の流れとしては、カウンセリングの歴史と背景、主要理論、対象と外的枠づけ、さまざまな技法、正常と異常の理解、カウンセリングが必要になるときなどの項目を学び、事例論文を基にした事例検討をおこなう。これらの考察を通して、カウンセリングの理論的背景や専門性を学び、精神的健康について理解することを目指す。	
	身体活動Ⅰ	身体活動の体験には、からだや心、コミュニケーション、行動力などの意識を高める要素が含まれている。バドミントン、バスケットボール、バレーボール、卓球の各競技のスポーツ活動を通じて、自己表現力を高めることを目指す。各競技においては、種目別実技の基礎技術の理解、基礎技術の応用、ゲームの知識と実践、ゲーム方式の検討と工夫を考察し、発表していく。	
身体活動Ⅰ（障害者スポーツ）	障害のある人のスポーツを理解することを第一目標として、障害の種類や程度に応じて行われているスポーツ種目を実体験する。具体的には、(1) 視覚に障害のある人のスポーツ（誘導、伴走、独歩、ボール扱い）(2) 車椅子使用のスポーツ（スラローム競技）(3) 障害者とレクリエーション・スポーツ（輪投げ、ペタンク）について基本的な必要技術を確認する。		

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
自然生命系科目	身体活動Ⅱ	身体活動の体験には、からだや心、コミュニケーション、行動力などの意識を高める要素が含まれている。バドミントン、バスケットボール、バレーボール、卓球の各競技のスポーツ活動を通じて、自己表現力を高めることを目指す。「身体活動Ⅰ」での学習に引き続き、バドミントン、バスケットボール、バレーボール、卓球を開講し、各競技の種目別実技の基礎技術の理解、基礎技術の応用、ゲームの知識と実践、ゲーム方式の検討と工夫を考察し、発表していく。	
	身体活動Ⅱ（障害者スポーツ）	障害のある人のスポーツを理解することを第一目標として、障害の種類や程度に応じて行われているスポーツ種目を体験する。「身体活動Ⅰ（障害者スポーツ）」に引き続き、(1) 視覚に障害のある人のスポーツ（ゴールボール、フロアバレーボール、盲人卓球）(2) 車椅子使用のスポーツ（車椅子バスケット、車椅子テニス）(3) 障害者とレクリエーション・スポーツ（輪投げ、フリーロー）について基本的な必要技術を確認する。	
	人間関係と身体表現	ノンバーバル（非言語）コミュニケーションについて基本的な理論を知り、実際の活動場面での体験をおして、日常的な生活のなかで実践できるようになることを目標とする。言葉での情報伝達が中心と考えがちな人と人とのコミュニケーションについて、言葉以外の要素（ノンバーバル）に着目し、知識を深め、さまざまな場面で実践を経験し、ノンバーバルコミュニケーションを活用する。	
	障害者・病者と共に生きる	授業の中心に据えるハンセン病問題への学びをおして、「差別から人間が解放されるとは一体どのようなことなのか」という課題を深め、差別を見抜き、それを許さない自己自身の確立と、「共に生きる」ということを自らの課題として受けとめていくことを授業の目標とする。近現代日本の絶対隔離政策の実際とその背景および、厳しい隔離と差別の中で、人間回復の闘いを続けてきた人たちの運動の歴史と現在を学習し、「障害者」「病者」と共に生きるということ、各人の主体の上に確かめていく。	
現代総合科目	ヨーロッパの宗教と文化（ドイツ）	事前講義では、現地研修をおこなう動機の向上を目的として、研修に必要なドイツ語の基礎をレクチャーし、映像資料を用いて各研修地の生活と文化の特徴を考察する。現地研修では、リュデスハイム、コッヘム、ローレライを訪問し、大学町であるハイデルベルクでは日本の大学とのちがいを視察し、ミュンヘンでは、事前学習の成果をふまえて、美術館を中心に積極的にグループ行動をおこなう予定である。事前講義と現地の人々との交流体験学習を通じ、ドイツ文化のみならず、異文化理解に必要なさまざまな事柄をひろく修得する。	
	ヨーロッパの宗教と文化（フランス）	フランスの豊かな生活文化や地方の風景・歴史的建造物などにじかに触れ、具体的知識だけでなく内面的視野をも広げることを目的とする。事前講義では、研修に必要な最低限のフランス語会話、および、歴史や文化についての基礎知識を習得する。現地研修では、パリのほか、ロワール地方、モン・サン・ミッシェルとジヴェルニーを訪れる予定である。事前講義と現地の人々との交流体験学習を通じ、フランス文化のみならず、異文化理解に必要なさまざまな事柄をひろく修得する。	
	現代朝鮮半島事情	朝鮮半島の人びとが経験した日本による植民地支配、朝鮮戦争から現代に至る歴史を概観したうえで、韓国と北朝鮮の政治・経済・社会・文化の現状と課題について、安全保障体制、民主化、産業や労働、芸能やスポーツ文化など、さまざまな具体的トピックを交えつつ検討し、理解を深める。また、日本、韓国、北朝鮮、在日の人びとそれぞれの相互理解や交流の現状と課題、マスメディアやSNSがそれに果たす役割、日韓世論動向などにも言及する。	
	現代東南アジア事情	東南アジア諸国と日本は、過去から現在にいたるまで政治経済面で緊密な関係にある。講義では、東南アジアの地理や現代史に関する概括的知識を確かめたうえで、東西冷戦体制が終焉し東南アジアに経済の時代が訪れて以降、政治・経済・社会・文化の各側面でのどのような状況が生じているかを、タイなどいくつかの国に焦点を当てて概観する。国レベルだけでなく、地方の人びとの暮らしや人間関係や意識にも目を向ける。映像資料を適宜、視聴し、履修者が具体的なイメージを持って、考えることができるよう配慮する。	
歴史文化系科目	東南アジアの宗教文化	東南アジアではさまざまなエスニシティの人びとが暮らしている。彼らの少なからずはそれぞれに自前の精霊（カミ）を祀っている。そして仏教やイスラムなど世界宗教の信徒でもある。講義では、たとえば、東南アジア大陸部の上座部仏教とそれに帰依する人びとに焦点を当てる。僧侶、サンガ、寺院、経典等について説明する一方で、在家信徒の宗教意識や儀礼実践、近現代の社会変動と宗教文化との関連などに言及する。具体的な事例を検討するなかで、当地の人びとの宗教生活の様態への理解を深める。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
現代総合科目 歴史文化系科目	近代日本とアジア	19世紀における日本の歴史、特に誰でも知っているであろう「ペリー来航」という事件の周辺を、世界史の中の日本、東アジアの中の日本、という視点から描き直す。歴史の時代区分という問題、世界史における「近代」、東アジア史における「近代」、東アジアにおけるイギリスとアメリカ、ペリー来航の意義などの考察を通して、日本史/世界史という二区分の発想から頭を解放する。これらを通して、歴史を大きくとらえる視点を養い、一つの事件の歴史的な背景を探る姿勢を身につける。	
	東アジアの宗教文化	中国近世の宗教と国家をテーマに、宋から清代に至る中国近世において、宗教は国家といかなる関係を取り結び、どのような歩みを辿ったのか、そこにいかなる宗教文化が形成されたのかを概観する。「大蔵経」と「道蔵」の開版、新儒教と新道教、仏道論争の経緯、宗教結社と秘密結社、宗教と「反乱」などの考察を通して、中国近世（10～19世紀）における儒仏道三教およびその他の宗教や民間信仰の歴史とそこから生み出される文化について基礎的な理解を得る。	
	古都の歴史と文化	京菓子は平安時代にまでつながる文化の所産であり、日本独自の食べ物に発展し今に伝わり生活に生き続けている。授業を通してお菓子の文化を知り京都の生活文化を理解する。また京菓子だけではなく、いろいろな京都の工芸品の意匠(デザイン)に影響を与えた俵屋宗達・尾形光琳などの琳派について学ぶことにより、京都の意匠(デザイン)の奥深さについても理解していく。	
	仏教と美術	本講義は、荘厳の世界を具体的な事例をとおして考察していく。「荘厳」とは目に見えない仏の世界を形にあらわすことである。仏教に関わる美術や工芸が、寺院の荘厳をどのように実現しているのか、その技術や思想、歴史的・文化的背景について考察する。これらの荘厳に関わる一つひとつの文化が、どのように仏教と関わるのかを考えることを通じて京都の伝統文化のあり方を理解していく。	
	インドの宗教と文化	事前講義においては、仏教を中心としたインドの宗教や文化・歴史の概要について学ぶ。また現地研修では、インド北東部やネパールに点在している四大仏跡などの仏教遺跡を中心に、インドの大地を2週間かけて巡り、インドの文化に肌で触れる。事前講義と日本とは環境が大きく異なる国を訪れる現地研修での学びを通して、私たちが日頃当たり前と思っている自分の日常やものの考え方を反省的に問い直し、異文化を理解する視座を身につける。	
	中国の宗教と文化	日本の宗教と文化に決定的な影響を与えた中国。この研修は、中国を代表する仏教遺跡を実際に訪ね中国と日本、双方の宗教と文化理解を深めること、また急速な経済発展を遂げている「現代の中国」と、変わらずある「悠久なる中国の歴史と文化」と理解することを目指す。現地研修では、西安や洛陽、敦煌などを訪れる予定であるが、親鸞に影響を与えた浄土三祖関係をも視野に入れたコース設定となる。準備として、中国仏教史や浄土三祖伝などの事前講義を行う。	
	人と文化	男性と女性の身のまわりの出来事に視点を当て、そこに写し出される人間行動の諸相を明らかにする。男女差と文化、ジェンダー、結婚の類型、インセスト・タブー、同性愛、女人禁制などのテーマを考察していくことで、文化人類学がどのような学問なのかを理解し、その研究視点について修得する。そのうえで、人類における男性と女性の多様な価値観が理解できることを目標とする。	
	教育学1	本講義は、教育観の歴史と教育の理念をテーマとする。具体的には、西欧近代における教育思想とその背景にあることも観の歴史の変遷、および近代以降の日本における教育制度と教育実践の歴史的展開を考察し、教育の意義や目的について自らの問題として考えることができ、現代社会における教育の課題を理解し、それに対する自分の考えをまとめて討論に参加することが出来るようになることを目的とする。	
教育学2	教育と人間とはどのように関係しているのかを学んでいく。まず、わたしたちの受けてきた教育を振り返り、教育はどのように生まれしてきたかを見る。その後、教育現象の具体的なテーマとして、子どもと教育、学校(教育)における病理現象、家庭と教育を取り上げ考察を深めていく。本講義をとおして、教育が人間に及ぼす影響について教育学の知見を学んでいくことはもちろん、社会学・心理学・哲学等、教育学の周辺領域についての知見も取り入れ、教育について深く考えることができるようになることを目指す。		

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
現代総合科目 歴史文化系科目	ブッダに学ぶ	ヒマラヤ山脈の麓に広がるチベット。そこではおもにインド大乘仏教と後期密教の伝統が継承され、仏教が人々に根付いている。一方で仏教と同じく輪廻からの脱出と成仏を目標としながら、チベット土着の宗教伝統を受け継ぐユンドゥン・ポンの教えもこの地には存在する。こうしたチベットの宗教の中で、ブッダはどのように描かれ、どのような教えを説いたとされるのかを俯瞰しながら、そこから我々が何を学ぶべきかを考える。	
	親鸞に学ぶ	親鸞の生涯とその基本的な思想を学ぶことを通して、現代を生きる私たち人間の課題について考える。親鸞は、その生涯を通して「人間の真実の生き方」をたえず問い続けていった人である。親鸞の言葉をてがかりに、その人間観を学ぶ。親鸞は、二十年に及ぶ比叡山での自力修行を棄てて、法然の専修念仏の教えに帰依する。これは親鸞の生涯において決定的な出来事であり、自らその事実を「雑行を棄てて本願に帰す」と告白している。これは、単にそれまでの自力修行を止めて、他力に切り替えたという意味ではなく、人間の本質がどこにあるのかを見出したことに他ならない。現代を生きる私たち自身の生き方をこの事実から問い尋ねていく。	
	部落差別と大谷派教団1	部落差別と大谷派教団との関わりをたどり、差別を傷む心の回復を求める。まず、部落差別の過去と現在を概観し、部落差別と仏教、ことに真宗大谷派教団との関わりはどのようなものであったかを、親鸞と当時の被差別民のありかたや、大谷派教団の差別事象、差別事件等を通して見ていく。これらを通して、大谷派にとって部落差別という問題のもつ意味を考える。また、人権とは何かについても学ぶ。部落差別問題とは、誰が、何を、どうしようとするものなのか、またそこから何が願われているのかを考察し、学習の主体と目的を明らかにする。	
	部落差別と大谷派教団2	親鸞と中世賤民のありかた、大谷派教団の差別事象を通して見ていく。また全国水平社による東西本願寺教団批判のもつ意味を考える。水平社は誕生と同時に、東西両本願寺教団に対して「募財拒否」を行っている。部落大衆の「貧困」が理由であると述べられているが、その底流には本願寺の募財のあり方が、差別を拡大し再生産しているという強い批判があった。「御同朋、御同行」と民衆を呼んだ親鸞の精神と、それに背いている教団の在り方への水平社の批判を通して、あらためて、現代における真宗教団の意義を確かめ直すことを課題とする。	
	部落差別と浄土真宗1	大谷大学人権問題学習テキスト『差別のない世界を求めて』の精読をとおして、差別とは何か、部落差別とは何か、人権とは何かについて学ぶ。部落差別問題とは、誰が、何を、どうしようとするものなのか、またそこから何を願われているのかを考察し、学習の主体と目的を明らかにする。また、仏教（釈尊）と浄土真宗（親鸞）の思想が、この問題とどのように関わっているのかその視座を確認する。	
	部落差別と浄土真宗2	親鸞が開頭した浄土真宗の教えに立って、差別とは何か、部落差別とは何か、人権とは何かについて学び、人間が人間であるためにどのように生きていくべきかを考えていく。「部落差別と浄土真宗2」においては、「部落差別と浄土真宗1」で学んだ差別の歴史が単なる知的学習に終わるのではなく、自分自身の生き方とどう関わるのか、自らもまた差別する体質を持ち、差別している事実を学生自身に問いかける内容としていく。具体的には、親鸞の言説を確かめることを通して、信仰の内容と社会的差別に関わることが、別のことではないことを確かめていく。	
	部落史論1	日本独自の差別である部落差別は、どのようにして生みだされたのか。また、なぜ、どのように今も存続しているのかを学ぶことによって、差別を傷むところを回復する。部落差別という問題をその起源からアプローチし、日本の歴史を通じて、どのようにしてその差別が存続されてきたかについて、時代を追って学んでいく。特に「部落史論1」では、おもに中世から近世までの歴史資料の中から、人間の持つ差別性、浄穢観の形成と肥大化および、被差別者の諸相について確かめる。	
	部落史論2	「部落史論1」に続いて、日本独自の差別である部落差別は、どのようにして生みだされたのか。また、なぜ、どのようにして今も存続しているのかを学ぶことによって、差別を傷む心を回復することを目的として授業を行っていく。「部落史論2」では、ことに明治以降から現在に至る部落問題-国家による被差別部落対策としての政策、被差別部落観の推移などを見ていく。これらを通して、現在から未来に向けて、何が求められているのかを私たち一人ひとりの課題を確かめる形で模索していく。	
反カースト運動論	カーストからの解放を求めて仏教に改宗したアンベードカルと、インド独立の父とも称されるガンディーの、人と思想を通して、それぞれの歴史的意味を考える。アンベードカルは、1954年にインド仏教徒協会を創設した。1956年12月に死去する2ヶ月前に三宝・五戒を授けられることで正式に仏教徒となる。これに続いて50万人もの不可触民（ダリット）と呼ばれる人々も仏教へ改宗し、新仏教運動へのきっかけとなった。彼は、徹底してカーストからの解放を願ってその生涯を解放のために捧げた。彼の生涯と思想的足跡をたどり、反カースト運動の意味を考察していく。		

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
現代総合科目 歴史文化系科目	アイヌ民族と共に	異民族としてのアイヌの民族文化を学び、異なった民族と共存する道を求める。アイヌ民族は、主に北海道、樺太、千島列島に居住する先住民族で、かつては東北地方北部からロシア・カムチャツカ半島南部に及ぶ広い範囲に居住し、狩猟・漁労に従事しながら、大陸との交易を盛んに行っていた。母語はアイヌ語で、固有の文化や生活習慣を有している。そのアイヌのもつ文化、和人との交流史などを確かめていく。先住民族の文化を学び、同時に侵略の歴史も学ぶことを通して、今何が求められているのか、私たち人間としての在り方も含め考えていく。	
	アジア侵略と宗教	人権理論、平和理論の今日の到達点を学び、日本国内、アジア太平洋地域を始めとする世界の人権・平和問題を分析する視点を培う。特に、戦前、戦中の宗教とりわけ仏教者の言説を中心に歴史を掘り起こし、その課題を探る。戦争を正当化する思想（靖国神社問題等）について学び、グローバルな人権と平和について考察する。過去の歴史を学ぶことを通して人権問題と平和が深く関わっていることを学ぶ。具体的には、宗教的人格権や平和的生存権を獲得する取り組みから現在の課題を学ぶ。人間解放の思想としての平和論（仏教思想）について考察する。	
	非戦の系譜	明治期の対外戦争への批判の跡をたどり、現代に生きる自らの戦争観をはっきりさせる。特に日露戦争における社会主義者、クリスチャン、仏教者の反応の跡をたどり、開戦論、非戦論の双方をみながら、明治後半期の日本の課題と現代に生きる私たちの戦争観を考える。また当時、和歌山県新宮を中心に非戦と平等を願い求めた大谷派の僧侶・高木顕明についても学ぶ。彼は「大逆事件」の罪を着せられ連座。さらに大谷派は高木顕明を住職差免僧籍剥奪をしている。国家の体制とそれに対して宗教が持つ意味についても、歴史を検証しつつ学んでいく。	
	仏教福祉論	授業の前半では「寺の意味」について考えたい。寺院消滅、コミュニティの崩壊という現実を突きつけられて、私たちは何を失い、何を守らなければならないのだろうか。海外に点在する日系寺院の活動からは、国内の寺院活動とはまた違った視点が見えてくる。授業の後半では「スピリチュアル・ケアの実践」について考えたい。高齢者ケアの現場やホスピス／ビハーラ活動の現場を紹介しながら、同ケアの実践について理解を深めたい。	

(注)

- 1 開設する授業科目の数に応じ、適宜枠の数を増やして記入すること。
- 2 私立の大学若しくは高等専門学校の出定員に係る学則の変更の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合、大学等の設置者の変更の認可を受けようとする場合又は大学等の廃止の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合は、この書類を作成する必要はない。